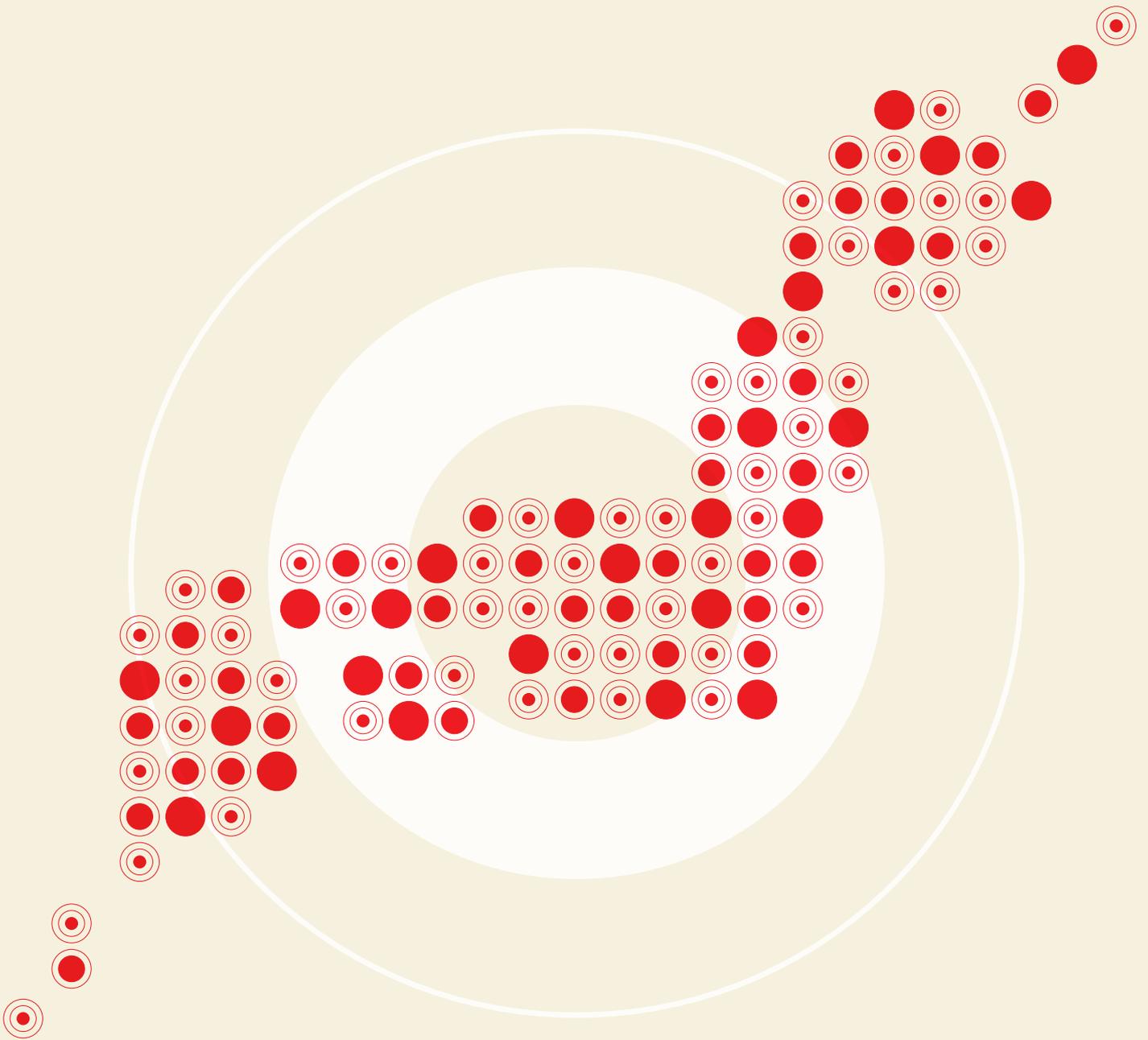


平成30年度

# 文化芸術創造都市推進事業

## 成果報告書



# 目次

---

<b>第1章 創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の活動報告</b>	
(1) 幹事団体会議の開催	… 2
(2) 創造都市ネットワーク会議（総会）	… 3
<b>第2章 国外の取り組みに関する情報収集</b>	
(1) ユネスコ創造都市ネットワークへのヒアリング調査	… 4
(2) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 プログラム	… 5
(3) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 結論	… 5
<b>第3章 会議、研修の実施</b>	
(1) 現代芸術の国際展部会 in 新潟市	… 9
(2) 創造農村ワークショップ in 石垣市	…10
(3) 創造都市政策セミナー in 金沢市	…11
(4) 分科会	…12
(5) CCNJ平成30年度創造都市ネットワーク会議公開シンポジウム 「音が都市を創る～サウンドデザインが未来を拓く」	…13
<b>第4章 活動促進、交流促進、CCNJウェブサイトの運営、その他</b>	
(1) 活動促進、交流促進	…14
(2) ウェブサイト情報発信力の充実	…16
(3) その他	…17
<b>第5章 CCNJ：現状の課題と今後の展望</b>	…18
<b>添付資料</b>	
・現代芸術の国際展部会 in 新潟市	…21
・創造農村ワークショップ in 石垣市	…28
・創造都市政策セミナー in 金沢市	…41
・創造都市ネットワーク会議（総会）	…63
・創造都市ネットワーク会議（総会）資料 「文化芸術創造都市推進事業の現状と今後の在り方に係る問題提起」	…75

## 第1章 創造都市ネットワーク日本（以下、CCNJ）の活動報告

### (1) 幹事団体会議の開催

#### 1) 平成30年度第1回幹事団体会議

日時 平成30年5月31日（木）14：30～

会場 文化庁6階 第二講堂

参加者 札幌市、八戸市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市  
文化庁、顧問、事務局  
（オブザーバー）文化庁地域文化創生本部

〈報告事項・意見交換〉

参加登録状況について

平成30年度 事業計画と役割分担について

平成31年度 事業計画（案）について

創造農村部会について

#### 2) 平成30年度第2回幹事団体会議

日時 平成30年8月23日（木）13：30～

会場 新潟市役所本館3階 対策室1

参加者 札幌市、八戸市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市  
文化庁、顧問、事務局

〈報告および承認事項・意見交換〉

参加登録状況について

平成30年度事業計画の進捗確認について

分科会について

平成31年度事業計画（案）について

#### 3) 平成30年度第3回幹事団体会議

日時 平成31年1月31日（木）10：30～

会場 アクトシティ浜松コンgresセンター43会議室

参加者 札幌市、八戸市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市、石垣市  
文化庁、顧問、事務局

〈報告および承認事項・意見交換〉

参加登録状況について

平成30年度総会の議案について

平成30年度総会の進行について

「創造農村部会」の設立に向けての検討状況について

## (2) 創造都市ネットワーク会議（総会）



日時 平成31年1月31日（木）13：30～

会場 アクトシティ浜松コンgresセンター41会議室

主催 文化庁、創造都市ネットワーク日本

共催 浜松市

出席団体 自治体55、団体7、個人会員1名 議決にかかる定員63

〈次第〉

鈴木康友浜松市長挨拶

宮田亮平文化庁長官挨拶

議案審議

第1号議案 平成30年度事業報告について

第2号議案 平成31年度事業計画（案）について

文化庁からの報告・連絡

CCNJ顧問による総括

CCNJ新規加盟団体の紹介

事務局からの連絡

## 第2章 国外の取り組みに関する情報収集

### (1) ユネスコ創造都市ネットワークへのヒアリング調査

平成30年6月12日～15日の4日間、ポーランド共和国・クラクフおよびカトヴィツェにおいて、ユネスコ創造都市ネットワーク（UNESCO Creative Cities Network、以下UCCN）の年次総会が開催された。総会には、50人以上の市長や副市長を含む350人が参加し、SDGs、特に11番目の達成目標（持続的な都市とコミュニティ）を達成するための誓約を再確認し、政治的かつ戦略的な対象について検討された。

平成31年2月15日、ユネスコ本部において、UCCN担当のDenise Bax氏へヒアリングを行った。そこでBax氏は、総会が持つ2つの目的について語った。

ひとつめの目的は、これまで接点のない都市同士が会合の場とし、各加盟都市の実施事項を互いに理解する、ということだ。

現在のUCCNは、『加盟国』と仕事をするごとと、『city（以下都市とする）』の単位で仕事をするごとを重視している。都市単位による活動の利点は、さまざまなアイデアを実験、応用することができることだ。Bax氏は、「ユネスコはアイデアを出す機関であり、複数の都市において政治プログラム（アイデアのひとつひとつ）をテストすることができる」と述べている。それは、全ての加盟都市が画期的な政治プログラムをテストするだけではなく、その結果をUCCN全体で共有し、各都市が自らの環境に合わせて応用することに繋がる。

総会のもうひとつの役割は、「理想の都市 ‘The Ideal City’」を考えることにある。

現在、各都市において議論の中心を占めているテーマは、「文化」や「創造性」である。しかし、世界の各都市が集まる総会では、「文化」や「創造性」だけではなく、エネルギー問題といった社会的問題まで、論点を深めることができる、とBax氏は指摘する。

今年度の総会に、自国の深刻な事情により参加できなかった都市があったそうだ。しかしそれによって、その深刻な問題を「デザイン」を使って解決する、ということが総会の話題にのぼった。つまり、「音楽」や「クラフト&フォークアート」などのUCCN各分野において、都市は高度な専門性を求められるだけではない。それぞれの分野をどのように生活の中に組み込むか、が問われるのである。

UCCN加盟にあたり、世界遺産がその都市にあるかどうか、ということではない。むしろ、加盟都市やそれ以外の都市に対して「何を提案できるのか」、ということがひとつの基準だそうだ。先にも述べたが、総会は都市同士の繋がりが生まれる機会である。それを契機に、何を生み出すことができるか、を考えるべきである。

Bax氏は、2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」について、加盟都市それぞれが理解する重要性を指摘している。「文化」と「創造性」が、互いにクロスオーバーしているためである。そして、そのことを十分に意識した活動をしなければならない。各都市の目標を支援することがユネスコの役割であり、他の都市をアソシエイトしていくことは加盟都市の使命なのだ。

最後にBax氏は、「日本のネットワーク（CCNJ）はしっかりと確立されている印象を持っている」と語った。既存のネットワークを情報交換の場として活用するだけではなく、得た情報を、自らの都市でどのように活用できるかを具体的に考え、実行に移さなければならない。これまでの功績を羅列し、受け身でいる時代ではない。都市各々が企画力と提案力を持ち合わせ、全ての都市がリーダーシップを発揮するすることで、「理想の都市 ‘The Ideal City’」に向けた相互作用が期待されている。

## (2) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 プログラム

開催地：クラクフ&カトヴィツェ（ポーランド）

開催日時：2018年6月12日～15日

### プログラム

2018年6月12日から15日にかけて、第12回ユネスコ創造都市ネットワークUNESCO Creative Cities Network UCCN年次総会が、認定都市のクラクフとカトヴィツェ（ポーランド）で開催される。「創造のクロスロード（交差点）“Creative crossroads”」が今年の会議における共通テーマであり、認定都市の地域的・国際的な行動を推進し、ネットワークの核である協働精神を称える。創造分野、地域、規律の違いを越えて、革新的な協働を促進することは、今年の会議における共通の大望である。アイデアを共有し、結びつけ、協働で考案するよう認定都市を促すため、テーマに関連したワークショップから多分野に渡る会合にいたるまで、革新的な相互作用の形が提案される。そこでは共同の新しい試みを反映するため、認定都市が創造的意見を出し合うことが可能である。

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に向けて認定都市の地域的・国際的な努力を合理化することは、ネットワークの戦略的構想の主要目標であるとして、2017年7月に承認された。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、地球規模の目標に対して、文化創造に関する地域活動力を証明するための入り口を提供している。ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）は、都市が「17の持続可能な開発目標」を実行する多くの革新的な方法を披露するための、重要かつ目に見えるプラットフォームとしてすでに世界的に認識されている。認定都市は多数のテーマに関連した新しい構想を通じて地域で革新し、事務局はこれらの革新的な経験を記録し表明するため、Lab.2030構想に着手した。この蓄積した知識を発展の土台にすることが今年の総会の中心となり、創造的分野のワークショップでも取り込まれるだろう。

より持続可能で包摂的な都市への道筋作りは疑う余地なく困難な挑戦であり、世界中の都市社会と経済における重要な変化を予測するために決定的で積極的な政治的関与や、地方自治体と創造的コミュニティ間の活発な協働だけでなく、先見的で創造的な思考が必要である。

我々はどのようにして社会的な団結と異文化間の対話をより活性化させ、都市において文化的多様性を認めることができるだろうか。どのようにデジタル時代が、我々の働き方、生産方法、相互作用の仕方に影響を与えるだろうか。

どのように地球の未来への世界的懸念が、都市コミュニティに生産と消費パターンを再考するよう駆り立てるだろうか。どのように文化と創造が都市生活の質を改善することができるだろうか。これらの非常に重要な問題は、2018年のユネスコ創造都市ネットワーク年次総会の議論の中心となるだろう。

## (3) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 結論

我々ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）の加盟都市は、ポーランドのクラクフとカトヴィツェ主催の2018年年次総会のため集結し、開催都市のもてなしに感謝の意を表すとともに、ユネスコの使命と価値の認識を再確認し、UCCNの使命と目標を誓い、「持続可能な開発目標」、特に、文化主導の持続可能な都市開発のために国際的コミュニティ内で大きな活力を求め「ゴール11」に携わり、議論を交わし、以下の項目に合意した。

1. UCCNは、都市での持続可能な開発に向けて革新的なアイデアを出し、それを実行するための都市研究所を運営する世界的ネットワークとしての立場を再確認する。

文化的交差点と世界的な創造の中心として、当ネットワークは先の年次総会で認定都市に承認されたUCCNの戦略的構想を介して、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」と「ニュー・アーバン・アジェンダ」をネットワークの指針とする。
2. 加盟都市は、文化創造分野の世界規模の急速な発展の勢いを歓迎し、デジタルや人工知能、持続可能な参加型観光事業、新興巨大都市、地方都市ネットワーク、品質教育、そして特に女性と若い世代ための起業家活動を含む、文化創造分野における主な傾向と優先事項を承認する。加盟都市はこれらの分野で、他の認定都市と共に特に国際的な繋がりを通じ、資源への投資と地域の経験、ノウハウの共有に携わる。
3. 加盟都市は、ユネスコとUCCNの価値とビジョンに深く関わり、地域レベルでの持続可能な開発の先駆けとなっている。認定都市は、ユネスコとUCCNのDNAの一部としてそれらのビジョンに文化を統合し、地域の人々に価値を伝え、創造分野の変動的な可能性について認識を育み、文化の力を備えた持続可能な開発において地域の政治的関与を促すために集められる。
4. 加盟都市は都市間の協調関係と協力を促す重要性のみならず、UCCN年次総会におけるサブネットワーク会議の相補性を承認する。サブネットワーク会議は、新たな加盟都市の統合をさらに促進するために補強されなければならない。事務局は、各加盟都市に2年ごとの年次総会の周期で、少なくとも1回または2回の正式なサブネットワーク会議を開くことを促し、それらの会議の概念化、組織化、そして成果に関する主な情報を事務局への周知するよう促す。
5. UCCNステアリンググループ（SG）は事務局と認定都市のコミュニケーションを強化するために、また、ネットワークとサブネットワークレベルの両方の活動への認定都市の参加を促進するために、中国の成都で開催された第8回年次総会で設立された。ステアリンググループは可能な限りあらゆる地域が代表を務めるよう構成される。代表の公平性を強化し、ステアリンググループの継続性を保証することを意図して、ステアリンググループのメンバーは2年間の任期を最大2年連続で勤める資格があり、副コーディネーターは最初の2年間の任期の後、コーディネーターの役割を引き継ぐことが推奨される交替制が前年の年次総会で提案された。この度の年次総会での議論の結果、この交代制は認定都市により承認され、直ちに第2回のステアリンググループの更新に反映された。
6. 加盟都市は、第2回ステアリンググループの更新が、この度の年次総会で行われたことに言及する。結果として、新たなコーディネーターは以下の通りである：

**【クラフト&フォークアート】**  
コーディネーター：利川  
副コーディネーター：パデューカ

**【デザイン】**  
コーディネーター：デトロイト  
副コーディネーター：コルトレイク

**【映画】**  
コーディネーター：シドニー  
副コーディネーター：サントス

**【食文化】**  
コーディネーター：パルマ  
副コーディネーター：エンセナーダ

【文学】

コーディネーター：ノッティンガム

副コーディネーター：リュブリャナ

【メディアアート】

コーディネーター：アンギャン・レバン

副コーディネーター：光州

【音楽】

コーディネーター：マンハイム

副コーディネーター：カトヴィツェ

次回の年次総会の開催都市でステアリンググループ加盟都市のファブリアーノは会期終了までその役割を担う。コーディネーターと副コーディネーターの次回更新は、2020年の年次総会で組織される予定である。

7. 加盟都市は3のモニタリングエクセサイズを経た後、2004年から2013年の間に加入した加盟都市により、全部で41のモニタリングレポート（MMRs）が提出される点に留意する。全てのレポートは現在UCCNのウェブサイト上で閲覧可能である。次のエクセサイズでは、28のMMRsが11月末までに予測される。エクセサイズのスケール育成が期待できる場合、事務局はネットワークのモニタリングレポート活動の改善を続けるため、他の方法を模索する議論と協議を主導していく。
8. ネットワークは、より持続可能でバランス良い成長を構築する方に向かうための努力を続ける。この点において、直近の年次総会で認定都市により採択された指定プロセスの大きな変更は2019年に向けての次回の認証要求として実行され、限られた2都市のみ（2つの異なる創造分野によって指定を受けなければならない）国により認定を受ける。
9. 2017年にフランスのアンギャン・レバンでの年次総会で発表されたUCCN市長らの声明は、この度の年次総会に参加の市長らにより、持続可能な開発戦略を彼らの都市で成し遂げるという確固たる誓約と同様、UCCNの継続的な確約が説明され、見直された。
10. 昨年任意の貢献メカニズムの導入後、7つの認定都市（アハサー、成都、デニア、ダニーデン、ガズィアンテプ、利川、サンタフェ）は、UCCN開発支援のための自発的な財政的貢献を行った。ユネスコを代表し、事務局はこれらの都市に感謝の意を表明し、より多くの加盟都市に先例への追随を推奨する。
11. 以上を鑑みた上で、ネットワークが予算外のプログラムであるとすると、加盟都市はその発展と持続性を確実にするため、UCCNに対する財政的な貢献が求められることが確認できる。新たな財政的メカニズムは、結論のポイント16で述べたとおり、世界中で自治体メカニズムにおいて反映され、さらにその一部として開発される。
12. 次のUCCN年次総会は、“理想の都市 ‘The Ideal City’ ” のテーマの下で、2019年6月5日から6月10日までのイタリアのファブリアーノでの開催が现阶段でプログラムされている。2020年開催都市の選抜は、この度の年次総会中にすでに選ばれた3の候補都市によるプレゼンテーションを経た2018年の会議後、事務局によってオンラインで組織される。
13. 加盟都市と事務局は、認定都市間、団体間、また事務局とコーディネーター間での、スカイプやその他のオンラインツールを使った方法を含むシステム化された定期的なコミュニケーションの重要性に同意した。
14. 急速に活動の幅が広がり、多様性に富み、またそれに伴って集められる情報やデータを利用するため、事務局はネットワークの中で様々な新構想に着手している。例えば、持続可能な開発において、文化が

担う重要な役割を評価するためにユネスコが世界的に実施している取り組みに対して、UCCNが行っている貢献やLAB.2030などがその例である。多くの加盟都市は、すでにこれらの新構想に加わっており、地域的・国際的な活動、実施、事例について貴重なデータを提供することで貢献している。

15. 国連組織において、文化に関するユネスコ独自の役割だけでなく、ユネスコが持つ情報伝達手段や情報網の強みを生かし、国際的な舞台でネットワークの知名度を上げる機会を得るため、事務局は献身的な姿勢を続ける。したがって事務局は、ネットワークが最良の経験や実施を行うよう引き続き促す一方で、関連都市に国際的な活動やイベントにおいてユネスコに参加するよう強く求める。加盟都市は事務局の尽力に感謝し、この目的のために事務局から助力や情報提供の求めがあれば積極的に応じる。次の機会としては、7月にニューヨークで開催される「ハイレベル政治フォーラム」がそれにあたる。
16. 加盟都市で共有されているUCCNを統合する組織のビジョンにより、UNESCOユネスコはその基盤を固め、文化的推進力に資する持続可能な開発の世界的成功の推進のため、新たなガバナンスメカニズムの発展について意見交換を行う。この提案は近いうちに事務局により行われる。反省点としての、構造、プログラミング、そして財政における持続性への問題は、認定都市の誓約とネットワークへの参加モニタリングと同様に対処されるだろう。

---

(2) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 プログラム

ユネスコ UCCN HP “XII Annual Meeting of the UNESCO Creative Cities Network Krakow & Katowice (Poland), 12-15 June 2018” を和訳したもの

[https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/xii-uccn-am\\_agenda\\_eng\\_final.pdf](https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/xii-uccn-am_agenda_eng_final.pdf) (最終確認：平成31年2月28日)

(3) 第12回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会 結論

ユネスコ UCCN HP “Conclusions of the XIIth Annual Meeting of the UNESCO Creative Cities Network” を和訳したもの

[https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/uccn-2018-am\\_conclusions\\_en\\_final.pdf](https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/uccn-2018-am_conclusions_en_final.pdf) (最終確認：平成31年2月28日)

## 第3章 会議、研修の実施

### (1) 現代芸術の国際展部会 in 新潟市



日 程 平成30年8月23日（木）、24日（金）

場 所 NSG美術館／天寿園／万代島多目的広場（大かま）／天昌堂／木村屋 ほか

共 催 新潟市

内 容 8月23日（木）

- ・水と土の芸術祭2018作品展示会場視察
- ・意見交換会

8月24日（金）

- ・水と土の芸術祭2018作品展示会場視察
- ・水と土の芸術祭2018市民プロジェクト取組視察

講師 本間 智美氏（Art Unit OBI 建築家／地域プロデューサー／新潟市南区まちづくりアドバイザー）

- ・現代芸術の国際展部会担当者ミーティング

テーマ 「現代美術の国際展と地域美術館の関係」

「アートマーケット（美術市場の活性化）への発信」

「現代美術の国際展を契機とした地域住民活動の仕組みづくり」

ファシリテーター 前山 裕司氏（新潟市美術館 館長）

綿江 彰禪氏（一般社団法人芸術と創造 代表理事）

藤原 旅人氏（九州大学大学院芸術工学府博士後期課程／元さいたまトリエン

ナーレ2016サポーターコーディネーター）

参加人数43人

## (2) 創造農村ワークショップ in 石垣市



日 程 平成30年10月17日（水）、18日（木）

場 所 石垣市立図書館 ほか

共 催 石垣市

内 容 10月17日（水）

「八重山音楽の国際発信～ユネスコ創造都市〈音楽〉に向けて～」

・基調講演「離島からの文化発信」

講師：佐々木 雅幸氏（創造都市ネットワーク日本顧問、文化庁地域創生本部主任研究官、同志社大学特別客員教授）

・パネルディスカッション

パネリスト 久万田 晋氏（沖縄県立芸術大学附属研究所 所長・教授）

大工 哲弘氏（八重山民謡 唄者）

野田 隆司氏（桜坂劇場プロデューサー／Music from Okinawaプロデューサー）

モデレーター 杉浦 幹男（アーツカウンシル新潟プログラムディレクター）

・講評 佐々木 雅幸氏

・ワークショップ後、ラウンドプレゼンテーション「創造都市『ISHIGAKI』の明日を担うクリエイティブ」を開催（主催：石垣市）

・意見交換会

10月18日（木）

・エクスカージョン

八重山伝統音楽体験、八重山ミンサー見学・体験、離島（小浜島・竹富島）視察

参加人数37人

(3) 創造都市政策セミナー in 金沢市



日 程 平成30年12月4日（火）、5日（水）  
 場 所 金沢市文化ホール／金沢21世紀美術館  
 共 催 金沢市  
 内 容 「次代を担う文化の人づくり」

12月4日（火）

- ・基調講演「クリエイティブな人材育成～子どもからプロフェッショナルまで～」  
 講師 吉本 光宏氏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事）
- ・パネルディスカッション  
 パネリスト 浦 淳氏（認定NPO法人趣都金澤 理事長）  
                   宮田 人司氏（株式会社CENDO 代表取締役）  
                   本山 陽子氏（Galleria PONTE ガレリアポンテ 代表）
- ファシリテーター 吉本 光宏氏
- ・総括  
 佐々木 雅幸氏
- ・意見交換会

12月5日（水）

- ・展覧会視察「チウ・ジージェ 書くことに生きる」（金沢21世紀美術館）

参加人数101人

その他

12月5日（水）に東アジア文化都市2018 金沢のクロージングイベントである国際シンポジウム「東アジア文化都市と欧州文化首都との連携」および閉幕式典も開催

#### (4) 分科会

##### ■九州・沖縄ブロック

日 程 平成30年8月28日（火）

場 所 宮崎県立美術館 アートホール（宮崎県宮崎市）

内 容 ・文化庁説明「創造都市ネットワーク日本への参画について」

森 麻利子氏（長官官房政策課 政策調整係長）

参加人数43人（うち非会員43人）

※宮崎県主催「アートマネジメント講座」内での実施

##### ■北海道・東北ブロック

日 程 平成30年11月8日（木）、9日（金）

場 所 札幌市文化芸術交流センター（北海道札幌市）ほか

内 容 11月8日（木）

・事例紹介

磯崎 智恵美氏（札幌パフェ推進委員会）

小田井 真美氏（さっぽろ天神山アートスタジオ）

安原 清友氏／吉川 由美氏（八戸ポータルミュージアム）

中野 律氏（鶴岡市文化創造都市推進協議会）

・文化庁説明「文化庁の機能強化、地方における文化行政の状況」

山田 素子氏（企画調整課 企画調整官）

・意見交換等

11月9日（金）

視察：札幌市民交流プラザ／札幌大通駅地下ギャラリー500m 美術館／札幌駅前通

地下歩行空間（文化芸術・創造都市パネル展）

参加人数28人（うち非会員12人）

##### ■北陸・東海・近畿ブロック

日 程 平成30年12月4日（火）

場 所 金沢市文化ホール（石川県金沢市）

内 容 ・文化庁説明「新・文化庁について」

松坂 浩史氏（地域文化創生本部 事務局長）

・各自治体の取り組み状況について

参加人数22人（うち非会員0人）

※「創造都市政策セミナー in 金沢市」との同日開催

##### ■関東・甲信越ブロック

日 程 平成31年1月15日（火）

場 所 松戸フューチャーセンター ほか（千葉県松戸市）

内 容 ・事例紹介

- 「一宿一芸のアーティスト・イン・レジデンス『PARADISE AIR』」  
庄子 渉氏（一般社団法人PAIR 代表）
- ・「科学、芸術、自然をつなぐ国際フェスティバル『科学と芸術の丘2018』」  
清水 陽子氏（Zero Factorial 代表）
  - ・文化庁説明  
「新・文化庁について～文化庁の機能強化と京都移転～」  
山口 憲二郎氏（地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 調査役）
  - ・「アーティスト・イン・レジデンスを地域の文化政策に活かす～地域アーツカウンシルの可能性～」  
太下 義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター長／主席研究員）  
杉浦 幹男（アーツカウンシル新潟 プログラムディレクター）
  - ・一般財団法人地域創造からの説明
  - ・各団体から取り組みPR

参加人数27人（うち非会員11人）

■中国・四国ブロック

日 程 平成30年9月29日（土）

場 所 岡山県倉敷市

※台風24号到来のため中止

**(5) CCNJ平成30年度創造都市ネットワーク会議公開シンポジウム「音が都市を創る～サウンドデザインが未来を拓く」**

日 程 平成31年1月31日（木）16：00～

場 所 アクトシティ浜松コンgresセンター41会議室

パネリスト

三輪 眞弘氏（情報科学芸術大学院大学〈IAMAS〉学長）

川田 学氏（ヤマハ株式会社 デザイン研究所所長）

山本 敬之氏（ローランド株式会社 経営企画室／R-MONO Lab 部長）

吉泉 聡氏（TAKT PROJECT株式会社 代表）

モデレーター

佐々木 雅幸氏

主催 浜松市

共催 文化庁、創造都市ネットワーク日本

## 第4章 活動促進、交流促進、CCNJウェブサイトの運営、その他

### (1) 活動促進、交流促進

- 全国の自治体および文化団体・文化関係者に対してCCNJ加盟の呼びかけ、および、分科会・創造農村ワークショップ、創造都市政策セミナー等の告知を行った結果、9自治体新たに加盟することとなった。これには、分科会や部会等を担う自治体が近隣の自治体に対して積極的に働きかけた効果も大きい。平成31年1月31日時点での加盟自治体は、次頁の通り。

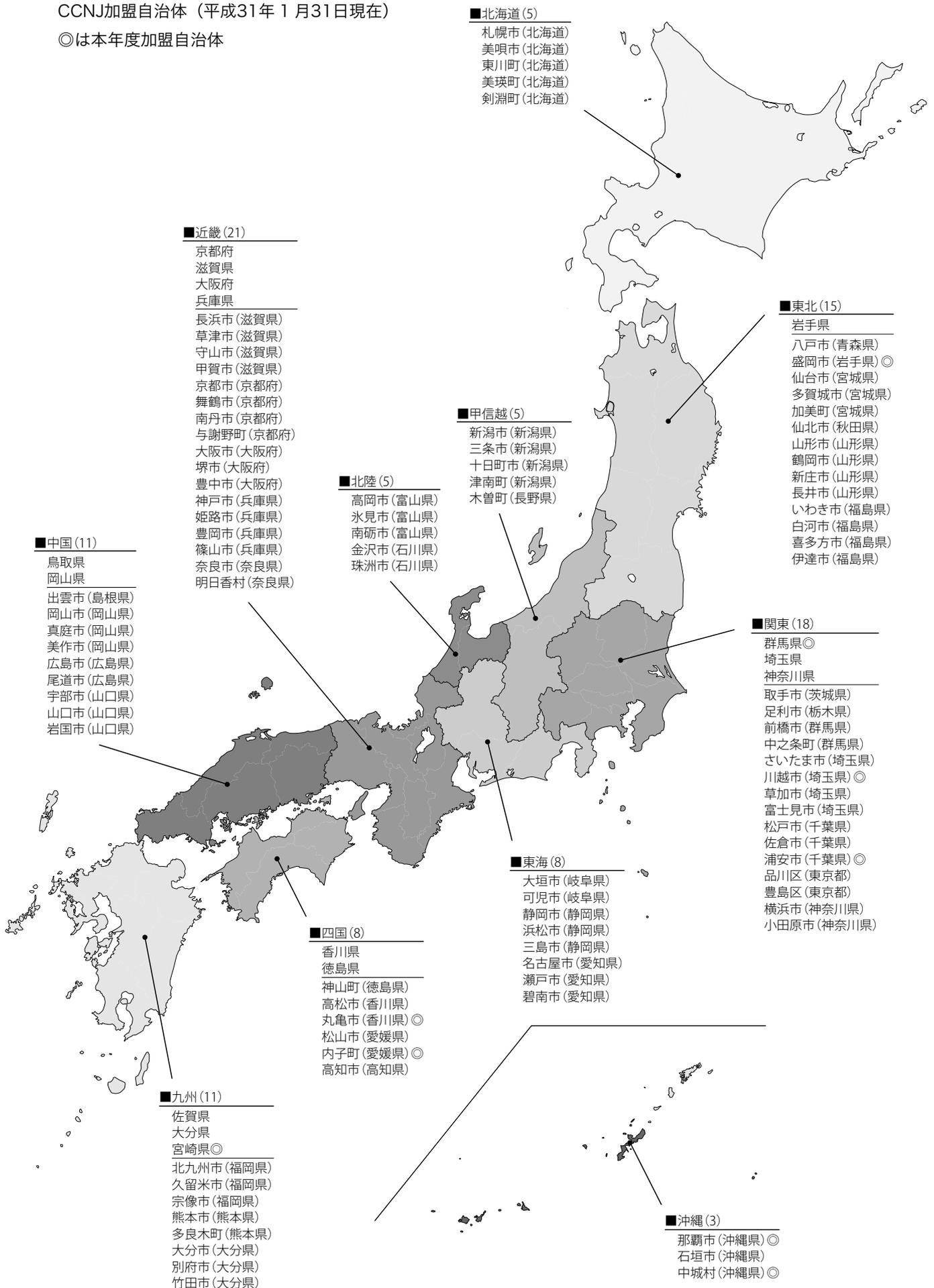
#### 新規加盟自治体（9）

盛岡市 川越市 浦安市 丸亀市 内子町 那覇市 中城村  
群馬県 宮崎県

- 分科会、部会等の開催後には意見交換会を開催し、参加自治体・団体の交流の場を設けた。登壇者、参加者、関係者が出席し、意見・情報の交換が行われた。

CCNJ加盟自治体 (平成31年1月31日現在)

◎は本年度加盟自治体



## (2) ウェブサイト情報発信力の充実

CCNJの情報発信力強化のため、ウェブサイト (<http://ccn-j.net/>) およびCCNJ公式Facebookページ (<https://www.facebook.com/CreativeCityNetworkofJapan/>) の運営を行った。

文化芸術創造都市推進事業として実施した、現代芸術の国際展部会（8月・新潟県新潟市）、創造農村ワークショップ（10月・沖縄県石垣市）、創造都市政策セミナー（12月・石川県金沢市）、平成30年度創造都市ネットワーク会議（平成31年1月・静岡県浜松市）およびCCNJ分科会（11月・北海道・東北ブロック：北海道札幌市、12月・北陸・東海・近畿ブロック：石川県金沢市、平成31年1月・関東・甲信越ブロック：千葉県松戸市）について、公式ウェブサイトおよび公式Facebookページにて告知・広報を実施し、各セミナーへの集客へつなげた。

ウェブサイトには昨年度に引き続きCCNJに加盟している自治体の一覧、加盟団体の概要や創造都市に関する取組内容を紹介できる団体プロフィールページ、各団体それぞれによる情報発信機能（ブログ機能）が設けられている。今年度新規に加盟した団体のプロフィールページを作成した他、既に掲載されている団体プロフィールページの情報を更新するために加盟団体へ自らのページ内容の再確認を求め、適宜最新の情報に修正、更新をおこなった。

### ●新規作成自治体（自治体名のみ掲載団体も含む） 9件

盛岡市、川越市、浦安市、丸亀市、内子町、那覇市、中城村、群馬県、宮崎県

### ●団体プロフィール 更新団体 27件（平成31年3月8日現在）

札幌市、八戸市、多賀城市、山形市、鶴岡市、新庄市、富士見市、三条市、十日町市、高岡市、南砺市、三島市、堺市、真庭市、広島市、尾道市、宇部市、山口市、岩国市、高松市、北九州市、大分市  
岩手県、香川県、徳島県  
宇都宮市創造都市研究所、福岡県文化団体連合会

平成30年4月1日から平成31年2月28日までに、事務局からは10件、自治体からの情報発信は11件の投稿があった。



## 第5章 CCNJ：現状の課題と今後の展望

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は、平成25年1月に設立され、6年余りが経過しているが、とりわけ最近では、平成29年6月に文化芸術基本法（以下、「基本法」とする）が制定（改正）・施行されたことをはじめ、文化芸術に期待される役割の多様化とともに文化行政、そしてCCNJを取り巻く環境も大きく変化している。

従来の文化芸術振興基本法で示された文化芸術分野に加えて、基本法では、新たに食文化が加わるなど、文化芸術の分野自体が広がっている。また、文化芸術の振興そのものに加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等文化芸術に関連する幅広い分野も含めた施策を推進することとされるなど、文化芸術の多面的活用に向けた取り組みも期待されている。さらに、地域における芸術祭の開催支援や、高齢者や障害者等の文化芸術活動への支援等が明記され、それに伴い、関連法（「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」及び「国際文化交流の祭典の実施の推進に関する法律」）が制定・施行されるなど、法整備も進んでおり、創造都市がめざしてきた文化芸術を活用した“総合的な都市政策”の一層の具体化が求められている。

今後、設立当初に掲げた創造都市の取組を推進する（または推進しようとする）地方自治体等、多様な主体への支援の充実、また、国内及び世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームとなるためには、環境変化に伴う以下の現状の課題の共有とともに改善に向けた取り組みが期待される。

### ① 多様かつ多面的な創造都市施策のニーズへの対応

上述の文化芸術振興を取り巻く環境の変化を背景に、創造都市の取り組みへの関心もより高まるとともに、現状のCCNJ加盟自治体のニーズも一層多様化、多面化していくことが想定される。

そのため、現状の専門部会のテーマの見直しや拡大が必要となるが、加盟自治体向けアンケート、未加盟自治体に向けた加盟促進のプロモーション活動などを通じてニーズの把握を行ったうえで、対応を検討していく必要がある。また、現在実施している創造都市政策セミナーやネットワーク会議（総会）など、役割が重複する取り組みについての整理も必要である。

### ② 『地方文化芸術推進基本計画』の策定に向けた情報やノウハウ等の共有

CCNJの役割として、国内外の文化芸術振興に関する情報収集がある。現在の国内の地方自治体の文化芸術施策の課題の一つに『地方文化芸術推進基本計画』の策定への対応がある。基本法においては、国の『文化芸術推進基本計画』を参酌し、その地方の実情に即した文化芸術の推進に関する計画（地方文化芸術推進基本計画）を定めるよう努めるものとするという規定が創設されたことから、CCNJ加盟自治体はもとより全国的に策定に向けた検討が開始されている。

また、計画策定と合わせ、CCNJ加盟自治体へのアンケートにおいては、その施策の“評価”に対する情報やノウハウの共有が期待されている。文化芸術施策の評価は、かねてから定量的評価が困難であり、有識者をはじめ、様々な研究が進められてきた。近年、地域アーツカウンシルが各地に設立されており、その中間支援機能とともに評価機関として注目が高まっており、研究会や勉強会、研修等も各地域アーツカウンシルが主体となって開催されている。こうした計画策定や評価に係る情報やノウハウが得られるなど実効性のある研修の機会をCCNJ加盟自治体で共有することで、上記の多様かつ多面的なニーズへの対応とともに、CCNJが文化芸術施策の推進のための“知的プラットフォーム”となり、加盟のメリット向上にもつながるものとする。

### ③ 加盟団体・機関の多様化への対応

これまで、CCNJは主に市町村を中心とした地方自治体を、その対象としてきており、創造都市施策に取り組む比較的大規模・中規模な市が多く加盟している傾向にある。しかし、基本法にも行政機関だけでなく、文化芸術団体、学校等、文化施設、民間事業者等のこれまで以上の連携が求められており、CCNJに多様な団体・機関が加盟することは、地方自治体にとってもネットワークが広がり、メリットとなるものである。今後、加盟団体・機関の多様化に向けた取り組みも進めていく必要がある。

添付資料

## CCNJ 現代芸術の国際展部会 in 新潟市 担当者ミーティング

日時：平成30年8月24日（木）午後2時45分～

会場：月濃農村環境改善センター 第1・2小研修室

### 主催者挨拶 文化庁長官官房政策課係長 森麻利子氏

いろいろ充実したプログラムを組んでくださりまして、ありがとうございます。改めてここで御礼申し上げます。さっそく担当者ミーティングに移っていただきたいのですが、ここで一つだけ国の動きをお知らせします。

皆さんもご存知だと思いますが、今年の6月に議員立法で、この国際展部会に関連した法律、国際文化交流の祭典の実施の推進に関する法律が成立しました。目的は国際文化交流の祭典の実施の推進を通じて、心豊かな国民生活と活力ある地域社会を実現すること等です。そのために国、自治体等が大規模祭典や地域の祭典も含め幅広く施策を講じることとされています。こういったことを一つの追い風としながら、我々としましては、一つ一つの事業に取り組んでいければと考えております。今から議論をいただくこととともに、今お知らせしたこともそれぞれの自治体に持ち帰っていただきまして、今後とも事業の充実にも更に取り組んでいただければと思います。

**司会** ありがとうございます。

次に、佐々木雅幸CCNJ顧問より、ご挨拶を頂戴いたします。佐々木顧問、よろしく願いいたします。

### 主催者挨拶 CCNJ顧問 佐々木雅幸氏

この国際展部会は、3年と少し前でしょうか、横浜市のイニシアチブで、CCNJの事業の一貫として開始することができました。1回目は名古屋でやり、これはあいちトリエンナーレですね。2回目が、横浜で昨年、横浜トリエンナーレに合わせて開催し、今回3回目ということで、水と土の芸術祭の第4回に合わせて開催できたということで、もともと日本における創造都市事業自体が2000年以降に始まりますが、横浜トリエンナーレは2001年から始まる流れがあって、その前年に大地の芸術祭、2010年には瀬戸内国際芸術祭が始まり、あいちトリエンナーレ、札幌の国際芸術祭と一気に広がってきたわけです。ただ、これは一過性のブームで終わってはいけないので、どうやってそれぞれが特色を出して、ウィンウィンの関係で、継続して地域に定着していけるかということがテーマになるし、芸術的評価の上でもクオリティを上げていくことが必要になっているので、さまざまな議論をしながら進むという機会になればいいと思っていますので、大変暑い中で頭をクールにして議論するというのは難しいですが、今日は頑張って議論していただきたいと思います。

**司会** ありがとうございます。

次に、次第3、キーノートですが、今回、ディスカッショ

ンでは、三つのテーマを設けまして、各グループで議論を深めていただきます。ディスカッションの前に、まず各グループのファシリテーターより、ディスカッションテーマについて15分程度のキーノートをお話しいたします。

まずはテーマ①「現代芸術の国際展と地域美術館との関係」について、新潟市美術館館長の前山裕司様よりお話しいただきます。前山館長、お願いいたします。

### ○キーノート

#### テーマ① 「現代芸術の国際展と地域美術館との関係」

#### ファシリテーター：新潟市美術館 館長 前山裕司氏

前山です。昨日ご参加された方には、少し肩書的なこととお話ししましたが、今日ご参加になられている方もいると思いますので、もう一度説明いたします。

今、ご紹介にありましたように、新潟市美術館館長として、実は今年の4月から着任したところなんです。その前は、37年間くらい埼玉県立近代美術館というところにおりました。ですので、公立美術館の経験はととても長いので、今日、その辺りのお話をさせていただきたいと思っております。

キーノートというようなものになるのかどうか分かりませんが、最初の打ち合わせのときに、本当に私でいいのですか、みたいなことを言わせていただきました。なぜかという、あまり国際展を見ていないということです。昨日飲みながら、さいたまトリエンナーレのトータルコーディネーターをされていた藤原さんに「笑話があるのだけれども、それは明日ね」と言っておいたのですが、実は私はさいたまトリエンナーレを見ていないということです。埼玉に居ながら、さいたまトリエンナーレを見ていないという、でもこれは、決して何か喧嘩をしていたとか、敵対していたというわけではないです。本当に大した理由もなく行かなかったというのが正直なところなんですけれども、そういう私が何を言えるのかということ、なぜ美術館は非協力的なのかとか、なぜ言うことを聞かないのか的な話はできるかなと思っております。

実際に水と土の芸術祭の記者発表のときにも会場から「美術館が傍にあるのだから、なぜ美術館を会場にしないのだ」という声がありました。この場合は、万代島美術館を指しているイメージだったと思います。割とこういう発言は素人がしやすい。私が今言っている素人というのは少しだけ知っている人のことです。一般市民ではありませんので、念のため。

そういう人たちがどうして美術館を使えばいいのかわからないかと言いたがるのかなと思って、ずっと考えていたのですが、根っこにあるのが、美術館のことを空っぽの箱だと思っているせいではないかと思えます。これは、日本の美術館理解が、どうもそういう箱、施設という、展示場所というイメージが、実は歴史的にそのようになってしまったのですけれども、そういうものが一般的に広まっているというところが一つ原因にあるような気がしています。実は博物館施設なのですけれども、美術館というのは。博物館を使わせろという感覚は、あまりないと思うの

ですね。博物館は空っぽではなくて、中身が詰まった箱というイメージなのかもしれないのですけれども、ミュージアムという言葉が博物館なわけで、ちなみに六本木の国立新美術館は、英名はミュージアムになっていないですね。あそこは所蔵品がないのでアートセンターという名称になっています。英語圏だけではなく、ヨーロッパも美術館とただの展示施設、きちんと区別しているのですけれども、日本の場合は区別しないままきてしまったということが一つの原因であるのではないかと思います。

美術館というのは、独立心が強いと言えば独立心が強い。それから基本的に反抗的です。埼玉県立近代美術館の館長は、これまで横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレなどいくつもやっているのですけれども、この人が冗談で、“美術館の役割の一つは、社会に出したら困る人たちを収納しておくための施設”と言ったのです。言うまでもなく冗談で。そのくらい、美術館の学芸員というのは、社会性がないです。頑固で困った人たちが大変多い。ですので、何か言われると割と反発しやすいという、そういう傾向が一つあります。特に上から落ちてきた話は反発します。作家が上層部に会いに行き、自分の展覧会をやらせてくださいみたいなことがあるのです。それがそのままおきてきたりすると、けっこう困るのですが、そういうものには非常に反発心が強い。

一度、水引の展覧会をやってくださいという話がきました。私のいた美術館は1,000平米あるけれども、1,000平米を水引でどうやって埋めるのだと。要するに見に来たことがないわけです。美術館に一度も来たことがないような人が、ただ思いつきで美術館を使いたいというだけで言うようなことがあって、そのときには呆れました。一方で、ここにいる人たちはそういうことはないと思うのですけれども、行政の人たちの考え方として、美術館は出先機関だから本庁の言うことを聞くだろうと考えているような節があります。でも、美術館の間は、基本的に反発する。

30年以上前でしょうか。博物館の学芸員で話をしていた、「県の利益と反するようなことを学芸員が発見してしまったらどうする。県の利益に反しても、学芸員の良心を貫けるか」というようなことを議論したことがあります。学芸員はそのようなとき、県の利益は無視するでしょう。例えばどのようなイメージかと言うと、恐竜が発見されてすごく盛り上がって、恐竜のお菓子までできてしまった。でも、これは恐竜ではなかったぞと発見してしまったりすると、そういうようなイメージです。学芸員ならおそらく言うでしょう。学芸員の性としか言えないのですが、学芸員というのはそういうものだろうと思います。基本的に役所のルールはあまり、考えないわけではないのですけれども、無視しがちだというようなことが一つあります。

それから、美術館に限らないのですけれども、やはりスケジュールが非常に先まで決まっていることが多いので、3年先とか、そういう話が進んでいる中で、急に何かを言われても動きがとれないというのがよくあることです。水

と土の芸術祭を批判するわけではないのですが、水と土の芸術祭の最終日が美術館の休館日に当たっているのです。この日は市展の搬入があって、お客様を入れられないので、残念ながら最終日だけ展示が見られないというようなことがある。これは些細なことなのですが、なかなか美術館のスケジュールと合わせていくということは難しいかもしれません。

運営主体が県と市だったら協力できない、できにくいということが原則としてあります。だから、先ほどの万代島の話も、あれは県だからということもかなりあると思うし、県と市が協力し合うというのは簡単ではないということが、使えばいいじゃないかと言うような人たちはあまりよく分かっていない。仮にそれが何かの形で、例えば可能になったとして、そのときの話のもっていき方が上からくると反発するので、その辺が難しいところかもしれないです。やはり責任主体というものが問題になってきます。ただの場所貸しというような感じで美術館がしぶしぶ協力するという形になると、最低限のことしかやらないと思います。基本的に学芸員は場所貸しが嫌いなので。展覧会でもそうです。自分たちが企画にかかわることでモチベーションが上がるので、ただ出来上がった展覧会を回してただけというのは、学芸員として非常にモチベーションが低い、できればやりたくない。となると、ただスペースだけ貸してください、みたいになっていると、協力的ではなくなと思います。まして、例えば現状復帰がうまくできないとかとなると、責任が上のほうだけの合意でなされていても、うまく現場は動いていかないということです。現場まで納得して協力態勢が出来上がらないと、多分、美術館はうまく使えていかないだろうと思います。

そもそもなのですから、美術館を使うメリットとデメリットを考えるべきだと思っていて、メリットは、明らかに展示環境がいいということです。日本画とか、保存にデリケートな環境を求められる作品は、美術館で展示することが非常にいいことだと思います。デメリットは何だろうと思ったときに、美術館で見ると、何かちょっとした違和感があるのです。ホワイトキューブと言われる実験室のような空間で展示されるというのは、もちろん美しいし、しっかり見えるのですけれども、歴史性がない気がしています。つまり、公立美術館という、ホワイトキューブという、歴史性とか地域性が非常に希薄な空間、むしろそれを切ったところで展示するというのが美術館のやり方です。果たしてこれはどうなのだろう。つまり、今問題になっているような国際展とかだったら、むしろその地域性とか歴史性を感じさせるような場所で展示することのほうが、私は展覧会全体を見たときに、連続性が高い、相応しいのではないかと思いますので、そのデメリットもあると。

そして何が目的なのかをきちんと考えるべきだと思っています。展覧会をやることを目的にしないで、対象が誰かとか、誰を幸せにしたいかということをきちんと考えるべきだろう。やっている人が面白いのは当たり前なので、見に来た人、それからまちの人がよかったなと思えるよう

な目的を明確にしていくこと。あるいは、地域の歴史みたいなものに貢献していける、そういうものが本当はいいのではないかと考えています。ちなみに、私、越後妻有（アートトリエンナーレ）は1回目しか見ていないのですが、正直言うとあまり作品のことは覚えていないのです。美しい棚田、それと自然の景色は本当によく覚えていますが、周っている人たちも棚田の一本勝ちと言っていましたけれども、そうやって本来なら出会わなかった空間、景色とかにアートを手段として出会ってしまったと、その強烈な体験みたいなものは消えない。なかなか消えにくくて、後々まで残っていくだろうと思います。

それから、言っておきたいのは、これは美術館の話と少し違うのだけれども、歴史化をしていくというのは、なかなかされにくいと思っています。これは国際展ではないのですが、1988年、山口県の錦帯橋でアートプロジェクトがあったのです。国内のかなり有数のアーティストたちが河川敷でいろいろな作品を作って、非常に面白かったのですけれども、ほとんど歴史に残っていないのです。それを考えていくと、やはり主催者側で歴史化していかなければだめだと、思っています。アーティストは、自分の作品のことは考えていますけれども、全体プロジェクトとして歴史化していこうという意識はないので、その開催した地域、主催者で歴史化していく必要があるということは少し気になっていることです。

それから、先ほど地域アートという話題が出ていたので、つい少し言いたくなかったのですが、美術評論家連盟というところに入っております、美術評論家連盟の会議などでもその辺の話題が出るのです。ただ地域アートを問題にするというだけではなくて、今、評価しにくいものがある。では、評価の基準というものはどこにどう設定していくのだというようなことは、常に議論として出てきます。やったからいいという評価ではなくて、美術評論家の場合は、もう出来上がった作品がどうかという評価をきちんとしていかなければだめだという意識がその中にあります。だから、事業評価とはまた違ういろいろな評価が必要なのか。美術評論家は美術評論家としての評価が必要だし、それから事業評価ももちろん必要でしょうけれども、先ほど言ったように地域に何が残っていったかというようなものは、事業評価とは少し違うような気もしますので、そういう評価、いろいろな評価軸が必要なのかと思っております。

**司会** ありがとうございます。

次に、テーマ②「アートマーケット（美術市場の活性化）への発信」につきまして、一般社団法人芸術と創造代表理事の綿江彰禪様よりお話しいただきます。

**テーマ②「アートマーケット（美術市場の活性化）への発信」ファシリテーター：一般社団法人芸術と創造 代表理事 綿江彰禪氏**

綿江と申します。

今回、国際展とアートマーケットの関係性について話してほしいというご依頼を受けました。日本においては、これまで、国際展とマーケットの話に関連付けて議論される機会は少なかったのではないのでしょうか。後ほど行われるディスカッションにつながるように、私からは、3つのお話をしたいと思います。

1つ目は、国内と世界のアートマーケットの概況、2つ目は、国際展が作家にとってどのような影響を持つか、そして、最後に国際展とアートマーケットの関係について国外の事例なども踏まえてお話したいと思います。

自己紹介は、あまり時間がないので割愛させていただきます。お配りした資料の最後のページに書かせていただいておりますけれども、基本的には文化庁及び自治体等をクライアントとして、文化政策のコンサルティングを行っております。

では、1つ目のマーケットの概況についてお話致します。まず、世界で、アート、美術品はどのくらい市場規模があるのか。近年は、7兆円くらいで推移しているという状況です。2009年にはリーマンショックがあり、その影響で市場規模も激減しました。実は株式のインデックスの推移と美術品の市場規模の推移を重ねると、かなり似たような動きをします。

では、日本ではどうか。長い間、国内のアートマーケットのサイズはわからなかったのです。1,000億円という人もいれば、5,000億円という人もいた。2017年から日本で一番大きいアートの見本市であるアートフェア東京を運営している会社と弊社が共同で、初めてこの規模などアートマーケットの状況を定量的に明らかにしています。

まず、こちらのスライドは、アートというのはいろいろな場所で買うことができますので、そのチャネルごとの市場規模を示しております。世界的に見ると、アートの販売においてはギャラリーやオークションの役割が大きく、それぞれが市場の約半数を占めています。一方、日本のチャネル構造は特徴的で、百貨店の役割が大きく、そしてオークションの存在感は小さい。国内と国外のどちらで買っているかという、当然皆さん、国内で購入している。これらを合わせて2,437億円と算出しました。

こちらは、美術品の輸出入の額の推移です。バブルの時は異常値を示していますね。アートも投資の対象とか、どちらかという投機かもしれませんが、そのような対象として見られていたことがわかります。バブルが弾けると激減し、近年はずっと停滞しています。実は、輸出が少しずつ拡大しているので、近いうちに輸出と輸入の額が逆転しそうです。

世界の美術品市場の国別割合ですが、アメリカが市場として大きく、ついでイギリス、中国となっています。中国はここ10年くらいで大きく拡大してきています。この調査では日本は調査対象とされていないのか、名前が上がってこないのですが、世界の市場規模に当てはめると3.1%となり、フランスに次いで大きな市場であるということが分かります。

今、お話しさせていただいたのは美術品のお話。これはどういうことかということ、美術関係者が美術品として認めているモノの市場、それが2,437億円と申し上げたわけですが、ただ、日本の美術品への親しみ方の特徴として、絵画のポスターや奈良美智のクロックのように、本人からすればアートだと思って買っている、関係者から見れば、それ別にアートではないと、そういうものを買っている方は多い。これを我々は美術関連品と呼んでいます、人気の美術展に行ったらお土産売り場にすぐ行列していますとおり、購入している人の人数でいうと、美術品よりも美術関連品を買っている人の数の方が多い。このような美術関連品の市場は306億円になります。

このほかに、美術関連サービス市場というものも存在するだろうと考えました。例えば美術館・博物館の入場に支払っている金額を足し合わせると、427億円と推計されたり、主要な国際展に訪問して、チケットを買ったり、お食事をしたりといった関連消費なども含めた金額が90億円くらい。これまでの数字にこれらを足し合わせると、大体3,000億円くらいになるということになります。

この3,000億円というのはどのくらいの規模かということ、大体、国内の映像ソフトの市場規模と同じくらいです。国内のコンサートの入場料や映画産業よりも大きく、カラオケよりも少し小さいくらいということ。そうすると、考え方によりますけれども、割と大きな市場であるということが言えます。

以上が大きなマーケットの話でした。次に、作家の話をしたと思います。アートマーケットできちんと評価されている、つまり高額で売れている作家というのは、きちんと専門家に評価されている作家とイコールなのだろうか。これを過去に文化庁の委託調査のなかで議論したことがあります。例えば、それぞれについて何らかの代替指標を置いてみて関係を見てみました。アートマーケットにおける評価は、オークションでの過去3年間の販売額の合計で代替してみました。また、専門家の評価については、アート関係者の中で影響力の大きいアートレビューという専門誌があるのですけれども、その中で毎年「Power100/Art Review」というものを発表しています。タイムズ紙で世界の100人といった特集がありますが、そのアート版です。ここでの過去10年間での登場回数を専門家の評価の代替指標としました。

調査は5年くらい前に行ったものなので最新の状況はまだ違った結果になるかもしれませんが、オークションの販売額トップ25と「Power100/Art Review」の登場回数トップ25の作家を対応させてみますと、重複しているのは、たった4人でした。つまり、美術の文脈において評価されているから、マーケットで売れるということでは必ずしもなさそうであるということになります。

では、国際展に作品を出せば専門家の評価にはつながらんのだろうか、もしくはマーケットで評価されるのだろうか、といった話もあります。これも、検証してみたいと思ひ、世界的に力をもっているだろうと言われている国際展

を、関係者と議論して15をピックアップして、過去一定期間の作家ごとの参加回数をカウントしたのです。そして、それらの作家についてオークションの販売額と参加回数との関係のみをみました。そうすると、ほとんど相関がなかった。つまり、別に国際展に呼ばれている作家がマーケットで売れているわけでもなさそうということになります。

もう1つ見てみたのが、「Power100/Art Review」での掲載との関係です。国際展に呼ばれている作家は、関係者の中で評価されている作家なのかということで、これについては若干の相関が見られました。つまり、国際展というのは、どちらかという、マーケットではなくて、むしろ関係者の評価というものに結びついているということはあるわけです。

では、国際展とアートマーケットは全く切り離されたものなのか。世界の主要な国際展のほとんどは日本と同じように、自治体もしくは政府によって運営されています。一方、美術品購入においてギャラリーが重要な役割を担っておりますが、それらが集まって行く見本市というのも重要な役割を担っています。この見本市は日本でも開かれており、例えば、アートフェア東京という日本最大のものでは4日間の開催期間に6万人が来場し、販売額は29億円にもなります。そういうものが世界にも数多くあるのですが、こちらの運営は民間が行っているものが多い。画廊の協会やコンベンションセンターが行っている。さらに、ドイツ銀行やUBSなど富裕層向けの銀行がスポンサーとしてバックアップしているという構造になっています。

国際展は、一般の人が動きやすい時期に実施されますし、アートフェアは、どちらかというコレクターや出展者であるギャラリーが動きやすい時期に実施される傾向にあります。国を超えて移動しなければいけないようなアートフェア同士は時期がかぶらないように調整されています。画廊としては一気に2つのフェアにはなかなか出しづらいですので、日程が被ってしまうとどちらかを選択することになります。従って、アートフェアの開催時期は年間で一定の散らばりを見せますし、国際展は皆が動けるような時期に集中して行われます。

例えば、世界で一番大きいアートフェアは、「アート・バーゼル」というスイスで行われているものです。これは約300のギャラリーが参加して、5日間で富裕層をはじめとした7万人が来場します。プライベートジェットで富裕層が乗り入れ、一般の飛行機チケットについても取れなくなり、ホテルの価格は通常の何倍にもなる、そのような凄いイベントです。このフェアは会場となるコンベンションセンターが運営しているのですが、最近になって日本の国際展のように、市と協力して作品をコンベンションセンターの中だけではなく街なかにも展開するようになってきました。特徴としては、フェアでも取り扱っている作品を街なかにも展示をする。その作品というのは、フェアの中でも有力なギャラリーの作品であったりするのですが、つまり売りたい、話題性をもたせたい作家・作品をまちの外にも置いて、まちの魅力の向上とともに、作家・作品のプ

ロモーションにもなっているというようなやり方をしています。

次にシンガポールのお話をします。世界の中でもシンガポールは、ものすごくマーケットと国際展との連携を意識しております。シンガポールはIMFの総会の自国開催をきっかけに2006年にビエンナーレを始めたわけですが、それ以外に2010年からアート・ステージ・シンガポールというアートフェアも行われています。シンガポール・ビエンナーレは政府が運営し、アート・ステージ・シンガポールは民間が運営しています。

もともとアート・ステージ・シンガポールとはいうのは、毎年2月に行われていました。シンガポール・ビエンナーレは2年に1度、秋に行われていた。それを国がトップダウンで指示を出し、互いが調整し、ビエンナーレを2月に移して、むしろ同じ時期にやるようになっています。あわせてアーツカウンシルが同時期にアート・ウィークを企画して、ビエンナーレに来た人たちにギャラリーも訪問してもらえそうなプロモーションも行っています。

さらには、政府が設立したシンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート (STPI) という施設があって、世界の一流の作家を年間3、4人レジデンスで招聘し、施設が持つ高い印刷技術を提供するわけです。つまり、ここに来れば印刷を使った作品であれば、印刷のスペシャリストが全力でサポートして、作家としては作りたかったアイデアを実現することができる。もしくは、技術にインスパイアされて新たな作品が生まれる。六本木アートナイトとかいろいろなところに引っ張りだこの名和晃平さんというアーティストも過去にレジデンスをしています。STPIはレジデンスをさせる代わりに、レジデンスを通じてできた作品を一部買い上げて、STPI自身が持つ自分のギャラリーで販売しています。先ほどのアート・ステージ・シンガポールやアート・バーゼルなどにも出展しています。

また、郊外に使わなくなった軍の宿舎 (バラック) を政府がギャラリーの集積地として整備した場所があります。20くらいのギャラリーが入っているのですけれども、そのギャラリーには賃料の減免があります。その判断は、経済開発庁とアーツカウンシルが協議のもと行っているのですが、シンガポールでは、アートと経済が近い関係にあるということが見て取れます。このように、シンガポールでは、アートの振興を美術館、ギャラリー、フェアなど様々なステークホルダーからなるエコシステムでトータルに考えています。

では、皆さんの国際展では、マーケットと建設的な関係を築くためにどのようなアクションができるのかということ、後ほど議論できればと思います。私からは以上になります。

**司会** ありがとうございます。

最後に、テーマ③現代芸術の国際展を契機とした地域住民活動の仕組みづくりについて、九州大学大学院芸術工学府博士後期課程、元さいたまトリエンナーレ2016サポ

ーターコーディネーターの藤原旅人様よりお話しいただきます。藤原様、お願いいたします。

### テーマ③「現代芸術の国際展を契機とした地域住民活動の仕組みづくり」

**ファシリテーター：九州大学大学院芸術工学府博士後期課程/元さいたまトリエンナーレ2016 サポーターコーディネーター 藤原旅人氏**

よろしくお願ひします。月湯でいい作品を見てやる気がみなぎってきたので、勢いそのままにきましたと思います。

私は、アートボランティア・プランナーという職業名を勝手につくりまして、2008年から活動を展開しております。2008年に、東京都現代美術館の川俣正さんというアーティストのプロジェクトにかかわってから、この道に進ずみました。ここに呼ばれたのは、2016年にさいたま市で開催されました「さいたまトリエンナーレ2016」のサポーターコーディネーターを担当しておりましたので、その話を皆さんと共有したいと思っています。

まずはじめに、一人ご紹介させてください。彼女は、直井さんといって、さいたまトリエンナーレ2016のときに、サポーターの中で大活躍をした方です。本職は、グラフィックのデザインをされているのですが、今回のサポーターに応募してきた時に、ローカルメディアにすごく興味があるということで参加をされました。自分自身でさいたまという地域で、ローカルメディアの活動を展開したいのだということで、さいたまトリエンナーレ2016をきっかけにさいたまという地域で、現在もいろいろな活動を展開されています。会期中はサポーターのホームページであったり、インスタグラムであったり、ラジオ番組を自発的に作りまして、アーティストの話を聞いていきました。他にも様々な創造的な活動を展開していきました。もし時間があつたら未来トークさいたまというプロジェクトも彼女が中心になって展開しましたので、その話も今日の最後にしたいと思います。

先ほどこういう国際展をどう評価するかという話があつたのですが、この直井さんを中心に、メディアラボという有志団体を立ち上げました。さいたまトリエンナーレ2016は市民参加型の作品が多かつたこともあつて、現場でどう市民がかかわって、どういう感想を抱いて、どう成長したのかということなどをドキュメントとしてまとめることを目的に、自分たちでクラウドファンディングを行い、およそ60万円ほど集め、ドキュメント冊子を一年半がかりで作りました。

日本各地で芸術祭というものはたくさんあるわけです。なぜ芸術祭、アートプロジェクトというものが地域で展開しているかというと、五つくらい言えると思います。その地域の市民をどう巻き込むかというときに、こういうことが言えるのではないかとということで挙げてみました。

一つ目は、コミュニティの活性化という部分なのですが、作品やプロジェクトをアーティストが一人で作るというよりは、いろいろな市民を巻き込んでいきますので、そ

のプロセスを重視するプロジェクトが多くあります。その中でコミュニティが再認識され、また、新しいコミュニティが形成されます。また作品にも、サイトスペシフィックな作品が多く、新潟であれば新潟の地域の特性、歴史や文化が反映され、活かされた作品というものが重視されることが多いです。そのときに、アーティストとかかわった市民が、いろいろな議論をしたり、交流をしたりということで、市民のかかわり方というものがあると思います。多様な立場の人を巻き込みながら活動が展開します。アーティストがいて、サポーターやボランティアであったり、市民としてかかわっていく人がいて、そのプロセスの中で歴史であったり文化であったり、文脈、その地域の誇り、矜持というものが作品に落としこまれていきます。

さて、最近、国際芸術祭やアートプロジェクトにかかわる参加者の参加動機を考えたときに、一つ私が少し気になる点があります。実は、さいたまのサポーターコーディネーターを経験してから、数多くアートであったり文化活動にかかわるボランティアであったり、市民のかかわるプロジェクトの担当者の方から、ボランティアやサポーターのマネジメントがうまくいかないのだけれども、少し見てもらえませんかという問い合わせがきております。その相談を受けていると、8割の人のボランティアに対する考え方が既存のボランティア観に依存し過ぎていると考えています。

実は、今日用意したスライドの中で、水色の背景のスライドが2枚あるのですが、その2枚を今日持ち帰っていただければ、私の役割は終えたかなと思っていますので、その1枚目がこれです。既存のボランティア、従来のボランティア観というと、自発性、無償性であったり、公共性ということが言われます。自発的に無償でやって、社会のためによりよい活動をする人というイメージがあると思います。ただ、国際芸術祭であったり、アートプロジェクトに参加するボランティア、あるいは2000年以降のアートにかかわるプロジェクトに参加するボランティアというのは、特徴が既存のボランティア参加者と少し違って、この三つの特徴を挙げることができます。それは、自己実現、自己肯定、対価を求めるボランティアということです。自己実現を求めているというのは、よりよい居場所を求めているわけです。自分の存在が認められ、自分自身の意見が反映される居場所です。また、自らの存在意義であったり存在理由というものがあるところに存在する場所がこれに当てはまります。それから、無償の活動は現代社会では難しく、皆さん参加するとき対価を求めます。その対価というのは、例えば簡単ところで言うと、そのスタッフでしか獲得できない何かバッグとか何とかペンダントとか、そういうものであったり、体験だったり経験だったりということです。さらに、芸術祭を無事に成功させるという大きな物語でサポーターであったりボランティアで市民を集めるというのはもう難しく、そのサポーターであったりボランティアの参加者が各個人で抱えている小さな物語にうまくマッチしていかないと、彼ら、彼女がなかなか集まって

こないというところがあります。その背景にはいろいろな理由があると思うのですが、やはり人が孤立化していて、自己責任型の社会になっていることが大きな理由だと思います。

さて、アートプロジェクト参加者の属性に振り返ってみたいのですが、先ほど言いました相談案件でよく言われる質問が一つあります。すごくボランティアを募集していますとか、情報発信を盛んにやっているけれども、その活動のキーになるような人がなかなか来ないのということです。を皆さん言われます。私は最近思うのですが、すぐに活動のキーになる人というのは、そもそもこういう国際芸術祭やアートプロジェクトの現場には来ないのです。というのは、そもそも一人で課題を発見し、活動を展開するという能力のある人は、既に一人で活動をやっているわけで、国際芸術祭やアートプロジェクトの現場にかかわる参加者は、何かもやもやしているけど、そのもやもやが何なのかわからないという人が集まります。何かもやもやしていて、何かその地域に貢献したい、寄与したいという意識がある。でも、何をすればいいのかわからない、あるいは人脈が足りない、あるいは何か機会が足りないということで、そういう人が多く参加される傾向にあります。

それを考えると、やはり人材育成プロジェクトの必要性ということが上げられます。よく「育成をされたらどうですか」という話をすると、「育成プロジェクトというのは大変ではないですか」みたいな感じの話をされるのですが、担当者の方が意識をもってすれば、簡単に出来ると思います。どういう人材育成の考え方かという、やはりかかわっている方、参加者の希望、参加者の属性というものを最初にしっかりと確認して、彼らが何を求めているのか、どう成長したいのか、どうありたいのかところから人材育成を考えることが必要です。また、育成プログラムを単にやるだけではなくて、どのような人材に成長させたいのかということを担当者として考えるべきことだと思います。

また、最近、個人を人材育成として成長させるのではなくて、集団や組織として育成していく意識であったり、システムが必要なのではないかなと思っています。例えばボランティアの種類にしても、災害ボランティアとか環境ボランティアとか、明確な目的があるボランティアよりは、この国際芸術祭であったりアートプロジェクトにかかわる市民であったり、そのサポーターの組織というのは、緩やかなつながりをもっています。この緩やかなつながりこそが、継続的、持続的な組織に展開していくと考えています。

皆さんの自治体ほとんどが、芸術祭をまちでやられている方だと思うので、2020年に向けていろいろ考えていらっしゃると思うのですが、私は最近、2025年の問題もすぐ考えていて、この2025年というのは、後期高齢化がさらに進み社会保障が困難な社会になっていくと言われていきます。さらに社会として孤立化が進みます。そういったときに、この地域で、アートにかかわるボランティアやサポーターが持っている緩やかなつながりというのはとても重要

になってくるのではないかと考えております。

では、さいたまトリエンナーレ2016のときにどういう方向性を見ていたかという、さいたま市というのは、市民活動が全国でも活発な地域なので、市民活動同士を繋げる中間支援、あるいは媒介的な存在にサポーターがなっていくといいなと思っていました。最初にお話しました直井さんは、その一環でさいたま市で市民活動や文化活動をされている方をゲストにお呼びするというトークを、サポーターの中で議論しながら、この人を呼んだらいいのではないかと、こういうやり方のトークがあるのではないかと、ということでトークシリーズを開催しました。そして、それをこのように冊子にまとめました。

最後にもう1点だけ話をしたいのですが、このCCNJに合わせまして、明日、この新潟で、全国の芸術祭のサポーターが集まるミーティングがあります。これは、去年の横浜トリエンナーレの中で開催されたときの写真なのですが、皆さん、飛行機とかを予約されているので延ばすのは難しいかもしれませんが、もし行ける方は参加してくださいと、市民もサポーター参加者も喜ぶと思います。ありがとうございました。

## 創造農村ワークショップ in 石垣市 「離島からの文化発信」

日時：平成30年10月17日（水）午後3時00分～  
会場：石垣市立図書館 視聴覚室

### 開催地挨拶 石垣市長 中山義隆氏

皆様、こんにちは。石垣市長の中山でございます。創造都市ネットワーク日本に加盟されている皆様が、本日このように石垣島にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。また、主催の文化庁及び創造都市ネットワーク日本の皆様におかれましては、今年度の創造農村ワークショップの開催地として本市をお選びいただき、誠に光栄に感じる次第であります。そして、皆様におかれましては、本市の観光行政及び文化行政に対し日ごろよりご理解とご協力をいただき、深く感謝を申し上げます。

本市におきましては、全国的にも多様な文化を有する沖縄県、その中でもさらに色濃い文化とコミュニティが形成されている、また伝統文化を保有しておりまして、古くより「詩の国・歌の島・躍りの里」と表現されてきました。沖縄の音楽シーンを代表するアーティストでもあります、本日で登壇されます大工先生はじめ、新良幸人さんや大島保克さんなど、本市出身のアーティストの方が海外公演など積極的に島の文化や音楽を発信しておられます。また、BEGINや夏川りみさんをはじめとする日本を代表するミュージックシーンにおいても活躍されている皆さんも、本市出身ということで多数輩出されております。教育の面では、昨年実施されました第42回全国高等学校総合文化祭におきまして、郷土芸能の部で地元の八重山高校が沖縄県代表として出場し、みごと3位になるなど、各学校の郷土芸能部は、毎年のように全国規模の大会で優秀な成績を修めています。このように大人から子どもまで音楽に携わっている市民が多数おり、まさにここ石垣島は音楽の島と言えると思っております。

そのような中、本市は平成29年2月に創造都市ネットワーク日本に加盟させていただき、文化観光を通じた創造的なまちづくりに向けた取り組みを進めております。その一環として創造的なまちづくり推進方針を定めるにあたり、石垣市文化観光振興プランを昨年度策定いたしました。創造都市ネットワーク顧問の佐々木先生には、プランの策定にあたり委員会委員長を務めていただきました。また、委員を務めていただきました大工哲弘様に改めて御礼申し上げます。大変ありがとうございました。

本プランにおきましては、文化観光による地域創生の手法として国内外で推進されている創造都市の取り組みや世界の文化と観光の流れにおいて本市のさまざまな特徴を活かし、文化観光の価値を高め、日本最南端の文化創造都市の実現と振興を目指し、その実現のための施策や事業展開の基本方針、方向を幅広く示しています。今後の計画の推進に向け、行政職員が一丸となって取り組むことは当然であります。本日お集まりの皆様からのご意見やご指導の

ほどいただき、より一層取り組みを強化してまいります所存であります。

本日は、全国各地の皆様、それから市民の皆様にご参加いただき、厚く御礼申し上げます。開催地代表のあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。よろしく願いいたします。

### 主催者挨拶 文化庁 地域文化創生本部 調査役 山口憲二郎氏

皆さん、こんにちは。私は、京都にあります文化庁地域文化創生本部で調査役をしています山口と申します。主催者を代表しまして、挨拶をさせていただきます。

まず、ただいま中山市長から大変歓迎するとのお言葉をいただきまして、本当にありがとうございました。地元石垣市におきましては、このワークショップの開催にあたりまして、準備等ご尽力をいただきました。心から感謝を申し上げます。また、本日のワークショップのパネラーを快く引き受けていただきました皆様方、全国各地からこの石垣市にお集まりいただきました参加者の皆様、本当にありがとうございます。

そして私自身は、今朝、関西国際空港から石垣市に入らせていただいたのですが、車窓から広がるサトウキビ畑、そして豊かな自然を目の当たりにしまして、創造ワークショップが始まる前から大変感動しているところでございます。そして、数日間雨が続けていたようなのですが、雨も上がりました。本当に素敵なワークショップになるなという期待でいっぱいでございます。

さて、私がおります文化庁地域文化創生本部について少し紹介させていただきます。文化庁の京都移転の先行組織ということで、昨年4月に京都市東山区に設置されたところでございます。詳しい文化庁の京都移転につきましては、チラシ等をお配りしていますので、ご覧いただけたらと思います。その文化庁の京都移転ですが、その目的、狙いといたしましては、東京一極集中を是正しての地方創生の実現、そして文化行政の中に地域の視点、地方の視点を組み入れていくこと等を目的に、こうした動きになっております。その流れのもと、昨年6月には、文化芸術振興基本法が改正されまして、観光、まちづくり、産業、教育、福祉といったさまざまな分野に文化芸術の力を活かしているという趣旨が法律の中に組み込まれたところでございます。この趣旨は10年間の文化芸術創造都市政策の方向性が盛り込まれたのではないかと感じているところでございます。そして、今年3月に文化芸術推進基本計画が閣議決定されました。その中で、CCNJについては、加盟自治体の数が指標項目とされているところでございます。

CCNJのこれまでの事業は加盟団体間の情報収集、そしてネットワークづくりを中心に展開されてきたと思いますが、これからはもう一段アップをしていただきまして、日本の地方創生のトップランナーとしてそれぞれの加盟団体が切磋琢磨し、少し大げさになるかもしれないのですが、日本全体をけん引していく第二ステージが開こうとして

いるのかなと感じているところです。

文化庁といたしましても、CCNJ事業の所管はこれまで東京の政策課がやっていたのですが、10月からは私ども京都の創生本部で実施することになりました。移管を機にCCNJ事業をこれまで以上に皆様方と一緒に盛り上げていきたいと考えておりますので、ご協力をよろしく願います。

結びになりますが、本日の創造農村ワークショップ in 石垣市が、CCNJのセカンドステージのキックオフになることを祈念いたしまして、簡単ではございますが、主催者の挨拶とさせていただきます。二日間、よろしく願います。

### ○基調講演

#### CCNJ顧問 同志社大学教授 佐々木雅幸氏

皆さんこんにちは。沖縄、八重山に来ましたので、私も今日はかりゆしを着てお話しします。

今日は、創造農村ワークショップがなぜ始まったかという話と、石垣市がユネスコの創造都市ネットワークに挑戦すると言われておりますので、それは一体どういう意味があるかということについて話をしたいと思います。また、この3月に「石垣市文化観光振興プラン」をまとめました。関心がある方はご覧ください。

さて、創造都市ネットワーク日本の中で創造農村というグループがあり、独自の取り組みをしていこうではないかということから創造農村ワークショップが始まっています。このそもそものきっかけは、長野県木曾町の前町長田中勝己さんがある日私の研究室にいられて、「貴方の本を読んだけれど、この創造都市という考え方は農村にも適用できるのではないか」と言われました。現場の、しかもキャリアのある田中町長から直接お話を伺ったので、創造農村という集まりを始めてみようということにしたわけです。田中さんはその後広域合併を成し遂げられて、ご本も出しておられますのでぜひご覧ください。

秋田県仙北市には「たざわこ芸術村（現 あきた芸術村）」がありまして、2011年の10月に劇団わらび座において第1回創造農村ワークショップを行いました。そのときの写真ですが、あいさつをされているのは近藤誠一さん、当時の文化庁長官です。近藤長官はこの創造都市ネットワークに大変にご支援をいただいております。創造農村という取り組みについても非常に強くサポートしていただいたわけです。以降、大体毎年8月から10月くらいに開催してまいりました。今日は第2回の篠山市を開催したときに主催してくれました一般社団法人のNOTEも来られています。そして第3回が木曾町で、第4回の北海道東川町では「写真の町」30周年のイベントに合わせて開催していただきました。そして第5回は十日町です。それから、第6回は里山資本主義のまちづくりで有名な真庭市、そして第7回が神山町。今、ICTワーカーとアーティスト・イン・レジデンスで非常に活気づいている町です。そして、今回が第8回目ということで、北海道から沖縄の南の端まで、文字通り

日本の僻地といえますか、「周辺地域」をベースに開催してきたわけです。

一体その社会の中で創造的なものというのはどこから出やすいかを考えますと、中心からではないです。日本列島の中心はあまり創造的ではないのです。ビジネス、あるいは政治も強いし、権限を握っている人も多いのですけれども、あまり創造的ではない。実は、もっとも創造的な動きは周辺で起るのです。ですから創造農村といったときには、まさにこの創造都市ネットワークの中でももっとも周辺でもっともクリエイティブで尖った可能性がある場所だと考えています。

後ほどまた詳しいことは言いますが、この第2回をやりました篠山市は、文字通りこの創造農村という言葉で「農の都」という形に置き換えて、それをNOTEというアルファベットにしているわけです。農の都でNOTEです。それから、山形県の鶴岡市は、日本で最初のユネスコの食文化都市としての認定を受けて、このカリスマシェフの奥田政行さんが、地元の在来野菜をふんだんに使ったレシピを開発し新しいイタリアンを普及すると、農家のお年寄りたちが作っているこだわりの野菜が復活してくるということがあり、最近全国区になりましたけれども、徳島県の神山町では大南信也さんというリーダーが「創造的過疎」という言葉を作られました。過疎こそ新しいチャレンジができるということで、こういうモデルを出したのです。従来は農業が衰退したら、6次産業といって産業をどうするかという話になります。それから、工場が撤退したらそれに替ってハイテク工場をと産業が撤退したら別の産業をもってくるという話になります。そういう発想をやめて、地域が衰退したら一見関係がないように見えるのだけれども、アーツとカルチャーに注目する。回り道のように見えるけれども、前衛的アーツが触媒になって地域の文化が揺さぶられて、そこからいろいろな新しい動きが出てくるというモデルをつくってこられたのです。それが回りまわって、農村であれば本丸である農業を刷新する。だから、創造的迂回作戦なのです。

このようにアートの社会的経済的効果を説明しますと、それは道具主義ではないかと、芸術文化を道具に使うのはけしからんという声が聞こえてくるわけです。「芸術のための芸術」という主張は歴史的に繰り返されてきましたが、むしろ社会の中のアートこそ、新しい技術と融合した潮流をつくり出して、アート市場を創出し、産業化して社会を動かしていく。そういう中で、むしろ新しい芸術表現が生まれてくるのだと考えて進めてきております。

次にこの石垣島から世界を俯瞰することを考えてみたいわけですが、石垣島は素晴らしいポジションなのです。東京、大阪、あるいはそれぞれの都市や地域から石垣島に来られますと、もうあと少し行ったら台湾だし、アジアが本場に近いわけです。これからは東京政府に全部のことを任せるとはなくて、文化首都は京都が担い、工芸首都は金沢になるかもしれませんし、そして石垣からアジア、世界に展開するという視野で創造農村をつくる、あるいは創造都

市をつくるのはいかがでしょうか？

ユネスコは2004年に創造都市ネットワークを提唱して、現在では180の都市にまで広がっている。文字通りグローバルネットワークになっているということです。グローバル化が急速に進みますと、それは金融経済のみならず文化の面でも画一化が起こります。経済力が金融力の強い社会に文化的な画一化する恐れがあるのです。生物多様性が減ってくると地球の環境が悪くなるのと同じように、文化多様性が減るならば人類にとってそれは不幸であろうということで、文化多様性というものを世界的に維持し広げるという考え方でユネスコは進めてきました。具体的には文学・映画・音楽・クラフト&フォークアート・デザイン・メディアアートの7つのジャンルです。日本では、このうち文学を除く6分野8都市で認定を受けています。石垣市が考えておられる音楽は、日本では浜松市が入っています。加盟国は西ヨーロッパと東アジアに多いというのが分かりますが、180になりましたので、もう地図に載らないくらいたくさんになってきております。

このネットワークは一体どういう動きをしてきたかということをお話しますと、2008年にアメリカのサンタフェという町で年次総会が行われたときに、クリエイティブツーリズムが提唱されました。これは、マスツーリズムが環境を悪化し、あるいは観光客急増で市民生活を混乱させるということがあるので、もっと落ち着いた文化的な価値を大事にするツーリズムに転換しましょうということで提唱されました。それから、2010年には深センで、ニューメディアと文化産業の発展、2011年にはソウルでソーシャルデザインをテーマに開催されて、日本では2015年に金沢で行われました。このとき私は基調講演をさせてもらいまして、これからの地球環境の維持と文化の発展を考えたら、創造都市における「生物文化多様性」ということが大事になってくる、つまり、生物多様性と文化多様性の両方を目標にすることを提唱しました。この年、国連で新しいグローバル目標が設定されて2030年を期限とする「SDGs」という目標が17もあるものに代わりました。

地球社会の持続的発展というのは人類全体の命題です。都市や地域が具体的な目標をもたなかったら、いきなり地球全体の目標は達成できないわけです。しかも、最近のようにグローバル化が所得格差や地域格差を広げていくので、貧しい人、貧しい地域、貧しい都市はどんどん貧しくなってしまうのでそれを食い止めることがこの中に強く入ってきております。それから、津波や大地震が21世紀に頻発するようになりましたので、震災や津波のような外的なショックから立ち直っていく力を強めようとレジリエンスという言葉を使っています。それから、社会から取り残された人たちを包摂するインクルージョン（社会包摂）が新たに目標に加わっております。そのため、ユネスコ創造都市ネットワークもこれと連動するということが今求められようとしておりまして、文化の面からこうしたものに近づこうということになります。

20世紀というのは工業経済の時代、21世紀というのは創

造経済の時代に入ります。生産と消費と流通が、大量生産、大量消費、大量流通が行き詰まりますので、それが全て変化します。そして、フレキシブル生産と文化的個性的な消費、そして流通とメディアはネットワークとなり、都市や農村のあり方は、かつては産業都市に対して食料を提供する基地が農村でした。しかしこれからは、創造都市と創造農村というものは、互いにwin-winの関係になってきます。観光も、大量生産の時代のマスツーリズムからクリエイティブツーリズムに変わる。あるいはカルチャーツーリズムですね。こういう流れが世界の基調になるだろうと考えているわけです。

実は、このクリエイティブツーリズムというのは、ユネスコの創造都市ネットワークのクラフト&フォークアートの最初の加盟都市でアメリカのサンタフェが掲げた目標が素晴らしいです。サンタフェは人口が4万5,000くらいのそれほど大きくない都市、ここから新しいアイデアが出てきます。サンタフェのユニークな個性を保存しながら、活気のあるツーリズム産業を育成し、地域の経済発展をめざすというものです。そこにはネイティブアメリカン、いわゆるプエブロインディアンが住んでいた。そのネイティブな人たちの文化遺産を大事にする。それから、スペインが統治したときの影響を受けた文化も大事にする。20世紀の文化も大事にする。新しい文化も大事にするという、バームクーヘンのように多層なのです。文化というものを大事にし、そしてフェスティバルとアート市場を発展させる。こういうことを通じてクリエイティブツーリズムで外からお金を稼いで、それで発展させようということを考えたのです。私は、サンタフェの当時の副市長を日本に招きまして、意見交換をしてきました。

それから、音楽都市のリーダーは、イタリアのポローニャです。ポローニャのいろいろな取り組みについては日本にもよく紹介をしてきたところですが、まさにこの町の中心がオペラハウスです。そしてオペラハウスの正面にあるのが、ポローニャ大学です。大学とオペラハウスが町の中心にあって、これが創造都市を支えています。町の隅々に職人たちが住んでいて、彼らがこのオペラをしているわけです。いつも言っていますが、オペラというのは音楽作品を指す言葉だけではない。職人が自発的に自分のスキルを活かして、あるいは構想力を活かして仕事をするのを「オペラ」と言います。つまり、工芸的ものづくりの町。このオペラは、ドゥカティを造っている。フェラーリも造っている。マセラティやランボルギーニという超高級車も、この考え方でポローニャでは造られている。大量生産が行き詰まった後のものづくりというのは、脱大量生産なのです。そこでは、クラフト的な中世の職人的なものづくりが一部復興されます。これと新しい技術が結びついたところに創造経済が生まれると考えているわけです。つまり、工芸というものが新しい社会の中でもう一度見直されている。そして、オペラを皆と一緒にやるという言葉が活きているのです。コオペラといいます。コオペラティーバという、協同組合。ポローニャでは、コオペラティーバ

ソシアレという新しいタイプの社会協同組合が生まれ、これが老人ホームや保育所、障がい者施設、ホームレスの施設を運用するようになります。こういったものが社会包摂、インクルージョンの主体です。従って、ボローニャは音楽都市であると同時に工芸があり、同時に社会包摂の町です。

欧州文化首都を西暦2000年に開催しました。ヨーロッパの最高の知性と言われているウンベルト・エーコ教授が当時ボローニャ大学の看板教授で、彼が「ボローニャ2000」の企画委員長でした。ボローニャ2000の考え方とは、若い世代の積極的な参加を図り、市民の文化消費のレベルだけではなく、文化の生産と創造的發展を挙げて、そして文化観光都市としてのボローニャの地位を確立する。創造的な文化空間を町の中にたくさん作り出す、ということです。それを踏まえて、ユネスコ音楽都市へとという形になりました。

この町の歴史は非常に熱いものがあり、モーツァルトが若い頃に習ったオルガンがある教会があったり、ヴェルディやロッシーニが活躍したオペラハウスがあります。ロッシーニはオペラの作曲だけではなくてシェフとしても活躍して、ご存知だと思いますが、ロッシーニ風ステーキというのは彼が考案したと言われています。ホテルの名前にもロッシーニがついています。それほどロッシーニというのはポピュラーだったのだと思うのですが、こういうユネスコの音楽都市がある訳です。

こういったヨーロッパの流れの中で、日本では、2001年から創造都市の取り組みが始まりました。先ほど文化庁の山口さんが言ってくれましたように、創造都市ネットワークがつくり出してきたムーブメントが文化庁の新しい組織にも反映し、また文化芸術基本法の基本的な枠組みには創造都市ネットワーク日本が掲げている理念が入っていると考えています。つまり、単なる理念的なものではなくて、運動の中で生まれてきたものだと思います。2013年からネットワークの取り組みを始め、現在では107の自治体が加盟するまでになりました。幹事団体が頑張っておられるところはそれぞれ素晴らしいのですが、まだ石垣市のように加盟して日が浅いところが飛躍的に伸びていってもらって、全体に大きな影響を与えていると思っています。その意味では、ユネスコにチャレンジしていただくことは、ネットワーク全体にも大きな刺激を与えるものだと思います。

先ほどボローニャの話をしたのですが、実は金沢は日本のボローニャなのです。金沢の創造都市計画の中で工芸的ものづくりを現代に活かすことを掲げていて、文化と経済の歯車を両方回してきている。そういったことが国際的にも評価をされております。工芸が中世的で職人的なものから21世紀的な手芸に変わっていく段階にあって、この21世紀に向けた工芸を發展させるのは最先端の技術とコンテンポラリーアートで、両者が結び付いて古い工芸を革新していくという作戦です。その面では、例えば2004年に21世紀美術館が登場して、大きなインパクトを与えました。伝統

工芸と伝統芸能のまちであった金沢でコンテンポラリーアートがわだいにになり、文化観光の中心が兼六園から21世紀美術館にとって代わるということが起きた。このことが新しいアーティストが集まるきっかけになり、そしてそこから新しいクラフトビジネスが生まれてくる。伝統工芸に対して「未来工芸」という言葉ができ、3Dプリンターで新しい工芸作品を作るといような発想が生まれてくる。伝統的ものづくりをアートとテクノロジーで革新することになるのだと思います。

創造農村の取り組みもそういった意味では工芸が一つのポイントになっていまして、木曾町で取り組みをしたときも、やはり工芸的なものづくりに科学、あるいはテクノロジーを入れていこうと。そして、「美しい村連合」という形で文化的な景観に發展させる。それから、鶴岡市においては、最先端のイタリアンレシピが伝統的な在来野菜を再生する。さらに篠山市では古民家あるいは古い文化財を活用したまちづくり団体が生まれて、限界集落であった丸山地区全体を高級ホテルのような形に再生し、これが一つのきっかけになって、今全国的に古民家をレストラン、ホテル、カフェに再生するという大きな動きになってきております。

これらの流れの中で、越後妻有から始まった現代芸術祭、よく地域アートという言葉もありますが、文字通り過疎地域の地域に根付いた、その地域固有の、サイトスペシフィックという言葉を使いますが、その景観や、あるいはコミュニティの歴史を掘り起こすような先端的アートが世界の中で新しい潮流になってきます。

石垣市の文化観光振興プランで3つの原理が書かれていまして、伝統的な文化を継ぐ、つなぐですね、新しい文化を創造する。この2つをこね合わせるという言葉で、くなくすんという地元の言葉を使っています。この3つの原理をうまくかみ合わせて新しい石垣文化をつくっていく。そして、八重山音楽が世界の中でどういう特徴的な質をもっており、新しい世界的な流れに貢献できるかということが、ユネスコに認定される大事なポイントになると思われれます。

創造農村というのは、その地域にある固有価値を土台にして、固有の文化伝統や自然環境というものをいかに伸ばしていくかが大切になります。この創造農村という考え方は、イギリス人のジョン・ラスキンやウィリアム・モリスから始まるものだと思いますが、日本では宮沢賢治が早くからこのラスキンに注目をしてきました。彼が書いた『農民芸術概論』というマニフェストがあります。ここで宮沢賢治は、「半農半芸」の夢ですね。最近では、「半農半X」という言葉が使われますが、この原点は宮沢賢治にあるわけです。彼は農民オーケストラというものを夢に描いたようですが、農作業をしながらアートを楽しむ。この宮沢賢治の思想を現代の哲学者梅原猛は高く評価しております。そして、「森の思想」というものが宮沢賢治の中にあると言っているわけですが、梅原猛はさらに進んで、西洋の哲学は人間中心主義で展開している。人間の創

造性を中心に展開している。しかし、これでは大量生産、大量消費の環境汚染を食い止められないだろうと。むしろ日本文化の特徴である、自然のもっている創造性、自然と人間の一体感を新たに人類哲学に発展するという必要があるだろうと述べているのです。

ここまで言うとお分かりだと思います。創造都市というのは、西洋起源の考え方です。ですから、人間の創造性を頂点、原点に置いてきましたが、創造農村というのは、さらにその奥にいて、自然がもつ創造性、この多様な自然の中から人間が創造性を感じ取って、そこから展開していく。例えば八重山の自然の中から八重山音楽が生まれてくる。こういう自然を大事にしていくという、これが恐らくSDGsにつながってくるということなので、創造農村ワークショップは小さい集まりだけれども、先鋭的な議論ができるのではないかと考えている次第であります。

どうもありがとうございました。

### ○パネルディスカッション 八重山音楽の国際発信 (パネリスト)

沖縄県立芸術大学附属研究所 所長・教授 久万田晋氏

八重山民謡 唄者 大工哲弘氏

桜坂劇場/Music from Okinawa プロデューサー 野田隆司氏

(モデレーター)

アーツカウンシル新潟 プログラムディレクター 杉浦幹男

**杉浦** 皆さん、こんにちは。アーツカウンシル新潟のプログラムディレクターの杉浦でございます。ここからの進行を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

2年半前まで、沖縄県文化振興会、沖縄版のアーツカウンシルのディレクターを務めました。今日、ここに着いてからあまりにも気候が暑くて佐々木先生がお着替えになられたので、私もかりゆしに着替えてきました。

では、ここから八重山音楽の国際発信ということで、先ほど佐々木先生からご講演いただいた中にお話がありましたユネスコ創造都市の音楽という分野での石垣市の登録に向けて、本日で登壇のパネラーの皆様からいろいろなご意見いただき議論を進めさせていただきたいと思います。

多分、八重山にいらっしゃる方は八重山音楽をイメージできると思うのですが、今日は全国からさまざまな自治体の皆さんもいらっしゃっていますので、まず八重山音楽というのは一体何かということについて、まず概要を久万田先生からご紹介、ご解説をいただければと思います。

**久万田氏** パネリストの一人として、沖縄県立芸術大学からまいりました久万田です。よろしくお願いいたします。

私は30年ほど沖縄に住んでいますけれども、もともとは四国の高知の人間で、ある意味では沖縄の音楽や芸能はよそ者の視点でずっと見てきている人間です。八重山音楽を10分で説明しろという無理難題が与えられております。

あまり難しいことを言ってもいけないので、八重山を含んだ沖縄琉球文化圏全体の歌、音楽の見取り図というものを作ってみました。非常に大雑把なものなのですが、この島々では非常に古い、多分琉球国ができるよりもっと前の時代から、人間を越えた神と言われる存在に対する祈りとか、願いや、そういう世界があったのですね。それを、司とか、いわゆる神女、神の女と書きますが、そういう神役が中心となった祭りで営んできたわけで、これは多分歴史時代よりずっと遡るほど古いものです。折口信夫の文学理論で言うと、「呪禱歌謡」と呼ばれるものです。八重山で言うと、カンフチとかヤータカビとか、ユングトウとかアヨーとか、たくさんあります。これは、言ってみれば石垣市とかあちらこちらを歩かれると、御嶽というものが必ず地域の周りを取り囲んでありまして、先ほど佐々木先生が森の思想ということをご紹介されていましたが、それで言うと御嶽というのは、日本本土の神社がある鎮守の森と同じで、農業化される遥か以前の原生林とか、そういうものの植生が保たれているところなわけです。そういう意味では、歴史時代以前からの人々の、神や自然に対する思いや願い、そういうものを表現したものがこういう歌ですね。

それから発展して群雄割拠時代、八重山の場合は1500年に首里の軍勢が攻めてくる以前と以後に分けられますけれども、その前後を含めて英雄の物語とかがたくさんあるわけです。そういうものがこの「長歌形式の歌謡群」で、沖縄本島や奄美の辺りでは琉歌という八八八六の音数律の歌謡というものが主流なのですが、それとはまったく違います。やはりこの宮古、八重山という先島の地域というのは、16世紀の初頭までは沖縄とは切り離されていたということで、独特の五五四とかという音数律の歌がたくさんあるわけです。それは、宮古はアークやクイチャー・アークというものになりますし、八重山ではユンタやジラバなどたくさんの物語があります。与那国島のダウンタというのも同じです。

それらは歌詞が何十番から、ものによっては二百番、三百番と物語が長く続くような歌があったのですが、段々そこから叙情的なものが凝縮していった、例えば八重山ですとトゥバラーマとかスンカニなどという叙情歌謡が作られてきます。宮古でいうと、トーガニアヤグとかがあるわけです。そういうことで、ある意味では呪禱歌謡から叙事歌謡、さらに叙情歌謡というような、日本全体の文学の歩みと同様な歌の歴史が八重山にもあるわけです。

それからさらに、八重山の場合は特に首里の古典芸能の影響を受けまして、八重山舞踊や民謡が成立します。これらも全部もとは民謡と言えれば民謡なのですが、特に首里のほうでは中国との外交関係で、向こうから琉球国王を承認するために冊封使が来ますけれども、その一行を迎えるための芸能として御冠船踊(うかんしんどうい)があります。御冠船踊というのは、要するに中国皇帝が「お前を新しい国王と認める冠を授けよう」という冠を乗せて来る船、御冠船を迎えるための芸能です。八重山にはその舞

台の踊り、それから三線の音楽というものも伝わってくるわけです。これは、宮古よりはずっと早く八重山に伝わったのが不思議なことなのですけども、ある意味では古典芸能が八重山にも大きな影響を及ぼした。それによって、民謡の曲に三線伴奏をつけるということが、このあたりから始まっていくわけです。もともと琉球の士族というのは江戸幕府とも付き合っているわけですが、江戸幕府の式楽というのは能なわけです。実は首里の士族たちも能を習っているわけで、その痕跡はこちらにも、ウードゥドゥという芸能が八重山にも石垣にも伝わっています。

それからさらに、明治の近代社会では、那覇の町で商業演劇が始まって、雑踊りと言われる庶民の風俗をもとにした舞踊も作られ、沖縄歌劇も作られ、ウチナー芝居も作られる。これらの大衆芸能が実はたくさん八重山の民謡を取り入れているのです。それは、当時はまだテレビ、ラジオ、映画がまだ発達していない時代、沖縄の那覇の芝居がこちらまで興業に来るわけです。興業に来て、当たったら1か月も2か月も那覇の役者が滞っている間に八重山の素晴らしい民謡の歌を取材していく。近代の沖縄のこういう演劇には八重山民謡がたくさん入っています。だからある意味では、近代、明治以降は八重山と沖縄本島で歌のやり取りがあるということです。それから中には奄美の方から南九州の影響を受けた六調という民謡・踊りが、沖縄本土を飛び越えて八重山などに伝わってきたのも近代のことで

す。さらに近代は、レコード文化の時代です。沖縄でもレコードを制作する人たちが昭和以降出てきて、新しい曲がレコードで発売される。誰々が作詞作曲しましたという著作権の概念をもとに作られていくわけですが、それがラジオなどとともに八重山にも広まってきますし、八重山の人でもレコードで日本から伝わってきた流行歌などもたくさん歌っていたということです。大工さんもそういう素晴らしいCDもお作りです。そういう時代、まさに日本の近代の流行歌の時代にこの沖縄の島々も巻き込まれていきます。沖縄では自分たち独特の新しい曲、新民謡などを作っていくわけです。皆さんがよくご存知の安里屋ユンタは、もともと民謡の安里屋ユンタというものがあるのですけれども、それをアレンジし新しい昭和の流行歌として昭和9年に日本コロムビアの録音で出されたわけです。それからさらに戦後には沖縄らしさを前面に出したポップミュージック（喜納昌吉とか、りんけんバンドとか）が作られていて、その延長線上に八重山の新良幸人とか、BEGINにしてもそうですけれども、沖縄らしさ、八重山らしさを主張するポップミュージックが作られていきます。大事なことは、すべてつながっているということです。つまり、呪謡歌謡や叙事歌謡や、叙情歌謡などをバックボーンとして全部つながっている。先ほど佐々木先生が未来工芸のお話をされましたが、では未来音楽というものが八重山で可能かどうかということを見ると、それはこういう歴史時代以前からのものを、それぞれの音楽家が体の中に全部蓄積して、その延長線上に未来の歌、八重山音楽を作るというこ

とにあるのではないかと思います。

10分過ぎましたが、大急ぎで八重山音楽の見取り図を話してみました。ありがとうございました。

**杉浦** 分かりやすくご説明いただいて、ありがとうございました。

続きまして大工先生から唄者としてお話を聞きたいと思っています。大工先生といえば今や八重山を代表する歌い手の大先生でございますけれども、先生から八重山音楽について、現状と、今、課題に思われていることなど、少しご紹介いただければと思います。

**大工氏** 皆様こんにちは。島の代表のパネラーとして沖縄本島からやってまいりました。島を離れて52年になります。でも、一時とも故郷を忘れたことはありません。ですから、何か島のことをできないかなと常に思っていて、こういう創造都市ネットワークに加入したということで、それで何かお手伝いできることを大変喜んでおります。

八重山民謡についてということなのですが、もう久万田先生がみんな話してしまったので、私は話すことはないのではないかと考えておりますが、今、活動されていることを紹介したいと思っています。とても関連性のある話だと思っています。

昨年、沖縄の新聞に「沖縄の文化で一番何が好きか」と「何が一番重要か」というアンケートに対して、75パーセントは三線という意見だと出ました。それを鑑みて、一昨年からは沖縄県では、県産三線普及ブランド化委員会が発足されました。沖縄の伝統工芸の中でも三線はまだ国の指定を受けていないのです。今、国の指定を受けているブランドというのは、工芸品では織物、染め物だけです。ガラス工芸とかやちむんはまだ国のブランドに認定されていないということで、その認定を受けて実行委員会が、私もそうですが、沖縄県立芸術大学の比嘉康春学長とか、知名定男、平田大一とか、十数名の先生方と一緒に経済産業省に申し出を今年しまして、恐らく今年いっぱいか来年3月までには沖縄の県産三線が国の指定を受けることになっております。

なぜこういう運動をしたかと申しますと、THE BOOMの宮沢和史君が『島唄』という歌を出して爆発的に人気が出ました。それで若い人たちも「宮沢和史が弾いている三線を自分も真似てみたい」と、一大ブームが起きて、NHK連続テレビ小説「ちゅらさん」で沖縄ブームが巻き起こって、また三線をやる人が増えました。それでBIGINや、わが故郷の出身である夏川りみさんなどもどんどん三線を弾くようになって、自分も手に触れて三線を弾いてみたいという若者たちが随分増えている。

三線組合が調査したところによると、1年間に三線が4万丁売れているそうです。しかしその9割方が外国産なのだそうです。ベトナムで作られた安価の三線であったり、台湾で作られたりとか、そういうものが多く、実は沖縄で作られた三線は2割程度ということで、やはりブランド化

していかないとはいけません。沖縄から買って来た三線やインターネットで買った三線等を沖縄の県産ブランドだと思って使ってみたらポキッと竿が折れたりして、お店に電話したらもう電話が通じない。そういう苦情もたくさんあったので、それを解消しようということで県産三線普及ブランド化委員会が発足され、いま申し出の結果を待つところになっております。

三線というのは、ただ実用性を求め、技術を求めて奏でるということではありません。やはり沖縄では宗教性で、思想性の影響もあります。どういうことかと言うと、これは大事なものだから押入れではなくて、飾りますね。末代までも、重要な宝として八重山の人が守っているのが三線です。

それからもう一つ、今、沖縄本島には15団体の民謡協会がございまして、琉球民謡音楽協会、沖縄民謡保存会とか、たくさんあるのです。これはもっと増えたら大変なことになるので、そろそろこの辺でまとめないといけないのではないですかということで、一昨年、私が協会に声をかけまして、10団体集まって一昨年から正月の1月に合同弾き初め会というものをやっています。来年もやる予定であります。

なぜそういうことをしなければいけないかと言うと、なかなか沖縄県も、目の前にいらっしゃる久万田先生が在籍されている芸術大学も、民謡に関してはまったく無知の人が多くて…。久万田先生は別です。だから、あくまでも古典音楽というものが中心で、認定とかそういう形で優先的になされている。やはり民謡というのは、沖縄の、もちろん八重山も含めてそう言えますけれども、周囲の心を本当に支えてきたのは「島唄」ではなかったかな、ということを見ると、沖縄の重要なところの魂だと思っております。それに従事されているメンバーや団体が一つになれば、県や芸術大学との折衝や交渉ができるのではないかと、一つの創造性を求めています。民謡界も、民謡団体も、それから三線組合も、成果が出つつありますので、今日のディスカッションの中においても、創造都市石垣を目指す素晴らしい音楽のまち、日本一の素晴らしい癒しのまちとして、創造を夢見ておるわけです。

民謡のことにしましては、後で詳しくご説明したいと思うのですが、そういう取り組みをしております。その取り組みが、難しい言葉で先ほど佐々木先生からも出ていたプラットフォーム式に進められれば良いなと思っております。よろしく願います。

**杉浦** 大工先生、ありがとうございました。では、続きまして桜坂劇場の野田隆司さんから、沖縄音楽の海外発信の取り組みということで、自己紹介を兼ねていただければと思います。よろしく願います。

**野田氏** こんにちは。那覇から来ました。桜坂劇場という文化施設を那覇市で経営しております野田と申します。私は、久万田先生と同じ本土の出身で、長崎から35年前に沖

縄に移り住んできました。桜坂劇場自体は2005年にスタートしたのですが、まずは自己紹介も兼ねて、沖縄の事例ということでご紹介したいと思います。

桜坂劇場は、那覇市の国際通りの近くにあります。昔ながらの町なかの映画館が撤退するというので、私どもで運営会社を設立して、2005年7月にオープンしました。基本的にハリウッドの人気の大型の映画などを上映できない。ミニシアター系の作品しか配給されないということで、地方都市でミニシアター系の作品だけで成り立たせるのは厳しいだろうということで、文化にまつわることを凝縮した施設にしていこうということでスタートさせました。

桜坂劇場には3つのホールがあります。300席、100席、80席なのですが、300席と100席のホールは、イベント、ライブ等もできるようにしています。年間約300本の映画を上映して、イベント、ライブは50~60本開催しています。ほかに市民大学と呼んでいるワークショップや、カフェ、ショップなども併せて経営をしています。アルバイトを含めて約30人くらいのスタッフで回している状況です。通常のミニシアター系の映画館というと、恐らく映画の売上が9割近くで残りが売店の売上という売り上げ構成が普通ではないかと思うのですが、私どもの場合は、映画の売上は全体の半分以下で、残りのさまざまな事業で約半分を賄っている感じになっています。

そういう中で、新しい事業として「Music from Okinawa」を2014年に始めました。これは杉浦さんがいらっしゃる公益財団法人沖縄県文化振興会と沖縄県の支援を受けて、沖縄音楽を海外に紹介することと、アジアで音楽のネットワークをつくる、そういったことを目的にしてスタートさせた事業です。その背景としては、そもそも久万田先生がお話しになったような、沖縄音楽の非常に豊かな土壌というものがああります。80年代後半から90年代の前半にかけて、ネーネーズや喜納昌吉さん、りんけんバンドの皆さん、多くの沖縄のアーティストからレコード会社のサポートを得て海外に紹介されました。その同じ時期、日本国内ではワールドミュージックのブームがありました。ブームが去った後はCDの売上が落ちて、結果もうまく出なかったこともあって、そういう支援も減ってしまいました。その後、海外のマーケットで沖縄の音楽が忘れられてしまった状況が20年くらい続いていて、2010年代に新しい今の沖縄の音楽というものを改めて海外のマーケットに紹介したいということで、Music from Okinawaというプロジェクトを始めました。

その中で一番大きなきっかけになったのは、WOMEX ワールドミュージックエキスポ、という世界最大のワールドミュージックに特化した見本市です。ピラニア・アーツという民間の会社が主催して1994年に始まりました。開催都市とパートナーシップを結んで各ヨーロッパの都市を巡回して開催されているものです。出演アーティストは公募で決まります。昨年に関して言うと47か国668の展示社、ブースも約300出展されていて、参加者数は約3,000人くら

いです。今年は、来週スペインのカナリア諸島で開催されることになっています。メインが見本市、トレードフェアなのですが、スタンドの出展料は今年で860ユーロ、約10万円です。人が参加するのには、また別にお金がかかります。アジアからの参加者が4パーセントとアジアからの出展はほぼない。私たちが出展したときは、もう沖縄と韓国と、あとは北関東の尺八屋さんが出展している感じでした。

2014年から2016年の3年間、Music from Okinawaとして出展したのですが、スタンド、ブースで、沖縄のアーティストの音源を公募してサンプルCDにまとめて、スタンドに来てくれた方に資料と一緒に配布する。そして、いろいろな可能性について話をし、交渉事ということを行う。そういうことを繰り返しながら沖縄の音楽を紹介してきました。沖縄の音楽というと、りんけんバンドやネーネーズが記憶のどこかにあるらしくて、そのことを話される方がいらっしやいました。

ショーケースと呼ばれるコンサートがかなりたくさんあるのですが、応募は世界各地から1,000組以上で、実際に採用されるのは100組ほど。そのうち公式のセレクションとして60組、7 samurai、7人の侍と呼ばれる審査員の方が選考を行う。この公式のセレクションに選ばれると、ある程度のステータスをもってその後売り込みなどができるようになっています。沖縄からは、2014年に石垣島出身の新良幸人さん、宮古島の下地イサムさんのSAKISHIMA Meeting、2015年は、ハンガリーでKachimba 4という沖縄音楽とサルサをミックスしたバンド、そして2016年は、沖縄音楽とジプシー音楽やロックとかパンクなどいろいろなものをミクスチャーしたマルチーズロックが参加しました。残念ながら、先ほど申し上げた公式のセレクションには漏れたので、主催者枠というか、オーディションをしてそういう枠を調整していただいて、出演をさせていただきました。

こういうショーケースに出演すると、やはり少なからずいろいろな反応があるのですが、実際にそれをその後の仕事にどのようにつなげるかというのは、やはりマネージメントの腕次第というか、そこには語学力を含めた交渉力が求められます。

この3年間の一番の成果としては、改めて今の沖縄音楽というものを認識してもらえたことだと思っています。沖縄のアーティストを、海外のフェスティバルや、レーベルであったりとか、そういうものの選択肢に加えてもらうきっかけになったと思います。課題としては、マネージメント的な、英語の語学力も含めたスキルや、アーティスト側の覚悟ですね。どのくらいの気持ちで海外に出たいと思っているのかということ。それからファイナンシャルの部分。お金の面で、ギャランティーも含めて丸抱えで呼んでもらえるところもあれば、逆に足代は自分たちで何とかして来てくれということもあります。そういう意味で、やはりお金の部分というのは、けっこうハードルが高いです。それと、沖縄県内、地元でこういう動きをしていると

いうことを知ってもらう機会がなかなかなくて、そういう意味でも発信力、認知度を上げていく必要があると感じています。まだいろいろと細かいことがあるのですけれども、とりあえずこのような感じですよ。

**杉浦** ありがとうございます。今それぞれの八重山の現状についてお話をいただき、皆さんが取り組んでいらっしゃることをご紹介いただいたりしたのですが、八重山音楽が今後ユネスコの創造都市に立候補していく中で、非常に大きな特徴をもっていると思います。先ほどの佐々木先生のご講演にもありましたように、非常に生活の中で身近に音楽があるというようなこともあつたりするわけですが、その中で八重山音楽の今後の可能性というのはどうということなのだろうかということ、パネリストの皆さんに少しお話しただければと考えています。

今、野田さんから、野田さんが取り組まれている沖縄音楽を世界に発信していくことについてお話をいただいたのですが、発信に当たって、いろいろなネットワークが重要なかなと思っているわけですよ。そのご紹介をいただくのと同時に、野田さんから続けてネットワークの可能性と、敢えて八重山音楽の可能性は何だろうと思われるのかということも少しご紹介いただけると、と思います。

**野田氏** では、引き続きこのスライドを使ってお話しします。

最初に2014年に事業をスタートしたときの目的というのは、沖縄から海外に発信するということと、アジアの音楽ネットワークをつくるということがあったのですが、今、その一つのゴールとして、アジア版のWOMEXのようなもの沖縄発でやれないだろうか議論を重ねています。そういう中で、いろいろなフェスティバルであったり、カンファレンス、イベントに実際に自分たちで出掛けたり、逆に招かれたり、またはバンドが出演したりということが、この約4年間にいろいろありました。このつながりを沖縄に集約して、Trans Asia Music Meetingという音楽カンファレンスを2016年からスタートさせました。お手元に今年2月にやった時のチラシがあるかと思うのですが、今年はここに書いてあるような皆さんを、モンゴル、ベトナム、中国、台湾、富山、韓国、愛知から招きました。皆さん、それぞれフェスティバルのプロデューサーをやっていたり、レーベルの運営をされていたり、非常に精力的に活動をされています。先ほどはWOMEX、ワールドミュージックという括りがあったのですが、このフェスティバルというのはワールドミュージックの括りではないので、基本的にジャンルはいろいろ様々で、ロックのフェスティバルもあれば、インディペンデントな音楽を紹介するようなイベントもあります。ジャンルに拘らずに音楽を発信し、紹介していきたいということから、こういう人を招いてカンファレンスを行いました。

内容は講演、プレゼンテーション、シンポジウム、ネッ

トワークミーティング、いろいろあります。その中でショーケースとしてSakurazaka ASYLUMという小さい音楽フェスティバルを同時開催して、実際に海外からの参加者に見ていただいて、そのバンドを売り込む。そして1 on 1 ミーティングの場で、各プロデューサーの方にバンドが自ら売り込んで、お互いの情報を交換する場になっています。基本このやり取りは全部英語なのですが、皆さんそれぞれに関係性をつくってもらっています。そういう中で結果もいくつか出てきていまして、Kachimba 4 というバンドは、今年、中国 2 回、韓国 2 回、非常に大きなフェスティバルに招かれました。Churashima NavigatorとThe youというバンドは、モンゴルの大きなロックフェスティバルのPLAYTIME FESTIVALに呼ばれました。またHARAHHELLSは、ついこの前、韓国のZandari Festaというショーケースに出演しました。

このように、沖縄から音楽を発信していくということはとても重要なことだ考えているのですが、実際にそのネットワークを機能させていくということを考えたときに、やはり逆にこちらの沖縄側でも外のミュージシャンを受け入れていかないと、やはり難しい。双方向性で海外のものもできるだけ紹介していく。そこでお互いのいい関係性をつくっていく。沖縄に実際に来てもらうことで、いろいろなアーティストの方に沖縄のことを知ってもらえますし、逆にそこが情報の発信にもつながるのではないかと考えています。

ここ数年、独自に自分たちで直接海外から招へいるケースもあるのですが、富山県のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドというワールドミュージックフェスティバルと2015年から連携して、海外のバンドを沖縄にも招いています。昨年は大工哲弘先生にモーリタニアのウーラミットセイマリというバンドと共演をしていただいたり、そういう海外のバンドと沖縄のバンドがこういう共演する場面をつくることで、お互い音楽的な理解も進んでネットワークにもつながるのではないかと考えています。

ただやはり、こうした音楽は、興業的なハードルはとても高いです。CDの市場が自体が縮小傾向にあったり、那覇自体が人口30万人、周辺を入れて50万人くらいだと思えるのですけれども、やはりそのマーケットはすごく限られていると思います。あとは自分たちの宣伝やプロモーションが足りない、そういう部分もあるのではないかと考えています。ただ、裾野を広げていく必要は非常にあると考えていて、宣伝・プロモーションというよりも、お客さんを教育というか、育てていくような、そういうアプローチや、システム的に何かもっとうまく変えていくやり方がないかなということを常に考えています。

今年、海外のアーティストを呼んだときには、実際にワークショップをやっていただいて、コンサートとは別のアプローチで、実際に音楽や文化の背景を知ってもらうような、そういうことも積極的にやっています。

これからは、システム的な改善、新しい音楽プラットフォームをつくることをめざしたい。各国でいろいろそれぞ

れに独自の音楽プラットフォームというものはつくられてきているのですが、お金をかけずにシンプルでたくさんの人に開かれた持続可能なもの、そういったものをつくってきたいと考えています。

沖縄にはコンベンションビューローの中にフィルムコミッションという部署があります。そこは映像分野で観光産業と結びついているのですが、音楽に関しても、もっと行政や産業と結びつく必要があるのではないかと考えています。音楽は、例えば八重山の物産展などを海外でやるときには、ミュージシャンが同行してライブをやることもあるので、もっとそこで音楽と行政、産業との結びつきというものを深めていけると、さらに裾野が広がっていくのではないかと考えています。

そして、次回、来年2月9日と10日にTrans Asia Music Meetingを那覇で行います。今回は、前回よりもボリュームをさらに大きくして、より多くの方に来ていただこうと思っていますので、ぜひ機会があれば来ていただきたいと思っています。

八重山音楽の可能性ということに関してなのですけれども、WOMEXなどに行くと、世界中にあらゆる種類の音楽があって、様々な音楽を求めているので、可能性は非常に大きいだろうと思っています。新良幸人さんと下地さんは宮古の方ですけども、SAKISHIMA MeetingというユニットでWOMEXに出たときも、やはりその引きはものすごく強い、そういう印象を受けました。ですので、いろいろな意味で周りからそういうものを押し出して紹介していけるような環境をつくって、バックアップをしていければ、いろいろな可能性が開けてくるのではないかと、そうしたお手伝いを私どもでも少しはできるのではないかと考えています。

**杉浦** ありがとうございます。そうしましたら久万田先生、八重山の話をお話しいただいたのですけれども、今の八重山音楽がもっている可能性、それからポピュラー音楽として考えたときの八重山音楽の可能性についてお話しただけですか。

**久万田氏** 八重山音楽を石垣がやる場合に、いくつか観点というものがあって、今お話してみたいのは言葉の問題です。世の中にはもちろん歌詞のない歌というものもあるのです。例えばお隣の台湾のアミ族の民謡などというのは、掛け声だけで言語のメッセージを伝えない歌がたくさんあるのですが、それは非常に少数で、世界中でほとんどの歌というものには言語的メッセージがあるわけで、どういふ言語で歌を歌うかという大きな問題があるわけです。

先ほどの私の話で、八重山の音楽はかなり近代の早い時期から沖縄本島の商業演劇にも取り入れられて、ある意味では沖縄中で八重山のメロディーが知られているという話はしましたが、それはもろ刃の剣で、沖縄本島の人をそれを全部ウチナーグチ（沖縄方言）に変換して聞いているわけです。つまり、那覇の方言をもとにした芝居言葉をアレ

ンジしていて、八重山の言葉を那覇の人が聞いているわけではないわけです。だから、メロディーは分かっているけれども、全部自分たちの言葉に替えて享受しているということがあります。

だから、では石垣市が石垣発信の音楽というものをやる時に、八重山の独自の、と言っても島によって、地域によって言葉は違うと思いますので、どのようにアピールするか。例えば代表的な民謡をもとにして、八重山の言葉をアピールしていく戦略が必要なのではないかと思えます。例えばBEGINの「島人ぬ宝」という曲は、別に八重山の言葉で歌っているわけではないですから、本人たちは石垣島の出身だけれども、歌は八重山の言葉ではないわけです。新良幸人さんにしても、例えばパーシャクラブというポップスのバンドでずいぶん活躍していますが、意外に沖縄の（いわゆる古典音楽とか民謡の琉歌などの）歌詞の歌が多いのです。沖縄のポップスのバンドはけっこうこんな状況です。りんけんバンドの照屋林賢さんも琉歌の教養のある方なので、かなり古典的な歌詞を自分で作って歌っています。つまり、八重山出身のミュージシャンも、どういう言語で歌を作るのかという問題がすごくあります。

だからそのときに、大工さんは長年八重山の歌を全国で活動されているのでぜひご意見を伺いたいものだけれども、どういう戦略がいいのか。昭和9年にアレンジされてレコーディングされた安里屋ユンタは、作詞者が星克さんです。これは、要するに日本語の標準語で「君は野中のいばらの花か」と作詞したわけで、もとの安里屋節の歌詞とは違うわけです。もちろん、それは分かりやすい標準語なりでアピールを最初にして、実はこの歌にはもともとこういう歌詞や物語があるのだよと、二重、三重に八重山の言葉の背景を説明していくという戦略もあるかとは思っています。そういうことで言うと、やはり石垣市が音楽都市としてやっていくには、音楽だけではだめで、同時に言語戦略がどうしても必要になると思っています。

故翁長沖縄前知事は、最後の3年くらい、島くとうばプロジェクトということに非常に力を入れられて、沖縄の方言を活性化する、後継者の育成もやると随分尽力されましたけれども、それと同じように八重山言葉のプロジェクトというものを同時に立ち上げていく必要はすごくあるのではないかと思います。

**杉浦** ありがとうございます。では、大工先生、今、久万田先生からのお話がありましたけれども、八重山音楽をどのように発信していくかというところで、ご意見を願います。

**大工氏** いよいよ私の出番です。私は、両方大事だと思うのです。守る芸能と、それから全国に発信、いわば世界に発信する音楽、両方持ち合わせていないと、やはりバランスが悪くなると思います。と申しますのも、やはりもともと八重山芸能というのは、奉納芸能ですね。神の前で奉納して、ユ（世）ーニンガイ、ユークイとも言いますが、豊

作を感謝し来年、再来年の夏もまた豊穡をもたらすようにという祈りが根底にあるのです。それを全国に発信というよりも島でこういう伝統の文化は守っていかねばいけないのではないかと。これも大事なことだと思います。

先ほどから話に出ている新良幸人君とか、そのようなポップスを中心にした音楽も、沖縄の音楽として、言うならば八重山の音楽として大事なジャンルとして大いに発信すべきではないかことを思っております。

私は、この八重山の民謡として、もう県外でも海外でもいろいろ歌わせてもらうことはあるのですが、言語の問題です。言語が分からないから面白いという人もいます。海外で聞いて、意味を聞こうとする人はいません。やはり体感音楽、声を聞いて体感して感銘することも多いのです。2006年に文化庁長官の河合隼雄先生と韓国のパンソリと、貞洞劇場で一緒に歌ってもらったことがありますが、あの頃はまだ反日感情があって、「日本語で歌うな」という検閲があったのです。でも、私は八重山の言葉で歌うから、日本語ではないからということで、OKしてもらって、そして歌うと大変喜んでもらって盛り上がったコンサートがありました。

私が定義している八重山民謡というのは、ユンタではないかと思うのです。ユンタ、ジラバ、アヨウです。なぜかと言うと、これは三線が琉球からまだ伝来されていないころ、仕事がきつくて泣き笑いもできないから歌を歌って、艱難汝を玉にす、なのでしょうか、苦勞を癒してきた歌なのです。うちのおじいさんは明治26年の生まれでしたけれども、八重山の歌は、1609年に沖縄が薩摩の島津藩に征伐されるのです。そして、それ以降に、1659年に宮古八重山に人頭税という過酷な税が強いられるわけです。明治36年まで260年間ですよ。その間、台風は来るし、大変な自然災害もありながら、年貢を納めて凌いでいたという、八重山の先人たちは大変な苦勞をされたのです。そのときに……おじいさんがこういうことがあったよと言って「四十八ぬ御用物船具ば納め一、穀上納め七・八俵ん、御用布ん調整（しだ）し納みていん命（ぬつ）ばあそう、我が力やあらん、天神ぬ御助けどうやる」と言って、46の科目の人頭税を毎月納めても、自分たち今命があるのは、本当にこれは天のお助けと、天命だよ。考えられないというくらいに毎日年貢を納めるために働いて働いて、そしてその苦を癒すために歌を生み出してきた。これがユンタという歌です。労作業の歌です。仕事をしながら一生懸命その苦を忘れるためというか、はねのけるためというか、一生懸命田の草を取りながらとか、いろいろな作業をしながら歌を歌ってきたのがこのユンタです。これが、元来八重山の本当の意味での歌だと思います。

近代になって三線が入ってきて、沖縄の古典音楽を真似て、八重山にもたくさんそういう節歌が作曲されるのですが、これらはどちらかというと琉球古典音楽とか、沖縄の三線の音楽の影響を受けて八重山風に生み出されたというのが八重山の節歌ではないかと思っております。

私が思うに、やはり言語を守る大事な島唄があってもい

いし、そしてどんどん日本語や外来語も入れて県外、海外に発信していく新しい八重山ポップスミュージシャンと  
言ってもいいのでしょうか、そういうものを生み出し、八  
重山の音楽がクオリティな音楽として世界から注目を浴び  
る島であればいいかなと思っております。

**杉浦** ありがとうございます。時間もどんどん過ぎて  
いっているなか、1点打ち合わせにないものをお伺いした  
いのですが、県立芸術大学で八重山音楽とか宮古の離島の  
音楽を取り入れるという議論を、確か一昨年とか去年とか  
していたと思うのですけれども、久万田先生、ご存知のこ  
とを少しご紹介いただいていいですか。

**久万田氏** 私が勤めている沖縄県立芸術大学は県立大学な  
のです。音楽学部と美術工芸学部の2学部がありまして、  
6、7割の学生は例えば西洋音楽、西洋美術専攻なのです。  
その中に、沖縄の工芸、織染、陶芸、それから漆も今でき  
ています。そういう工芸の学科と、それから琉球芸能専攻  
という全国的に珍しいものがあるのですが、この琉球芸能  
専攻というのは、沖縄の琉球舞踊、沖縄古典音楽、それか  
ら組踊を勉強するところでした、大工さんもおっしゃった  
ように、そこで沖縄の島々の民謡というものはなかなか教  
えられないのです。ただ琉球舞踊の半分くらいのレパート  
リーは、近代になってから那覇の商業演劇で作られたもの  
ですので、それはほとんど庶民の民謡で振付けていますの  
で、厳密な意味では、琉球古典音楽専攻の学生も半分くら  
いは沖縄の民謡を歌っているわけです、踊りの伴奏とし  
て。その中で、何曲かは完全に沖縄の言葉に替えられた、  
八重山のメロディーだったりするわけです。そこでこの八  
重山からも、もっと県立芸術大学で八重山の「古典民謡」  
をきちんと教えてほしいという要望が出るわけですが、な  
かなかその対応が難しい。舞踊の伴奏曲として民謡は  
ある程度教習しているけれども、本場の八重山民謡をそ  
こで教えられるのか。そういう授業を少しつくることはで  
きますけれども、先生たちも沖縄古典音楽の先生なので、  
やはり古典が主なのです。ただ、我々の側で考えるのは、  
民謡ということを見ると島々、私の先ほどの図でもそう  
ですが、八重山にも素晴らし歌がたくさんある。宮古にも  
あるのです。ただし宮古の民謡というのは、三線伴奏に  
なったものが限られている。それから沖縄の島々でも、伊  
江島、久米島にも、伊平屋島、伊是名島にもそれぞれ民謡  
があるということになると、なかなか全部教えるわけには  
いかない。実際には古典音楽の演奏家、そして組踊りの伴  
奏家として育っていきます。組踊りは1972年に国の重要無  
形文化財に団体指定されていますし、今では琉球舞踊も指  
定されていますので、ある意味では日本の文化財保護の観  
点からも後継者育成をうちの学校は担っている。そういう  
中で、この八重山の芸能、歌や踊りをどのセクションに組  
み込んでいくかというのは大きな課題です。まずはとにかく  
例えば大工先生に非常勤で来ていただいて、学生に教えて  
いただくとか、そこから始めないと、八重山芸能の専門

家を常勤の先生として入れるというのは、なかなか大変と  
いう状況はあります。

**杉浦** ありがとうございます。大工先生、何か。

**大工氏** 先生、ありがとうございます。八重山では、この  
芸術大学、分校カレッジ構想というものがあるのですが、  
いかがですか。芸大の分校を八重山につくって、そして八  
重山民謡を教えていくという。

**久万田氏** この図書館の入口に琉球大学何とかキャンパス  
と書いてありますね。あれはいいなと思って。あれは琉球  
大学からお金が出ているのでしょうか。うちの大学も非常  
に弱小の学校で、なかなかキャンパスと、分校を構えるだ  
けの財政的基盤が弱いものですから、もう少しこちらの石  
垣市あたりと組むと、何か実現可能な気がします。

**大工氏** 旧八重山病院の跡地を利用してとかがいいかなと  
思っているのですが、なぜ私がそういうことを申し上げた  
かと言うと、芸術大学、なかなか八重山の有能な子どもた  
ちが入学しないという、そういう厳しい現状があるわけ  
です。実際、先ほども市長のメッセージの中にあつたよう  
に、石垣市は、小学、中学、高校、3校とも有能な郷土芸  
能のクラブがありまして、その生徒さんが古文祭とか、  
全国の文化祭で優秀な成績を修めているのです。この子  
たちが卒業したらどうするのかとか、琉球大学に行くのか  
な、芸術大学に行くのかな。将来どのような道を歩むのか  
など。毎年期待しているのですけれども、なかなか入学さ  
れない。その子たちはどこに行ったのか。すごく不思議  
で、もったいないと思うのです。

ですから、実は今日、この会場に入る前に、山田書店の  
上にゆいロードシアターというミニシアターですね、8月  
から開設して、映画と八重山の踊りをこちらで常設館を  
目指して頑張っているという方にお会いしました。お会い  
したら、その館長が漢那というのです。私は大工です。大工  
と漢那（カンナ）が、いい話ができるかなと思っておりま  
す。ちなみに石垣副市長も漢那というのですけれども、大  
工と漢那、よろしくお願ひしたいと思うのですけれども。  
そういう子どもたちが県外に排出しないように、石垣島で  
子どもたちが才能を活かせる、そういう劇場や、活動でき  
る場がないのが現状です。ですから皆、那覇に活路を求め  
て東京に飛んで行って、小さな居酒屋でライブをしている  
八重山の有能な子どもたちがたくさんいるのを知っていま  
すけれども、八重山でどうにか未来のクリエイティブシ  
ティにするためには、芸能の島、音楽の島にするためには、  
いろいろな子どもたちを地元で育てて、いつでも、観光客  
が来ても、毎日のように音楽ライブがなされたり、演じら  
れていることを、私はすごく夢見ているのです。

このヒントは、私も6年前、インドネシアのバリ島とい  
うところに、そしてサヌールというところに行きました。  
サヌールの村長と親しくなると、サヌールの街頭を案内し

てもらったのですけれども、「文化・芸能のまちですよ」と村長が力強く言っておられました。バンジャールという公民館みたいなところがあるのですけれども、そこで子どもガムラン、それから少年連ガムラン、要するに主婦連、主婦だけでやっているガムランの稽古が昼から毎日のようにあるのです。それが上手になったら、寺院でお客さんの前で披露できる。寺院でされるプレイヤーは、プロではないのです。聞いたら、ほとんど農協職員であったりとか、銀行職員であったり、農業をやっていたり、要するにセミプロです。仕事から帰ってGパンを洗って、化粧してすぐ寺院に行って、観客の前で踊ったり歌ったりガムランの演奏をしたりするわけです。先ほど、佐々木先生がおっしゃったように、宮沢賢治が言ったように半農半芸。これで八重山の人も、仕事をしながら夜はこのように芸能をもたらし、本当に芸能の島に定着させていくという方法もあればと思っています。子どもたちが皆県外に出て行ってしまって、八重山では本当に有能な子どもたちが残っていない現状を考えると、もう少し場づくりとか環境づくりをやっていく必要があるのではないかと考えております。

**杉浦** 最後のテーマのユネスコの創造都市ネットワークの期待も含めて、一言いただけますか。

**大工氏** やはり八重山には普遍的な可能性があるもので、地理的にも日本の最南端というところですので、ここから何か発信できるものがたくさんあると思います。

もう一つは、やはりバリ島のように、先ほど話したように、奉納舞踊というような形で毎年祭りがされている中、そこにはやはり魂が宿っていると思います。そこで奏でる音楽は、世界に通用するものだと思います。ユンタにしても、世界にいくと、音楽のベースになっているのはワークソングなのです。ワークソングが評価されていって、世界の音楽、各地の音楽、チリはチリ、南米音楽でもそういうような形で発達したものがたくさんあるし、そういう意味ですごく可能性を秘めている。これからとても楽しみな刺激が音楽になってきて、育つ要素があることを願っております。

**杉浦** ありがとうございます。では、ユネスコの創造都市登録への期待ということで、野田さんも一言いただけますか。

**野田氏** 八重山の音楽、去年やった大工先生とのアフリカのバンド、ヌーラ・ミント・セイマリの公演が非常に印象的でした。その2組でセッションをしていただく場面があって、ヌーラのバンドの中に大工さんの歌と三線が入っていくと、全部大工ワールドになってしまう。何かそれだけ八重山の音楽そのもの、歌そのものにももの凄い力があるということに改めて感じました。その2年前には、SAKISHIMA Meeting、新良幸人さんたちと西アフリカのマ

リのバンドと一緒にしてもらったのですけれども、やはりそういう瞬間がありました。

本当に八重山の音楽というのは、ものすごく力をもっていると思いますし、言葉の壁も音楽そのもので飛び越えていけると思うので、いろいろな意味で非常に可能性があると思います。ユネスコの創造都市になると、またそれがさらに底上げされて、よい可能性も広がっていくと思うので、何かできることがあれば協力させていただけたらと思います。

**杉浦** ありがとうございます。久万田先生、お願いします。

**久万田氏** 私はまだ今日の佐々木先生のお話を伺って、個人的にユネスコ創造都市というものの仕組みとかがまだあまりよく分かっていないのですけれども、大工さんが言われることももともと、八重山の子どもたちがみんな外に出て行ってします。だけど、現在は八重山に、石垣島に戻ってくるのに3日も4日もかかる時代ではないし、沖縄本島で活動している八重山出身のミュージシャンも今たくさんいるし、東京とかに出ている子もいて、いつでもインターネットの力などで一つに結束することはできるし、先ほど野田さんからご紹介いただいた沖縄のミュージシャンを集めたプレゼンのCD、あのような形でアピールする方法もある。例えばあれの石垣市版、石垣市にかかわりのあるミュージシャンがみんな結集して、それはYouTubeなどを使ってもいいわけですし、必ずしも物理的な空間に縛られない活動ということはいろいろできるのではないかと思います。沖縄本島中部の沖縄市がエイサーを売り物にして、「エイサーのまち宣言」などをしていますけれども、私はあれに随分かかわって、今年の3月にエイサー会館というものを造りまして、展示のディスプレイのお手伝いなどをしたのですけれども、エイサーは、やはりお盆の行事であって必ずお盆のときに歌うし、最近は創作エイサーといって、それでいろいろなイベントや舞台に出ています。やはり地域の文化が大事なのです。八重山で似たようなことを考えると、こちらには祭りの文化が強烈にあるので、これに若者もきちんと参加して、今はこちらに住んでいなくても、必ず帰省して参加させることができる。それが八重山の音楽にとっても強力な重心になると思うのです。だから、やはり地域の重心を忘れずに、未来の方向を目指していくということに可能性があるのではないかと思います。

**杉浦** ありがとうございます。大工先生、最後に一言ないですか。

**大工氏** 久しぶりに故郷に帰って来たものだからたくさん話すことがあって、大変失礼します。先ほどゆいロードシアターという話が少し出たのですが、そのような民間でやっている施設もありますので、常設館として、例えば民

謡コンクールで最高賞を取った人がここに出て場馴れする、こういう場であっても、交流の場であってもいいかなということで、うまく活用できないものかということで、こちらの会場に来る前、久しぶりに行ってきた次第です。キャバが80くらい、詰めれば100という、本当にほどほどのいい空間だと思っております。

先ほどの河合隼雄文化庁長官と韓国に行ったときの話なのですが、打ち上げでちょうど私の隣に座っていたものですから、大工くん、この八重山民謡というのは、私の生きている間にぜひユネスコ遺産にしたいのだよという、酔って言ったのかどうかよく分かりませんが、まさか民謡で、私たちは生活の中で普通に歌っているし、こういう遺産などということは考えたこともなかったし、ましては国立劇場で歌うなどということも夢にも思っていなかったのですが、実は一昨日も国立劇場で歌わせてもらったのですが、普段我々が己に向かってきた民謡が、このような国立劇場とか立派な劇場で歌えるようになったという、こういう時代を迎えたかなと思うと、大変嬉しく思っております。本当にユネスコ遺産の要件を満たす八重山民謡なのかということは、私なりに十分に満たすものがある。例えば言語です。先ほどの言語という話ですが、今、ユネスコ文化機構が一番絶滅の言葉であると。八重山語を、だけど、歌では、普段みんな若者たちも歌っているわけです。それが八重山の言葉なのです。それを守っている国というのはあるだろうかということを考えると、それは十分だと思えます。その辺は佐々木先生が専門だということで、申し出するときにいろいろ条件があると思えます。その辺も精査して、ぜひこの八重山民謡を、世界ユネスコ遺産を、付加価値を付けて、そして益々八重山から音楽の島の基盤となる民謡を充実していく。拡充していくということが大変重要ではないかと思っております。

たまたま今日は10月17日です。沖縄そばの日ということで、皆さんお分かりだと思うのですが、でも、今日行ったお店の方は分かっていなかったです。そういうものがあるの～と言って、まったく知らなかったのですが、1976年に公正取引委員会でそば粉を30パーセント入れないと沖縄そばとして認めないとされました。もともとどうでもそうなのですね。大和の原料から言わせると、そういう形で大変だったそうです。公正取引委員会を、沖縄そばの名称、伝統の名前を残すのに大変だったと。大変苦労があったそうです。それと同じように、八重山民謡も、頑張ればユネスコ遺産に登録されることもありはしないかという夢を、想像をしているわけですが、そういうことでよろしく願います。

**杉浦** ありがとうございます。すみません。本当は質疑応答の時間をとりたかったのですが、時間がなくなってしまいました。ここでパネルディスカッションを終わりにさせていただきたいと思えます。パネリストの皆さん、ありがとうございました。皆さん、大きな拍手をお願い

いたします。

#### ○総括

##### CCNJ顧問 佐々木雅幸氏

皆さん、どうもありがとうございました。八重山音楽、八重山民謡、そして三線です。ユネスコ世界無形遺産の可能性はもちろんある。それから、創造都市ネットワークの音楽の分野、こちらは現に今生きている文化産業をベースにして認定をしますので、先ほど少し言いましたように、伝統を継ぐ、そして新しいものをつくる、その両方がうまくいくという状態を評価してもらう合わせ技で狙っていいですね。そのときにポイントになる一つは、この八重山というところがアジアの中でどういう位置を占めていて、先ほども沖縄の音楽もそれぞれ違いがあるという話があったのですが、どういう共通性がアジア音楽の中にあって、その共通性と独自性がどうなのかというところがポイントであり、ユネスコは世界のネットワークですから、この音楽のジャンルが石垣に登録されることの意味と、これを明瞭にするということが必要になると思えます。

それから、人材を養成するというので、高校までは地元で育てても、その後のコースが見えないとなれば、音楽の分野だけでもこちらにサテライト校を置くとか、そしてそれが絶えずいろいろな形で、バリ島のガムランではないのですが、年中ライブをコンサートで行えるような場所と結びついて、というようなことになってくるといいので、そちらに向けた計画づくりがないと面白くない。申請は2年に1回ずつありますから1回で通るなどと思わないで、今の状況、将来の姿を思い浮かべながら、まず来年一度申請してみて、2回、3回と重ねていくという中でそれに近づいていくというやり方がいいかな、と思えました。

それから、特に楽器と音楽の演奏、それから楽器から工芸に展開します。創造産業の分野の横のつながり、あるいはジャンルとしても舞踊とかコンテンポラリーダンス、そういう広がり意識して取り組みをするということも大事です。浜松市の申請を準備したとき、浜松は楽器産業が世界的な楽器産業なので、安価に良質な楽器を作ることにより、たくさんの方々が楽器に慣れ親しんで、そこから新しい音楽が出てくるというストーリーを描いたのです。だから、海外の安い三線に依存するよりは、むしろ沖縄全体でクオリティの高い三線を作っていくという産業を再生していくということと結びつけるということもいいかなと思えます。どうもありがとうございました。

**司会** 佐々木顧問、ありがとうございました。

これでCCNJ創造農村ワークショップ in 石垣、基調講演及びパネルディスカッションが終了となります。皆様、ご参加ありがとうございました。

## 創造都市政策セミナー in 金沢市 ～次代を担う文化の人づくり～

日時：平成30年12月4日（火）午後2時～  
会場：金沢市文化ホール 2階 大集会室

**司会** 創造都市政策セミナーin金沢市～次代を担う文化の人づくり～を始めさせていただきます。

はじめに、本日のセミナー主催者である宮田亮平文化庁長官よりごあいさつ申し上げます。宮田長官、よろしくお願ひします。

### 文化庁 宮田亮平長官 挨拶

何といたっても金沢の地で開催させていただけることを、文化庁を代表して厚くお礼申し上げます。

金沢駅に降りたときに、あの鼓門が今は普通に感じますよね。最初、あれができたときはどうかなと思いました。文化は日々変化していくということをつくづく感じます。本日の金沢における創造都市政策セミナーが素晴らしい成果を上げられることを期待したいと思っています。

実は、9月30日に文化庁の50周年式典を京都で開催するということがありましたので、映像を作成しました。私の予定では50人の識者にいろいろな文化について語ってもらったわけですが、ダイジェスト版で20の方に語っていただいたものの、ほんのさわりを休憩時間に皆さんに見てもらっています。今、文化庁のキャッチフレーズ「文化庁はオモシロイ。」ということで、動画を配信しておりますので、ぜひ、皆さんもお時間がありましたらご覧になっていただければ幸いです。

さて、今年は大変災いの多い年でした。地震などいろいろなことがありました。10月の終わりに文化芸術創造都市の長官表彰をしたときに、熊本市を選ばせていただいたのですが、熊本市の副市長がこのようなことを申しました。私にとって非常に衝撃的で、そうか、ものの考え方はこうなのだという、前向きな姿勢を感じたのです。それはどういうことかという、皆さんご存知のように、熊本城は大変な災害に遭いました。ところが、それをあえて夜にライトアップしたそうです。そうしたら、むしろ、あの悲惨なフォルムが、下からライトアップすることによって非常に明るく勇気のあるものになったそうです。それで、町の人たちが下を向いているから、それこそ、坂本九さんの歌ではありませんが、上を向いて歩こうというようになったという出来事をお聞きしました。物事は考え方です。そして、文化の力によっていろいろな変化が出てくるということです。

私は、文化と観光と経済は三輪車であるという話をよくします。特に観光は必ず文化が伴わなければなりません。市長がいるから余計言うのですが、金沢は大したものですね。そういうところをしっかりとらえられていると感じました。そしてまた、金沢には、私の東京藝術大学時代の教え子たちも来て活躍してくださっています。そういう姿

を見るにつけ、やはり、はぐくむ土壌というか歴史があると同時に、発展する環境があることがとてもいいのかなと期待しています。

長くなりました。本日は素晴らしい先生方のお話がありますので、改めて皆さんの中で有意義なセミナーを醸成していただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

**司会** 続きまして、共催者である金沢市の山野之義市長よりごあいさつ申し上げます。山野市長、よろしくお願ひします。

### 金沢市 山野之義市長 挨拶

皆さんこんにちは。

先週までフランスに行っていました。一番大きいミッションは、金沢市との姉妹都市、ナンシー市と姉妹都市になって45年の一つの節目の年で、いろいろな事業を、2年ほど前からナンシー市と打ち合わせをしながら取組んできました。改めて、これからこんな交流をしていこうという調印をさせていただいて、ナンシー市長と私がいさつをしました。

私は、こんなあいさつをしました。金沢市とナンシー市、フランスは遠い。飛行機で十何時間かかります。さらにTGVで2時間くらいかかります。決して近い距離ではないけれども、金沢市とナンシー市はとても濃密な交流ができています。どうしてかなと。二つあると思っていると申し上げました。

一つは、1973年に協定が調印してからすぐに金沢美術工芸大学とナンシー国立高等美術学校、美大のようなものですけれども、その年から学生の相互交流をしています。留学生の交流を、一方的ではなくお互いに受け入れ、また派遣をしています。現在進行形で金沢美術工芸大学の学生は、今、ナンシー市で勉強しています。ナンシー国立高等美術学校の学生は、今、金沢美術工芸大学で受け入れてずっと交流を45年間続けています。民間の学生という若い世代が、しかも美術、文化をしっかり学ぶという明確な目的を持った学生が45年間相互の交流をしています。これは極めて大きいと思っています。若いので、45年間、そこで出会いが起こって結婚した、そんな留学生も現実にいます。これがまず一つです。

もう一つは、協定が結ばれて、それをきっかけにして、金沢市に金沢日仏協会ができ上がりました。民間の皆さんから作っていただきました。ナンシー市でも、ロレーヌ州というところがあるのですが、ナンシー・ロレーヌ日仏協会を民間の皆さんが作っていただきました。その民間同士の交流も活発に行われています。歴代市長がナンシー市に訪問するときは、日仏協会が声をかけて日仏協会のメンバーを集めて、今回も日仏協会の皆さん、20名の方が来られて、一緒に行かれました。それで、いろいろな交流をしていました。これが二つ目です。

市同士の姉妹都市というものは大事ですけれども、

我々、市同士の交流というのは、突き詰めていけば民間の皆さんが交流しやすい環境を作っていくのが姉妹都市の目的だと私は思っています。市長同士が気分よくても仕方がないのです。やはり、民間の皆さんがどれだけ交流するのか。その交流しやすい環境を作っていくのが我々行政の目的だと思っています。金沢市とナンシー市の場合は、協定を結んだ翌年、そして翌年からそういうことがずっと行われているということが、距離があったとしても交流が続いている、濃密な交流がなされているということだと思っています。

今日のセミナーのタイトル、次代を担う文化の人づくりということで、基調講演の吉本先生は、株式会社ニッセイ基礎研究所の研究理事先生です。パネルディスカッションもまさに民間の取組みということで、民間の皆さんの、私はお三方、皆さんよく知っている皆さんばかりですけれども、それぞれの立場で本当に八面六臂で活躍されている、金沢市の、石川県の文化事業を引っ張っていらっしゃる皆さんがたばかりです。我々行政の仕事は、繰り返しのようになりますけれども、今日の吉本先生や民間のお三方、パネリストの皆さんが活動しやすい、そんな環境を作っていくことが、長い期間にわたって金沢の文化事業を発展、発信させることになるのではないかと考えていますし、今日、改めて、ここにいらっしゃる皆さんがたとそのことを共有することができればと思っています。

また皆さんがたとも意見交換させていただきながら、しっかりと、繰り返しますが、民間の皆さんが交流しやすい環境を作っていくために、精いっぱい努力しますことを改めてお誓い申し上げまして、私からのあいさつとします。ありがとうございました。

**司会** ここで、宮田文化庁長官と山野金沢市長においては、次の公務のため退席となります。本日は、お忙しい中、ごあいさつを頂戴しまして、誠にありがとうございました。

それでは、基調講演に移らせていただきます。基調講演は、クリエイティブな人材育成～子どもからプロフェッショナルまで～と題して、株式会社ニッセイ基礎研究所研究理事、吉本光宏様よりご講演をいただきます。吉本様、よろしくお願いいたします。

**株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事：吉本光宏氏**

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたニッセイ基礎研究所の吉本です。

今日は、創造都市政策セミナーということで、金沢市にお招きいただきまして、どうもありがとうございます。テーマが、次代を担う文化の人づくり。これは非常に難しいテーマで、何をどう話そうかなと思いながら準備してきました。

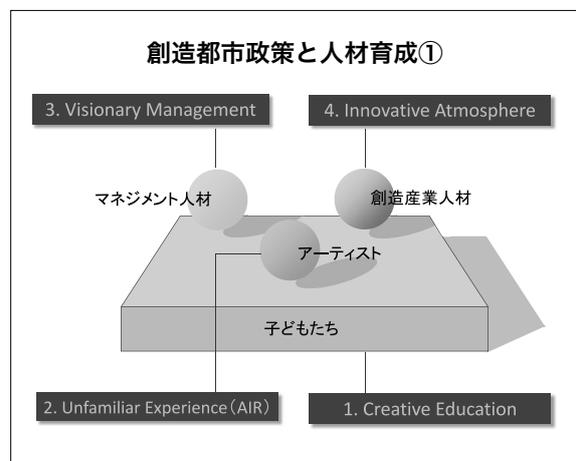
金沢市は日本を代表する創造都市で、創造都市というのはいろいろな特色があると思いますけれども、なんといても人づくりに一番力を入れているのが金沢市の創造都市

の最大の特徴ではないかと思えます。ですので最初のスライドには金沢美術工芸大学、金沢卯辰山工芸工房、そして職人大学の写真を掲載させていただきました。

今日、レジュメを1枚お配りいただいていますけれども、三つのポイントに整理してきました。創造都市には創造都市ならではの人材育成が必要だと思えますので、最初にその視点を整理して、次に私が知っている範囲で人材育成に結びついている例を四つほどご紹介する予定です。そして最後に、創造都市の人材育成のポイントを整理してみたいと思います。

まず、人材育成といったときに、どのように考えたらいいかということで作ったのが、この図です。子どもたちがベースにいまして、クリエイティブな人材の育成という点では、大人はだいたい手遅れですから、子どもからきちんとやらなければいけないというのが一番大切なところですね。そして、人材ということで、アーティスト、それからマネジメント人材、それから創造産業人材と三つに分けて考えることにしました。アーティストはお分かりかと思いますが、マネジメント人材といった場合に、例えば、劇場や美術館を運営する専門人材はけっこういろいろなところで育ってきていますけれども、創造都市のマネジメントというのは相当ハードルが高いのではないかと考えています。

では、それらの人材をどのように育成していくのか。創造産業人材というのなかなか難しい部分があるのですけれども、四つのキーワードを考えました。子どもたちにはクリエイティブな教育。それからアーティストを育成するというので、今日はアーティスト・イン・レジデンスの話をしていただきたいと思います。そして創造都市のマネジメント人材に一番必要なのは、将来を見通すビジョンではないかと思えます。4番目の創造産業の人材を育成するためには、何といても創造的な環境が重要だろうということで、その視点から今日は事例をご用意いたしました。



まず、創造的な教育ということで、文字が小さくて見にくかったら申し訳ありません。最初に紹介したい言葉はこ

れです。少し古いのですけれども、イギリスの文化・メディア・スポーツ省が2008年に「クリエイティブ・ブリテン、新しい経済のための新しい人材（“Creative Britain: New Talents for New Economy”）」という政策文書を発表しました。そこには、こんなことが書いてあります。「アイデアは創造産業の原材料である。しかし、従来の工業製品のように、それらは地中から掘り出したり、樹木から採取したりすることはできない」。だから子どもたち、若者たちの創造的な才能を育成しなければいけないというたつて、ファインド・ユア・タレント（“Find Your Talent”）という週5時間の芸術授業を推進するという政策を打ち出しました。しかし、これはブレア政権の最後の最後の政策でして、残念ながらこの事業は途中で終わってしまいました。しかし、この考え方は参考になると思ってご紹介しました。

日本でもクリエイティブ・エデュケーションというのは本当にいろいろなところで行われております。こちらの金沢市も金沢21世紀美術館には子どもたちが招かれていますと思いますけれども、そういう形で、今、子どもたちがアーティストやアートと出会う場面は本当にたくさん増えております。いわゆるアウトリーチということが日本では盛んになって定着してきたのですけれども、その考え方は、芸術を教えるアーツ・エデュケーションということではなく、教育における芸術の役割を広くとらえる、アーツ・イン・エデュケーション、あるいは芸術を学ぶラーン・アーツではなくて、芸術を通して学ぶラーン・スルー・アーツという言われ方をしまして、日本では全国各地でNPOがその取り組みを進めています。

そして、子どもとアーティストが出会うことで得られる効果はどんなものがあるのか。少し古いのですが、私の研究所で地域創造の委託で行った調査結果があるのでご紹介します。アーティストのワークショップを受けるとどのような能力を養うことができるか、先生方に質問したところ、表現力、コミュニケーション能力、創造力、感受性といった能力が養われると回答がありました。そして最近、たまたま小学校の先生から非常に面白い話を伺いました。ある公共ホールでセレノグラフィカというコンテンポラリーダンスのユニットが子ども向けのワークショップを行った際の子どもの反応に関するものです。彼らのワークショップは全部が正解。何をやってもいいというワークショップなのですが、そのワークショップでは、国語や算数の授業ではなかなかゴールに近づけず委縮している子どもたちが真っ先に伸び伸びと動き出す。逆にいつも正解を出せる子どもたちは、何をやっていいかわからなくてどンドン引っ込んでいくというのです。決まった正解のないダンスワークショップでは、国語や算数が苦手な子どものほうが生き生きして場全体が盛り上がっていくというんですね。まさしくクリエイティブな才能が引き出されている場面ではないかと思えます。

地域創造の調査では、子どもたちにも左側にあるイラスト付きのアンケート票で調査を行いました。体を動かすと

か音楽をやるのが好きになるという回答がありますが、私が注目したいのは、「自分がやることに自信を持てるようになる」と30%以上の子どもたちが回答しているという結果です。これも芸術の授業にとって大変重要なポイントではないかと思えます。

もう一度イギリスの話に戻りたいのですが、先ほどの文書が発表される8年前に、イギリスでは、「我々の未来は創造性と文化と教育にある」という政策文書の中で、クリエイティブ・エデュケーションという考え方を打ち出しました。そして、2001年に「カルチャー・アンド・クリエイティブティ、次の10年間」という政策文書を発表して、クリエイティブ・パートナーシップ（“Creative Partnership”）という事業を始めます。その際、トニー・ブレア首相は「すべての子どもたちが創造的な能力を発展させる。芸術は政府のシナリオの核心部分にする」という宣言をしています。

これは、子どもたちがアーティストやクリエイターと触れるワークショップを行うものなのですが、単に学校の授業として行うのではないというのが大変重要なところなのです。つまり、子どもたちのクリエイティブな才能を育成することが、イギリスの将来の産業や経済を支える人材を育成することになる。そういう大きな国家理念に基づいてこの事業は行われました。スライドにあるように、かなりの予算を投入して、たくさん子どもたちが参加しました。

イギリスは政策評価を大変熱心にやりますので、その成果に関する評価調査の結果が公表されています。クリエイティブ・パートナーシップの授業を受けた子どもたちと受けなかった子どもたちを比較した2006年の調査によると、この授業を受けた子どもたちのほうが、英語や数学や理科の成績が高くなったというのです。同じような調査がアメリカでも行われていて、実は、芸術の授業をたくさんやった子どものほうが主要科目の成績が高くなるといわれています。

同じときに、クリエイティブ・パートナーシップを受けた学校の校長先生を対象に調査も行われました。それを見ると、自信が向上した、生徒のコミュニケーション能力が向上した、学習意欲が向上した等、非常に高い評価が出ています。中でも重要なのは学習意欲が向上したという結果だと思います。芸術の授業を受けることで算数の成績が高くなるといっても、双方に直接的な関係はないと思います。先ほどセレノグラフィカのワークショップの話をしましたけれども、普段、例えば、学校の成績が悪いとか運動が苦手とか、何となく引っ込み思案の子どもでも、音楽をやる、ダンスをやる、それで輝くことができればいろいろなことに前向きに取組むようになります。その結果、学習意欲が向上して、ほかの授業も一生懸命勉強するようになって、それで成績が高まるということではないかと思えます。そういうことを科学的に、かなりのサンプル数で調査したのがこの例で、一番下には創造産業への効果という項目もあります。

実は、このクリエイティブ・パートナーシップは、どちらかという経済的に恵まれない地域や問題のある地域で積極的に行われました。左側に写っている方はポール・コラードさんといって、アーツカウンシル・イングランドでこの事業を推進した方です。彼の話によると、当時、イギリスの創造産業の80パーセントがロンドンとその周辺地域に集中していたそうです。しかし、クリエイティブ・パートナーシップの84%はそれ以外の場所で行われました。その結果、創造産業の担い手がロンドン以外の場所にたくさん生まれた。それがクリエイティブ・パートナーシップの大きな成果だったとポールさんはおっしゃっています。創造的な人材が育成されたということですね。

その後、先ほどご紹介した財団法人地域創造の調査で、世界各国の創造教育に取り組んでいる機関の調査をしたのですが、分析の結果、創造的な教育を行うことによって、子どもたちが得ることのできる能力は大きく四つあるという結果を得ることができました。一つ目は、自信や自己肯定感の回復です。先ほどの話と重なりますけれども、これはニューヨークのH.A.Iという組織のディレクターの言葉ですが、アート・ワークショップは特に自信がなかったり集中力が続かないような学習障がいの子どもにも適していて、達成感を得て自信を回復することができる。自信や自己肯定感を回復するというのは、今、学校現場で非常に大きな課題になっているそうですけれども、そのことにアートは大きな効果があるというのが一つ目です。

二つ目は、創造力、想像力、批評的思考力。批評的思考力というのは、英語で言うとクリティカル・シンキングですけれども、分かりやすく言うと、何かを批評するというのではなくて、自分の頭で考えて自分で判断して行動を決めていくというものです。国語や算数には正解があるけれども、芸術には正解はありません。どのような表現をしてもいいわけです。だから好き嫌いをきちんと言うことができる。そのことによって批評的に物事を見ることができるといことがあります。そのことと併せて、イメージーションとクリエイティビティの両方を養うことができます。これが二つ目です。

三つ目が、社会性や共同作業、グループワーク、責任感というものです。少し前までは、テレビゲーム、今はスマートフォンだと思いますけれども、子どもたちはどれだけ多くの時間を小さなデバイスと向き合って過ごしているか。私は昭和33年生まれなので、子どものころは、仲間と一緒にワイワイやるということが当たり前でしたが、今の大半の子どもたちは一人で過ごす時間が圧倒的に増えているのです。芸術活動、例えば、ダンスを踊る、演劇作品を作るということになると、子どもたちはグループで一緒に活動するようになります。そのことによって、例えば、稽古を休むと友だちに迷惑をかける。あるいは一緒に作品を作るにはみんなと協力しなければいけない。こういう体験をとおして、グループワーク、責任感が身につくといわれています。

四つ目が、先ほどから申し上げている基礎学力の向上で

す。ほかの教科との連携も含まれています。この調査では、カーネギーホールの子供音楽研究所を取材しました。カーネギーホールというのは、もちろん世界で最も著名なコンサートホールなのですが、実は、音楽教育機関としてもとても幅広い活動をしています。そのディレクターは、「21世紀に身に付けるべき能力は、創造力、想像力、協調性、チームワークであり、そのためには音楽が非常に適している。ほかの教科にも積極的に取り組むようになって全体の学力を伸ばすことにつながる」とおっしゃっています。クリエイティブ・エデュケーションというのは、もちろん子どもたちのクリエイティブな能力を高めるということではあるのですが、もっと広い、大きな効果があるということなんですね。

そして、このことに関連して、あるグラフを見ていただきたいと思います。一番上にあるのがコミュニケーション能力、その次が主体性、協調性、チャレンジ精神と続きますけれども、コミュニケーション能力というのは芸術で養うことができる能力です。それがどんどん右肩上がりになっています。このグラフが何のグラフか分かる方はいらっしゃいますか。これは、実は、一般社団法人日本経済団体連合会が毎年アンケート調査を行っている新入社員に求める能力の推移を示したグラフです。一番下は責任感の25パーセントで、責任感はこんなに低くて大丈夫だろうかと心配になりますが、実は、これは20項目くらいの上位6項目を抜き出したものです。上位の項目は、まさしく私が先ほどから申し上げていますように、芸術を学ぶことによって子どもたちが身につけることができる能力、クリエイティブな活動をすることによって身につけることができる能力です。ですから、今、日本の企業が求める人材を育てるためには、もっともっと学校で芸術を導入しなければいけないということをこのグラフが物語っているのではないかと思います。

二つ目はアーティスト・イン・レジデンスの話をしたいと思います。会場においでの方皆さんはご存じだと思いますけれども、アーティスト・イン・レジデンスというのは、アーティストに一定の期間、スタジオで制作したりする場所や時間、環境を提供するというものです。アーティスト・イン・レジデンスは世界中に広がってしまっていて、アーティストは世界中をあちこち行き来しながら新しい作品の発想を得ています。そこでは、それまでとは異なる環境や経験を与えることがアーティストにとって新しい作品を生み出す大きな源泉になっているということです。こちら私の研究所で行った調査に基づいて話をさせていただいたのですが、三、四年前に文化庁から委託を受けて、海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスの調査を実施しました。というのは、文化庁が五、六年前でしょうか、アーティスト・イン・レジデンスの助成を始めたことが、この調査の背景になっています。海外の代表的な事例を30か所くらい調べました。アーティスト・イン・レジデンスの価値は何なのかということで、9項目、これは分析の結果を整理したものなのですが、その内の上の二つが

とても重要な部分で、アーティスト・イン・レジデンスというのは、芸術家の創造の原点を支える機能、事業である。そして、アーティストに未知の経験との出会いを提供することが大変重要だということが、調査の分析結果でした。

そして、調査結果として作成した図解が二つあります。最初は芸術文化のエコシステム、生態系を示す図ですが、真ん中のブルーの部分アーティスト・イン・レジデンスです。その周りには、国際芸術祭とか美術館とか劇場とか、いわゆる芸術に触れる場所、創造都市でも重要な要素が点在しています。アーティスト・イン・レジデンスというと、決して人に見せたりするような場所ではありませんし、人を大勢呼ぶような事業でもありません。しかし、そこで作品が生み出され、アーティストの新しい才能、発想が育まれるということで、アーティスト・イン・レジデンスは非常に地味なのですけれども、新しいものを生み出す創造都市にとって、とても重要な存在だということがおわかりいただけると思います。

次がアーティスト・イン・レジデンスの効果を示す図ですが、この調査では三つに整理しました。一つが、アーティストへの効果や成果ということで、アーティストの専門家としてのキャリアが形成されたり、あるいはネットワークが形成されたりするというアーティスト自身への効果。もう一つは、アートコミュニティ、アート界全体に対する効果です。例えば、アーティスト・イン・レジデンスである作品が生み出されることで、それが新しい芸術表現になっていくというようなことです。でも、日本で最も意識されているというか注目されているのは、地域への効果です。つまり、アーティスト・イン・レジデンスは非常に多様な効果があります。

海外の代表例をいくつか紹介します。これはベルリンにあるキュンストラーハウス・ベタニエンというアーティスト・イン・レジデンスで、ここは最も歴史があり、しかも著名なアーティストを多数輩出しているレジデンスなのですけれども、ただレジデンスの場所を提供するだけではなく、展示会のキュレーターとか評論家と意見交換できる場を設け、そして最後に、ギャラリーで作品を発表する機会もきちんと提供しています。つまり、作品を作る機会を提供するだけではなく、マーケットとつないでいくということもレジデンスにとって非常に重要な要素になっています。

これはライクス・アカデミーというオランダ・アムステルダムにある、やはりこちらも大変歴史のあるところなのですけれども、ここでは、アーティストからこんなものを作りたいという要望が寄せられたら、テクニカルなスタッフが一緒になって全く新しい技術を開発して、新しい表現をサポートするというも行われています。

これはシンガポールのSTPIという、ケネス・タイラーというアメリカの版画の摺師が自分の工房をたたむときに、アジアに移したいということで、シンガポール政府がそれを誘致してできたものです。こちらには本当に世界の著名なアーティストが滞在して、ギャラリーの中では作品の売買も行われています。

レジデンスは、日本はどこかという地域効果を考えで行われるケースが非常に多いのですけれども、本来の姿は、アーティストの才能を育成し、新しい表現をサポートし、それを市場と結び付けていくのがレジデンスの大きな機能になっています。

三つ目は、マネジメントの人材育成について話をさせていただきたいと思います。ビジョナリー・マネジメントと、いろいろ考えてこのタイトルをつけたのですけれども、創造都市の事業をやろうとすると、そんなことできるのだろうか、相当大変だよねということにチャレンジしていくことがとても重要だと思うのです。そのときに、ただリスクを取って新しいことをやるのではなくて、それを行うことによって、将来をきちんと見通していくこと、つまりビジョナリーというものが必要で、そのマネジメント能力が創造都市には必要だろうと思うのです。

これは本当に簡単ではないと思うのですけれども、実際にそういうことをやっている人たちがいるかなと思って、私の知っている範囲で紹介したいのが、二つのNPOです。ひとつ目はBEPPU PROJECT。別府市は代表的な創造都市のひとつですけれども、NPO法人BEPPU PROJECTというのは、10年くらい前にできた、本当に小さな市民グループ、アーティストを中心としたグループから始まった団体です。

今、ご覧いただいているのは、国東半島に設置された、アントニー・ゴームリーというイギリスの彫刻家の作品です。ご覧のように山の頂に設置されていますが、全部鉄でできているので、たしか700キロの重量がある。それをこの山の岩場に設置するというプロジェクトが行われました。ここにどうやって設置するか。最初に彼らが考えた方法は、自衛隊にお願いするというものでした。自衛隊の方々に実際に現場を見てもらったところ、平坦な場所がないから無理だということになったそうです。運搬方法をいろいろと模索した結果、結局、地元にも古くから伝わる櫓を組んでロープと滑車を使う方法がいいだろうということになり、同じ大きさの同じ重さのマケットを作って、何度も試して設置したということです。

もう一つ、ここは修験僧が修行をする大変神聖な場所で、そこに鉄の彫刻を設置するということに対して地元からも相当な反対があったそうですが、様々な方々と議論を重ねて実現できたということです。アントニー・ゴームリーは世界的にも最も活躍しているアーティストの一人ですけれども、彼の代表的なパーマネント作品が国東半島の山の頂に設置された。一見無謀に見えるアイデアを一步一步進めて実現する力、それはまさしくビジョナリー・マネジメントそのものだと思います。

そして、彼らが今年実施したのは、アニッシュ・カプアというインド系イギリス人アーティストのスカイミラーという作品の別府公園への設置でした。凹型をしている鏡なのでも、空が移りゆく様がどんどん映し出されるという本当に美しい作品です。たいへん高額な作品で、また設置が大変でした。しかもミラーはものすごくデリ

ケートで、傷がつかないように24時間監視が必要だというのですね。イギリスのスタジオから輸送したそうですけれども、それも大変で、輸送船が釜山経由で福岡県まで来たところで台風で足止めになった。いよいよ福岡から別府に来ると思ったら、船の航路が北回りだということがわかり日本列島をぐるっと回ってやっと別府市に着いた。私は詳しくは知りませんが、港での停泊が1日伸びるだけで、相当の経費がかかるはずですよ。きっと、ベッププロジェクトの皆さんは、ひやひやしながら作品の到着を待ち、そして設置工事も容易ではなかったはずですよ。そうした数々の困難を乗り越えてでも、実現しようという明確なビジョンがなければこの作品は設置できなかったと思うんですね。私も作品を見に行ったのですけれども、見る度に風景が変わるので、毎朝見に来るとする市民の方々がいます。会期は終了したのですけれども、この作品はまだ設置されていて、何とかこれをパーマネントな形で残して別府市民の財産にできないだろうかということ検討している、とも伺いました。

そして、BEPPU PROJECTは実際にいろいろな人材を輩出してきました。2005年に設立され、今は職員が17名で、年間に2億円くらいの事業をやっているそうです。これまでに、アート関係者10名、デザイナー3名、地域振興の取組みをする人2名、ほかにもいろいろな人材がここから輩出されています。アート関係では、自らNPOを立ち上げたり、アーツカウンシルの職員になったりということで、まさしくNPOがビジョナリー・マネジメントの人材を育てている代表例だと思います。

もう一つご紹介したいのが、東京にあるアートネットワーク・ジャパンというNPO法人です。こちらは豊島区の中学校を改修して、教室を舞台芸術の稽古場に、体育館を小さな劇場にして、2004年ににすぎも創造舎として運営するようになりました。2006年の東京国際芸術祭では、クウェート、パレスチナ、それからイスラエルなど中東から劇団を招聘しました。中東から劇団を呼ぶというのは初めてのことで、今、スライドに映っている舞台は世界初演でした。しかも、イギリスのバービカン・センターとか、あるいはフランスのフェスティバル・ドートンヌとか、国際的な劇場やフェスティバルと共同制作を行いました。立派な公共劇場は山のようにあるのですけれども、そうではなくて、体育館を改修しただけの、劇場としては最低限の設備しかないような場所で、中東の劇団の世界初演にチャレンジし、実現したNPOです。2011年の震災の年には、フェスティバル／トーキョーで東京湾岸のお台場でロメオ・カステルッチというイタリア人演出家によって津波を彷彿とさせるような作品を作りました。

今年のフェスティバル／トーキョーで私が一番感激したのはバングラデシュのカンパニーの作品です。この劇団は17年前に広島原爆の日原爆の物語をペルシャ語で語るという作品を作り、以降毎年ずっと上演し続けています。それを見ると、日本人でありながら原爆について知らないことが山のようにあるということに気づかされます。これ

をやがて広島で上演したいというのがこのNPOの願いです。そういう社会の問題を提起することに演劇を通じてずっとチャレンジしてきました。

こちらのNPOは2004年に設立されて、今、23名の職員がいて、16名がここから巣立っていったそうです。彼らは、新しいNPOを起業したり、行政の財団で働いたり、いろいろな形で活躍しています。16名のうち、アートネットワーク・ジャパンが最初の職場だった人が10名、30代が10名、40代が6名ということですから、この小さなNPOもビジョナリーなマネジメント能力を持った人々をたくさん輩出している例の一つだと思います。

もう一つ、まだ未知数の部分がありますが、今、地域アーツカウンシルが注目されていて、現在、全国各地で創設が続いています。アーツカウンシルで働く人は劇場や美術館で働く人たちとは違うアートマネジメント能力、特に文化とほかの分野を結び付ける能力を求められる人たちです。実は、アーツカウンシルの間で人がいろいろ動いています。沖縄にいた人が静岡に来て、新潟に行ってみたり、あるいは東京の人が沖縄で経験して、長野に行ったりとか。まだ人数は限られていますが、そういう経験が全国で共有されていくことによって創造都市政策というのはさらに進化する可能性があるのではないかと思います。

それから四つ目は、創造的な空気感と書かせてもらいました。新しい創造産業を起業する人々を育てるのは、私は相当難しいと思います。基礎的な能力は教えることができて、その人が新しいことにチャレンジするには、そうしようと思える環境が一番重要ではないかと思って、イノバティブ・アトモスフィアとここではキーワードを作ってみました。

事例で紹介したいのは神山町で、ご存じの方も多いと思うのですが、まずはユーチューブにアップされた映像をご覧ください。

自動車のコマーシャル映像なのですから、見ていただきたいのは最初の部分です。これがすべてコンピュータのデータでできているのですが、ホントにすごいと思います。3Dモデリングという技術なのですから、その世界最先端の技術を持っている方の活動拠点は徳島県神山町なのです。松山の方と結婚されたので、今は神山を離れているかもしれませんが、神山という場所は私も何度も訪問して、皆さんもご存じのとおり、本当に新しいものが生まれる不思議な場所で、そこで起こっていることをご紹介します。

神山の地域創生は、冒頭で紹介したアーティスト・イン・レジデンスが起点になっています。1999年、今から20年近く前にアーティスト・イン・レジデンスを市民グループが始めました。寄井座という古くから残っている芝居小屋などをスタジオに、毎年3人を招く小規模なレジデンスです。住民が運営して、非常にアットホームなレジデンスで、お父さん、お母さん制度というものがあります。例えば、あるアーティストが寒いらしいということになると、お父さん、お母さん役の人たちに連絡が回って、翌日の朝、

アーティストが滞在している家の前にストーブが3台届くとか、そういう手作りのレジデンスとしても話題になっていきました。そのレジデンスがスタートしたことをきっかけに、神山ではいろいろなクリエイティブなことが起こっていきました。現在の人口は5,600人です。アーティスト・イン・レジデンスが始まって以降、古民家再生によってサテライトオフィスができ、フレンチビストロができ、クリエイティブな仕事をする人たちが移り住むようになりました。今、4K放送が始まりましたけれども、数年前から4K徳島アーカイブズで徳島の文化を紹介したり、4Kの国際映画祭なども始まっています。AIRをきっかけにいろいろなことが派生的に始まっているのですけれども、神山こそ創造的な空気感がある町ということなのです。

何人か、神山から生まれた人材を紹介したいと思います。まず、坂東さんという建築家です。彼は東京芸術大学の建築科を出た後、ハーバード大に留学し、その後ニューヨークの建築事務所に就職する予定でした。しかし、その前年にリーマンショックが発生して、ニューヨークの設計事務所が軒並み採用を取りやめて困ってしまいました。それで、彼も徳島県出身で、たまたま神山のことを知って、神山で仕事ができないかと大南さんを訪ねたそうです。でも神山には彼の活躍できそうな仕事はなかった。ところが翌年、彼は東京芸術大学の助手として日本に戻ることにになり、それを知った大南さんが、検討していた古民家の改修を彼と東京芸術大学の学生チームに頼むのです。それがきっかけとなって、そのあと、「えんがわオフィス」「WEEK神山」という宿泊施設など、神山でいくつかの建築設計を手がけることになった。その実績が評価され、彼は2年前か3年前のヴェネツィアの建築ビエンナーレの日本代表に選ばれた。3年前に金沢21世紀美術館で建築の展示が行われた際にも、彼の作品が展示されていました。今は徳島県の離島の民家再生などにも取り組んでいます。まさしく神山が育てた建築家なんですね。

二つ目は、恵比寿に本社があったプラットイーズという映像会社が神山にサテライトオフィスを開設して、働き方改革が起こっているという事例を紹介します。この会社に入ると、どこの出身でも神山で働くか恵比寿で働くか選べるそうです。その際に重要なのは、神山のサテライトオフィスは支店ではない、ということです。この図の赤いのが神山のスタッフを示していますが、全ての部門に東京オフィスと神山のサテライトオフィスの人が入り交じっています。つまり、神山にいて東京本社にいたのと全く同じ仕事ができるんですね。今、働き方改革が叫ばれていますが、神山ですでにそういうことが実現しているということです。

そして、ご覧のようにサテライトオフィスが次々とでき、地元からの雇用を生み、そして新しく起業する人たちも出てくるということが起こっています。

次は、先ほど紹介した映像を作った寺田さんという方です。実際には彼一人ではなく、チームで作ったということなのですが、彼は2014年7月に神山に一人で来て、

気に入って住み着きました。それ以前は独学で3Dモデリングの技術を身につけて東京で仕事をしていました。彼は、神山で靴職人と出会いました。その方は金沢さんという名古屋出身の方で、オーダーメイドの靴屋をやりたいということで、神山で店を開きます。人口6,000人の町のオーダーメイドの靴店でも、今は行列ができるくらい人気になっていて、今年の夏には、東京の高島屋にオーダーメイドの靴職人として招かれました。

金沢さんはもともと足の不自由な方にぴったり合うような靴を作りたいということで靴職人になったそうです。例えば、リウマチになると足が変形しますよね。でも変形した足の靴は、木型から作らなければならないので、とても高価になってしまう。そこで、寺田さんの3Dモデリング技術を使って、二人でリウマチで足が変形した方々にぴったりの靴を安く作れないかと試作品を作ったそうです。そんな化学反応も起こっているんですね。

実は寺田さんはストリート・フリスビーの世界的な名手で、子どもたちが3Dプリンタを使ってオリジナルのフリスビーを作って楽しむ、という、まさしくクリエイティブ・エデュケーションのようなこともやっています。

そして、この連鎖がさらに続いて、フードハブということで、地産地食という活動も始まっています。神山で採れたものを神山でおいしい料理に調理して食べるということです。アーティスト・イン・レジデンスならぬシェフ・イン・レジデンス、フランスからシェフを招いて神山の食材で新しいものを作ったり、ということにも取り組んでいる。たしかアイルランドからの移住者が地ビールを造り、今年は、フードハブのチームがオリジナルの日本酒を造りました。実は私は徳島出身なのですが、その日本酒を醸造したのは、私の親戚の吉本醸造株式会社でした。小ロットで対応してもらえる造り酒屋がなくて最後にたどり着いたのが、吉本醸造だったそうです。今は私のいとこが細々と酒造りをしているのですけれども、ひょっとしてこのお酒が売れたら吉本醸造も活気を取り戻すかもしれない。それくらいいろいろなことが連鎖して起こってきています。アートで始まったものが、サテライトオフィス等を経て、神山の産業の本丸である農業にまで派生するようになってきた。クリエイティブな空気感がいろいろな新しい産業を生み出す原動力になっているということです。

その中心的なプレイヤーは、NPO法人グリーンバレーだということをご存じの方もいらっしゃると思います。長らく理事長を務めた大南さんは、アーティスト・イン・レジデンスをやっていなかったらここまでは来なかつたらとおっしゃっています。神山に地域創生の扉を開かせてくれたのはアートだと。大南さんは「やったらええんちゃうん」という言葉をよくおっしゃるそうです。何か新しい人がやってきて、こんなことをやってみようと思うのですけれどもどうでしょうと相談されたら、やったらどうですか、と背中を押すそうなのです。その言葉に押されて神山でいろいろなことを新しく始められた人にたくさん出会いました。少しゆるい感じが、神山が創造的な空気感にあふ

れる場所になっているということだと思います。流れを整理すると、レジデンスをやったことによって神山は創造的な空気感がある町だというのが何となく伝わってきて、そこに人が集まるようになり、新しいビジネスがどんどん生まれて、創造的過疎、地域創生というものが起こっているというのが神山の例です。

そしてもう一つ紹介したい事例があります。先々週、サンフランシスコに行く機会がありまして、フェイスブックの本社を訪ねることができました。ご存じの方はあまりいらっしゃらないと思いますが、フェイスブックが行っているアーティスト・イン・レジデンスを視察しました。オープン・フォームという彼らの過去6年間のAIRの記録をまとめた本があるのですが、その中でザッカーバーグは「アートはフェイスブックの歴史の中で非常に重要なパートを占めています」と言っています。ITジャイアンツがなぜAIRを行っているのか、取材してきました。

フェイスブックは、今、東京を含め世界各国に30か所近くオフィスがあって、そのすべてのオフィスにコミッション・ワークがあるそうです。全部で200点くらいだと言っていました。ご覧頂いているのはサンフランシスコの本拠地で、サンフランシスコの中心から車で1時間くらいのところなのですが、とにかく広いです。このエリアは全部フェイスブックで、住所が1フェイスブックウェイというんですね。これはフランク・ゲーリーが設計した新しいオフィスで、彼らはキャンパスと呼んでいるのですが、とても巨大な建物です。その中に設置された作品を拝見しました。デスクの配置は不整形で、全体的にとってもコンテンポラリーな感じなのですが、そこにこういうアート作品がたくさんあるのです。ジェンダーフリーと書かれた社会的な問題を訴える作品もあつたりします。この作品はフェイスブックらしいと思ったのですが、コンピューターの要らなくなったキーボードや配線を使って作品にしています。それからこれは日本人のミキマサコさんの作品で、彼女は神山のアーティスト・イン・レジデンスに滞在したことがあって、彼女の紹介で案内してもらったのですが、とにかく作品がどれもこれも巨大なのです。こういうものが世界中のオフィスにあるということです。

キュレーターの方のジェシカさんに、フェイスブックにとってアーティスト・イン・レジデンスの価値は何かを尋ねたところ、フェイスブックのミッションと合致しているからだということです。フェイスブックのミッションは、人々を満足させる、コンフォート・ピープル。それからコミュニティを作っていくこと、ビルディング・コミュニティ。そして新しいことにチャレンジすることでそれはAIRの価値と同じだということです。フェイスブックはインターネットとか、コンピューターの中でいろいろクリエイティブな作業をするのですが、アーティストは必ず手作業をする。手でモノを作っていくことの大切さを職員に伝えたいということもあるそうです。アーティストによっては、ほとんどでき上がったものを全部壊してまた1からも

う一度作り直すようなこともあります。そういう部分が、フェイスブックの価値と共通するところがあるということです。

ザッカーバーグは、「つながっていること、コミュニティを作ること、人々を助けようとする、がフェイスブックの価値につながっている」とも言っています。それから、「アートは、私たちが世界を近づけるために仕事をしていること、世界には私たちと異なる考え方を持った人がいることを、私たちに気づかせてくれる」とも言っています。フェイスブックで働く人たちは本当にクリエイティブな能力を求められる人たちですね。そこにアーティストがいて手作りでモノを作っていくということが彼らの企業価値そのもの、クリエイティブな仕事をするにつながついているということで、紹介させていただきました。

最後にまとめのスライドをご覧ください。創造都市の人材育成について、なかなか難しい部分がありますが、今日はこの四つに整理させていただきました。

### 創造都市政策と人材育成②

1. Creative Education | 子ども・青少年
  - ・ 創造産業・創造経済の担い手育成
  - ・ 技術・技能習得／高等教育＋束縛されない発想
2. Unfamiliar Experience | アーティスト
  - ・ アーティスト・イン・レジデンス
  - ・ 未知の作品を生み出す環境＋アーティストのキャリア形成
3. Visionary Management | 創造都市のマネジメント人材
  - ・ リスク・テイキング＋明確なビジョン
  - ・ An entrepreneur is more than just a risk taker. He is a visionary.
4. Innovative Atmosphere | 創造産業人材
  - ・ クリエイティブな空気感
  - ・ 挑戦と失敗の許される環境

まず、子どもたちの創造的な才能育成というのが創造都市の人材育成にとって何よりも重要なことではないかと思えます。創造産業や創造経済の担い手を育てるということです。それからアーティストは育っていくというか、アーティストがアーティストになっていくということだと思えるのですが、その場合に、アーティスト・イン・レジデンスというのが非常に大きな役割を果たすだろうということが二つ目です。三つ目は、創造都市のマネジメント人材ということで、明確なビジョンを持ちながらリスクテイキングをしていく人材が必要か。ビジョナリーという単語を英語の辞書で調べると、「起業家というのは単なるリスクテイクをする人ではない。彼には将来を見通す力がある」という興味深い例文が出てきました。まさしくそういう人材が創造都市には重要なのではないかと思います。最後に、創造産業人材ということで、もちろん基本的な能力、基礎的な部分を育成するということはあると思いますが、何よりも、そこで何か新しいことにチャレンジしてみようという空気感、そういう場所が重要だと思います。

もちろん資金やスペースも必要だと思いますけれども、創造的な空気感を作り出していくことが、創造産業の担い手を育てる重要な要素ではないかと思います。

最後に一つだけ、あるアーティストの言葉を紹介したいと思います。「創造性は勇気を必要とする」。今日、長官が最初に勇気とおっしゃっていました。同じようなことだと思えるのですが、これは、マティスの言葉です。

では、ここから先はパネルディスカッションということで、3人のパネリストの方が出てくださいます。恐らく、本山さんはアーティストを市場に送り出していくことについてお話しくださると思いますし、宮田さんは創造的人材育成、そして浦さんはNPOをやっているから、貴重な人材を輩出しているのではないかと私は勝手に思っていますけれども、そういう話をしてくれるのではないかと思います。

今日は人材育成という難しいテーマで、私の知っている事例を提供するだけになりましたけれども、人材、特に創造的な人材、創造都市における人材づくりということで、何かの参考になれば幸いです。どうもありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。どうぞ大きな拍手をお願いします。

#### ○パネルディスカッション 創造都市・金沢における民間の取組

(パネリスト)

認定NPO法人趣都金澤理事長 浦淳氏

株式会社CENDO代表取締役 宮田人司氏

Galleria PONTEガレリアポンテ代表 本山陽子氏

(モデレーター)

吉本光宏氏

**吉本氏** それでは、パネルディスカッションに入りたいと思います。パネルディスカッションでは、創造都市金沢における民間の取組みがテーマです。私の先ほどの話の冒頭でも申し上げましたけれども、創造都市政策として、金沢は本当に人づくり、人材育成にとっても注力されていると思います。そのような中で、金沢でご活躍されている3人のパネリストの方に入っていて、今日のテーマを深めていきたいです。お三方とも、民間の立場でさまざまなクリエイティブな活動に取組んでいらっしゃる、今日は、ご自身の活動の中から、次代を担う人づくりということも踏まえて、それぞれお話しただけのことになっております。

最初に、本山さんからお願いします。

#### ガレリアポンテ代表：本山陽子氏

ガレリアポンテの本山と申します。よろしく申し上げます。

私は金沢市内でギャラリーを営んでおりまして、通常、

いろいろな作家の展覧会をして、それを販売するという活動に従事しています。また、いろいろな企業、法人への提案等もしていたり、アートディレクションなども担ったりしています。今日は、私がギャラリーという仕事をしながら、この金沢の町でアート、具体的には、特に工芸なのですけれども、それでどのようにまちづくりに取組み、かつ、それがどう市場を作っていくという試みをやっているかという具体的な事例を、主に3点、金沢アートスペースリンク、そして工芸回廊という事業、そしてKOGEI Art Fair KANAZAWAという三つの事業を通してご紹介したいと思います。まず、自身の紹介を兼ねて。犀川大橋を渡ったところにギャラリースペースがありまして、若手の方から中堅の方を中心に、いろいろなアートのジャンルの作家の展覧会を行っております。もちろん、コマーシャルギャラリーです。新作を発表してもらって、それに値段をつけて販売することを重視しています。

もう一つ、長町のほうに武家屋敷があるところなのですが、こちらでatelier&gallery creavaという、セラミックスタジオと蔵を改装したギャラリーのディレクション業務なども2年前から担当しています。作ることで楽しむことを一緒に楽しめるスペースもあります。またもう一つ、ディレクション業務では、金沢市工芸協会という団体がありまして、日本で一番大きなアートフェア東京が国際フォーラムで毎年開催されているのですけれども、こちらに出展するというディレクション業務も担当させていただいています。この金沢市工芸協会という団体は、大正14年、1925年に発足して、今年で93年を迎える歴史のある団体です。金沢市内近郊在住の工芸作家であれば所属、年齢、ジャンルなどに関係なく、所属できる団体です。その事務局を金沢市のクラフト政策推進課が担ってくださっておりまして、市役所の方と工芸作家が二人三脚で運営しているという形で、そこにギャラリーとしてディレクション業務を担う形で参加させていただいて、日本で一番大きいアートフェアのマーケットに金沢市工芸協会を出してみようという取組みなどにも参加させていただいています。

実際に金沢で私が携わっているアートに関するまちづくりの事業の3点の内の一つのご紹介に移りたいと思います。まず、金沢アートスペースリンクがあります。こちらは2012年に発足しまして、金沢市の近郊に点在しているアートスペースが参加しているコミュニティの名称です。当初は11店舗のギャラリー参加だったのですが、2018年になると26店舗くらいに参加が増えております。発足のきっかけになったのが、2012年に金沢21世紀美術館で開催された工芸未来派という企画展でした。このときに、金沢市野町にあるいわゆるコマーシャルギャラリーやアートスペースに美術館の外にサテライトを作ろうという発想があった、いわゆるミュージアムとギャラリーが協働して何かできないかというお声がけをいただいた中で、こういうアートスペースリンクが発足しました。その流れで、参加した11のスペースを兵庫県陶芸美術館の学芸員の坂本牧子さん

をご招待してギャラリーツアーを開催するというを同時にしました。美術館では工芸未来派展がやっていて、町側のギャラリーでは、それぞれのギャラリーが企画した工芸の展覧会をやる、その中をキュレーターがアテンドするというを行ったりしました。実際に、ギャラリー内にキュレーターの方が来ていただいて、ギャラリートーク、当時、展示している作家とその作品を買うギャラリーのコレクター、お客さんとギャラリストの4者がギャラリートークをするという催しをしました。

こういうアートスペースリンクがありまして、冊子を作ってマップを作ってスタンプラリーなども行いながら、市民の方に町側のギャラリーを巡ってもらうということをやったのですが、これは現在も続いています。各ギャラリーでやるのと同時に、アートスペースリンクの事務局を担ってもらっているのが金沢アートグミという認定NPO法人です。参加のギャラリーが全部集結して展示会を行うということも毎年開催しています。この金沢アートグミの所在地が大見町市場の北國銀行です。そちらの3階にスペースがありまして、いろいろな事業をやられています。NPOの金沢アートグミは、もともとは金沢まちづくり市民研究機構という、金沢市が2003年から10年間、公募で市民からそういうまちづくりに取り組む人材育成を図るために募集した人たちの中から立ち上がったものでした。その中のアート系のグループが2006年に、金沢アートグミです。まちなかに金沢の文化芸術の下支えを、官ではなく民間からできないか。アートセンターをまちなかに造れないかという構想を練って、2008年に準備委員会が立ち上がって、法人格を得まして、2009年に金沢アートグミというスペースがオープンしました。また、2016年には認定NPO法人も取得しています。こちらのNPO金沢アートグミはの構成メンバーは金沢美術工芸大学の教授、アーティストやデザイナー、会社員やアートコレクター、税理士など多種多様な市民の方が運営に参画しています。こちらのサポートを受けながら、町に点在するアートスペースが集結していろいろな事業をやるということが始まっておりま。金沢の参加しているアートスペースも、いわゆるコマースギャラリーだけではなく、カフェやバーに併設されているアートスペースもあったり、金沢らしく麴屋に併設のギャラリーがあったり、また、オルタナティブスペースとかアーティストランのような、作家自らが運営しているようなスペースも参加したコミュニティになっています。

次に、工芸回廊という事業のご紹介です。こちらは、金沢21世紀工芸祭の一つコンテンツなのですが、もともとは金沢青年会議所が2010年から15年にかけて開催していた金沢燈涼会という事業を引き継いで発展させたものです。町中がギャラリーとなり工芸の作品を金沢らしい町屋に展示販売するという、衣食住さまざまところに工芸を落とし込んでみようではないかという事業です。2016年からは青年会議所の手を離れて、今年に関しては東アジア文化都市2018金沢の実行委員会と金沢市が主催して、共催で青年会議所、また、NPO法人趣都金澤、そして

先ほどの金沢アートスペースリンクが参加して開催している事業です。

私はこの2016年から工芸回廊の全体の監修をさせていただいているのですが、その立ち上がりも、先ほどの金沢アートグミの立ち上がったアートスペースリンクと同時の2012年が一つのきっかけになっております。このときに、NPO法人趣都金澤とアートスペースリンクのギャラリストたち、そして青年会議所を運営しているJCのメンバー、これら三者が一緒に一つ工芸回廊というか燈涼会という事業に取り組んでみようではないかという声がありました。今まで、ギャラリーはギャラリーで何かをする、青年会議所は独自で自分たちJCの事業をする、美術館は美術館で独自の企画をするという、縦割りの感じのぶつ切りだったものが、JCの一つの事業を横断的にいろいろな立場の人が協働しながら広がりを持つという、金沢だからできるコンパクトさの中に、顔が見える町だから、声がかかりがあって、じゃあ一緒にやってみようか、みたいな部分があって始まったのがこれです。それまで、工芸回廊という事業は作家に直接オファーして展示してもらうという形をとっていたのですが、ギャラリーにも参加してもらって、ディレクションを少ししてもらおうということを始めました。今映っている近江町市場、アートグミの横でトークショーをやったのですが、JCの当時のメンバーだった宇田（直人）さんは兼六園の茶店をやっている方ですけれども、現在の金沢21世紀工芸祭の実行委員長でもありますし、こちらの土屋さん、金城樓5代目の店主の方はJCを卒業した後も金沢21世紀工芸祭の事業に携わっていただいたりと、領域をまたいだ連携が生まれ始めたと感じたのが2012年のことです。今映っているのが今年の工芸回廊のパンフレットなのですが、東山と主計町という金沢らしい古い町屋が残っている有名な茶屋街のエリアのレストランや販売の店舗にJC事業の時代から町の人に場所の提供を依頼して、店舗の一角や一室を開放してもらって、工芸作家の展示を行うということをやっています。町屋の実際の展示の風景がこのような感じですが、榎尾（聡美）さんは金沢美術工芸大学を卒業して、今は北海道に行かれています。彼女の町屋の展示空間を、金沢21世紀美術館にいたキュレーターの内呂（博之）さんにディレクションしてもらって展示したり、久保市乙剣宮という神社の境内に巨大な金工の作家、東山葉月さんが作った鯨が突如として現れていたり、風情のある町屋の空間に加賀友禅の毎田仁嗣さんの季節感を感じる作品が展示されています。実際にどの会場でも展示だけではなく販売もされるのが一つ大きなポイントです。かつ会期中も作家やギャラリーが会場に詰めてアテンドして、市民の人たちとコミュニケーションをとって販売したり、いろいろな話を聞いたりします。これがKOGEI散歩です。株式会社ノエチカの高山（健太郎）さんというとても優秀なディレクターかつ事務局の方がいるのですが、彼が半年をかけていろいろな学生をレクチャーして、当日、いろいろな各会場を巡るツアーを開催して、さらに積極的に観光客の方や市民の

方に工芸回廊の会場を回ってもらうという事業もしています。フェイス・トゥ・フェイスで丁寧にアテンドすること、事業がJCから金沢市に移管されて、NPOが主管で事業を展開するようになり、作品の売り上げが倍増しているような状況が生まれていたりします。

最後ですけれども、もう一つご紹介する事例がKOGEI Art Fair KANAZAWAです。これは2017年に初開催しまして、今年で2回目の開催をしました。実行委員会の形式でやっています、主管としてはNPO法人趣都金澤がやっております。また、協力として一般社団法人金沢クラフトビジネス創造機構、そして金澤アートスペースリンクという三者が協力しながら運営しています、実行委員会の実行委員長には金沢の経済人、クラフトビジネス創造機構の理事長でもある福光（太郎）さんとか、副委員長にはNPO法人趣都金澤の浦さん、そして私等が入って運営しています。アートフェアというのはそもそも何かというと、世界では、バーゼルやケルンが1960年代後半から開始していますが、ギャラリーが集ってアートの作品の販売をする一つの見本市のようなものです。日本においても東京、大阪、福岡、名古屋、都市圏でさまざまなアートフェアがここ10年ほど開催され始めております。ほかのアートフェアは実行委員会はギャラリーが集まって協働してやっているものが多いのですが、金沢はギャラリーだけではなく、経済界、行政の三者が協働しながらアートフェアを運営しようとする試みが始まっています。この目的は、工芸を基軸にして金沢から直接世界に開く市場を作ろうということです。小さくても工芸という分野に特化させて、きらりと光ったものを磨いて国際的な中心地になりたい、工芸の拠点性を目指していきたいということです。先ほどのレジデンスの話の中で、レジデンスをしてさらに市場につなげる、マーケットにつなげることが大事だというお話も出ましたが、今までのアートに関する助成は作り手を応援することが多かったのですけれども、その次のステップとして、それを市場に乗せたり広げたりというディレクションやプロデュースなど次のステップに対してのアクションがなかなかなかったなど。金沢に関して、非常に作り手に関して手厚い土地であって、その蓄積があるからこそ今があるわけなのですけれども、その上にさらに国際的なマーケットを構築すれば鬼に金棒という思いもあって、試みとして行っています。マーケットの場の創出が創造都市としての機能強化にもつながりますし、作るまでで終わるのではなくて、文化を経済活動としてその循環を完結させるという仕組みを金沢市自身が持つことが重要だと考えました。芸術の価値の創造と、アートの市場の価値の創出というのは車輪の両輪みたいなところがあると思いますので、金沢は両方担う必要があるのではないかとということです。今年の状況ですと、国内外から25のギャラリーが参加して下さって、約110名の作家が展示しました。会場は、南町にあるリノベーションしたホテルなのですが、KUMU金沢というホテルです。少し和の設えになっているホテルなのですが、こちらにこのような

感じでいろいろなギャラリーが通常ホワイトキューブで展示しているものを展示して販売する形をとります。ホテル系のアートフェアは各地で行われている形態なのですが、コレクターなど買う人が来て、ギャラリーが説明して、作家が立ち会って、美術館のキュレーターが来るという、アートにかかわる人の広がり、このアートフェアという場を通して広がっている場が生まれているということです。やはり、販売のプロにプラットフォームを提供することで、ギャラリーが持っているセクション能力だったり販売力、顧客の方への訴求力をお借りするということがあって、物を作る、産業を集積されるのではなくて、人を集積されることで何か新しい場が創造されるのではないかとという試みを取り始めたところです。単に売だけというのではなくて、非常に賑わったアートシーンが金沢に創出されつつあるという実感を、人の集まりを通じて感じるところです。事前に東京でキュレーターを招聘して、工芸の現状を伺うようなレクチャーであったり、地元事前開催のトークショーをコレクターを呼んで開催することで啓もう活動をやったり、また、フェアの中では、世界の第一線の海外からのインデペンデントキュレーターの方などを招聘して、世界の工芸の現状をご説明いただき、かつ、世界の第一線のキュレーターの方に金沢のこの場を見て認識してもらうことで、逆に世界に発信してもらうという取組みもしてたりします。

以上が、主に私が金沢で取組んでいるようなこととなります。

**吉本氏** ギャラリーの運営をしながら、最初の二つはネットワークを作っていくという活動で、三つ目の工芸アートフェアも国内外のギャラリーに参加していただいて新しい手法を作っていくような活動でした。単にアーティストを育てて作品を売り出すだけではなくて、もっと広がりのあるものにしていっているのだなという印象がありました。いくつか伺いたい質問があるのでなのですが、それは後のディスカッションだと思います。

では、2番手、浦さん、よろしくお願ひします。

#### 認定NPO法人趣都金澤理事長 浦淳氏

浦と申します。どうぞよろしくお願ひします。

私は浦建築研究所という建築設計事務所の代表をしていますが、本日は佐々木先生も顧問で吉本さんと本山さんも会員である認定NPO法人趣都金澤（以下、趣都金澤）というまちづくりの団体の理事長としてお話しさせていただきます。

はじめに自己紹介を。私は浦建築研究所という意匠・構造・設備の専門家が揃う組織設計事務所の3代目で、祖父の代から金沢で仕事をしています。2015年からは東京事務所も開所しています。こちらは日心企画（大連）有限公司という中国現地法人でこちらも私が代表をしています。中国は一人っ子政策などで少子高齢化がものすごい勢いで進んでいますので日本の強みである高齢者福祉施設や医療施設

設などの設計を大連や北京などで展開しています。こちらは文化によるまちづくりを目指している趣都金澤というNPO法人で、2007年に経済人や学識者の仲間と共に立ち上げ、当初より私が理事長をしています。最後に、株式会社ノエチカ（以下、ノエチカ）という会社の代表もしています。ノエチカは、能登・越前・越中・越後・加賀・金沢から取った社名ですが、北陸の豊かな文化を経済化できないかというトライアルとして様々な文化事業を行っています。先ほど本山さんから高山さんの話もありましたが、高山さんは直島の地中美術館などでも職務を経験し、学芸員資格も持ちながら、ノエチカの事業の中心として働いています。また、ノエチカは趣都金澤の事務局機能も担っています。

私の活動は、劇場で言うと、建築を創る、舞台を創るという「ハード」の展開と、舞台のコンテンツを作る、演目を創るという「ソフト」の展開、その両方を行ったり来たりしながら新しい都市シーン、地域シーンのような場を作っていければと思っています。建築設計では、住宅から大学まで、公共施設から民間施設まで幅広く設計させていただいています。

趣都金澤について紹介します。私は金沢青年会議所（以下、JC）という組織に所属し、様々なまちづくりの事業をそこで行ってきました。JCは40歳までしか所属できないため、30～40人のまちづくりに携わってきたJCのOBを中心に、その後のまちづくり活動の母体として2006年に趣都金澤を設立、2007年にはNPO法人格を取得しました。2017年には認定NPO法人となり、現在は約260人の会員がいます。設立当初は7割ほどがJCメンバーでしたが、今は2、3割ほどで、会員の大半は一般市民です。様々な職種の方が「文化でのまちづくり」をキーワードに集まっています。金沢に転勤で来られた折に入って頂いた方などを中心に関東圏在住の方も多く、東京においても東京交流委員会という委員会があります。

趣都金澤は、2004年にJCの中で経済政策の提言書を取りまとめたことが設立の起源です。ちょうどデジタルジャパンの小泉内閣の頃で、行政主導のまちづくりが行われそれから経済団体、経済同友会、商工会議所などが全体的なまちへの取り組みを行っていました。しかし、行政も財政規模が縮小していく中で行政だけで走っていくことはなかなか難しくなる。金沢の強みである文化を主体的に扱っていくのならば、量的拡大から質的發展に流れる中でももう少し長いスパンでものを考えられるような見識のある市民がいることが大事で、そういった合意形成がかなり必要になるのではないかと。そうした市民参画型のまちづくりをしようということで団体を立ち上げました。

趣都金澤は、現在、260人の会員と10の委員会があるまで発展しました。NPOというと、特定の課題解決型の団体が多い中、総合的にまちを考えられるような団体を作りたいと思い、「思考」と「実践」をキーワードに活動してきました。文化というのは遊びから生まれるという語弊があるかもしれませんが、踊る阿呆に見る阿呆なら、自分た

ちで踊るほうになったほうが本質的な文化を知った市民によるまちづくりができるのではないかと思います。座学など思考だけの活動をするのではなく共に何か事業を構築するなど、実践することも大事にしています。

また、新しいコミュニティと書きましたが、260人の会員の内、大学の先生が20人ほど、他には主婦の方や福祉の方、建築関係の方やデザイナー、陶芸家がいったり、そこにももちろん経済人もいるわけですが、文化をテーマに多様な人々が集まっています。1ターンやUターン組も多く、そういった方々のコミュニティの場としても副次効果として機能しています。年間1万円という会費で、コストパフォーマンスもよいと思います。

趣都金澤の事業紹介としては様々なものを行ってきましたが、左上は中田英寿さんと現在、東京芸術大学大学におられる金沢21世紀美術館前館長の秋元雄史さんの工芸をテーマとした対談です。秋元さんは我々に常に様々なサジェスチョンをいただき、私も一緒に長らくまちづくりをさせていただいています。こちらは、石川県立美術館の嶋崎館長と秋元さんとのフォーラムで、県と市の施設ということで連携が取りづらい中にNPOが間に入って実現したものです。他には、大人を対象とした俳句会やイタリア歌手が来られたときは仮面をつけた音楽会なども企画しました。また、昔のコミュニティの役割を戻し地域を活性化させていくために、神社×アートをテーマに「金沢宮遊」という企画も実施しました。また、こちらは金沢城の3大御門の河北門という伝統的空間の中でダンサーと地元の太鼓奏者とオーケストラ・アンサンブル金沢のサクソ奏者が演奏する中でのワイン会です。

趣都金澤の活動でいつも大切にしているのは、金沢の歴史的な文脈やシチュエーションを読み解きながら、それをいかに現代のリズムに置き換え、遊んでいくかということです。こちらは「ツールド日本海ママチャリラリー」という富山と金沢をママチャリで往来するイベントで、富山の人たちと一緒に開催しました。これは単なるレースではなく、ママチャリというまちなみを眺めたり体感できる速度で移動しながら、道中に地域のクイズをチームで解いたりし、両県にまたがる地域資源を再発見する事業でもあります。沿道となる自治体や住民、NPOが手を携え地域間連携することにより、参加者同士の交流や地域文化を楽しみながら体を動かすイベントです。

こちらは「金沢21世紀工芸祭」というイベントです。主催は金沢市と金沢創造都市推進委員会。共催は趣都金澤を中心に様々な団体が入っている実行委員会です。文化庁の補助事業で、金沢市より趣都金澤が中心に実行委員会が企画やコンテンツの運営の委託を受けて実施しています。こちらは2017年度のデータですが、108のプログラム、237人の参加アーティスト、74,000人ほどの来場者がありました。この前身に金沢青年会議所が7年ほど実施してきた「かなざわ燈涼会」があり、その頃から秋元さんと私がずっと総合監修をしています。燈涼会は途中から作家ベースの取り組みではなくギャラリーが主体となって経済的にも成り立

つようなことを意識し、また、各コンテンツのディレクターとして企画にも入ってもらいました。そうした取り組みを経て、今は金沢21世紀工芸祭という大きな事業に育ってきています。

工芸祭のコンテンツを紹介します。はじめに「工芸回廊」。こちらは本山さんに全体のディレクションをいただいています。金沢らしい風情を残す東山と主計町の町家などに工芸作品を置き、空間と工芸を再考してみようという取り組みです。約30の場所と約100人の作家が参加しています。

次に「趣膳食彩」。金沢の料亭をはじめフレンチレストランや寿司屋など魅力的な飲食店と工芸作家を組み合わせ、工芸をテーマに、器に合う食、食に合う器のようなことを行ったり来たりしながら考えています。時には茶席やパフォーマンスも入ったりします。こちらは諏訪綾子さんというニューヨークなどでも活動されているフードアーティストの方で、金沢城の中で特別なしつらえと食を企画してくれました。

次に「金沢みらい茶会」。今年は約10のプログラムがありました。半分は「トラディショナル」をベースとした企画、残り半分は「コンテンポラリー」として従来のお茶の形式にこだわらない創造的な企画に取り組んでいます。コンテンポラリーの企画では、私も2016年に内灘町の着弾地観測所という朝鮮戦争に由来がある海外近くのコンクリートの建物の前で平和の茶会を企画しました。この写真は早川和良さんが企画された浅野川の近くに丸い球体のドームをしつらえ行われた茶会です。金沢は伝統的な土地柄なので、こうした茶会は非常に気を遣いながら行ってきましたが、今年はビートルズの音楽を聴きながらの茶会も生まれました。面白いのはこの茶会のコンテンツが一番企画したい人が多く、東京などからも亭主をやってみたいという方が出るようになりました。自ら面白がり、遊ぶことが新しい文化の可能性を広げる良い例だと思います。

次に「工芸建築展」。趣都金澤の中の「金沢まち・ひと会議」という団体で長らく「工芸建築」という議論を重ねてきました。工芸という動産的な価値になりますが、建築としての不動産的な価値を結び付けることによって、何かしらそこに新たな不動産的な価値を見出せないか。あるいは、建築の視点としては、近代建築までは建築の中に一品一品職人が考え抜いた工芸がしつらえられていたのが今ではほとんど二次製品や三次製品が主流に。そうした関係性を今一度考え直し、空間に合わせた工芸、工芸が活きる建築を作れないかという取り組みです。

建築を建てる時、昔は大工の棟梁がいて職人がこういうものがないのではと問いかければその中である種の一つの間、かけ合いがされながらものをつくってきました。ですが、最近では建築家が1本1本すべての線を決めてしまう。このような状況の中で、なにがしか新しい建築のカタチとして「工芸建築」をつくれないうか、このような議論を趣都金澤の中でしてきました。そして、関わった各々が考える工芸建築の表現の場として、2017年から金沢21世紀美

術館で「工芸建築展」を行っています。出展者は工芸作家や建築家が主ですが、今年は哲学者やVRのアーティストがいたり、どんどん工芸建築の概念が多様化し、それにつれ参加者も作品も多様化しています。出展者は東京在住者や北陸への移住者も加わり、Uターン組など長年こちらに在住している方との接点をつくることにも取り組みました。金沢は文化度も高く、力量のある方が多くいらっしゃいますので、内外の力をミックスさせることで地域の力をさらに引き上げていける可能性があるのではと考えています。

来年、ドイツのベルリンにフンボルト・フォーラムという大きな文化施設が完成しますが、その施設の中の茶室の設計コンペティションにこうした工芸建築の取り組みの中から私たちも応募し、光栄にも採用いただきました。フンボルト・フォーラムは複合文化施設であり、その中に入る国立アジア美術館内、日本フロアーの常設の茶室です。提案では、まさしく工芸建築として、今まで議論してきた工芸作家と組み、建築と工芸が融合した造形に高い評価をいただきました。外壁の茶色い部分が鉄で出来ていて、金属作家の坂井直樹さんという文化庁宮田長官の東京芸術大学時代の愛弟子の方が担当されています。この黒の部分は漆芸の西村松逸さんが担当され、こちらの部分は陶芸家の中村卓夫さんが担当されています。それぞれ国内外の第一線で活躍されている工芸作家さんで、建築のコンセプト的な部分から議論に参加いただき、全員で提案内容を詰めていきました。工芸建築の長年の取り組みが仕事としても表れた嬉しい事例です。

また、工芸のマーケットを作ろうということで「KOGEI ART FAIR KANAZAWA」という工芸に特化したアートフェアを金沢で立ち上げました。先ほどの工芸祭とは少し異なる視点ですが、工芸祭や趣都金澤の活動がベースにあって、そこから派生しさらに新しい人たちが加わってきています。

また「金沢デザイン会議」というフォーラムを東アジア文化都市2018金沢の枠組みの中で開催しました。もともとは趣都金澤のフォーラムの中で、金沢は学都として多くの大学があるが、例えば、金沢美術工芸大学などの優秀な学生の多くは就職で県外に出てしまっている、また、文化のイベントは多いが、デザインに特化したイベントは少ないのではという声が上がリ、それならばデザイン会議をしようという声も上がり、反響もあり多くの方に参加いただきました。

会議では開催のきっかけでもある、経済産業省と特許庁が連名で発表した「デザイン経営宣言」を取りまとめられたGKデザイン機構の代表の田中一雄さんに基調講演をいただき、その後「経営を変えるデザイン」「地域を変えるデザイン」という2つのテーマでトークセッションを行いました。基調講演の後のトークセッションでは、例えば色や形などをどうしようかといった狭義のデザインではなく、デザインをもう少し広く捉えて、そこに新しいビジネスや地域でしか考えられない地域に根差した、特化した強

みをもったデザインがあるのではないかと、など広義のデザインの可能性について議論がありました。この方はマツダ株式会社チーフデザイナーの小泉巖さんです。また、世界的な建築家であり、福山出身の前田圭介さんには福山の商店街をデザインの方で活性化させた事例を紹介いただきました。このような個性のある方々に集まっていただけなのは、皆さん金沢を面白がって頂いているからだと思っています。登壇者の中で東京から来られたのは田中さんだけで他の方は拠点が地方都市にあり、このようなバランスの中で行うことは東京ではなかなか実施しにくいことで、金沢だからできた取り組みだとも感じています。

他にも東アジア文化都市2018金沢の事業に関連して、私が副理事長を務める一般社団法人ユニバーサルデザインいしかわと一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティなどが主催として「ダイアログ・イン・ザ・ダーク ショーケース@金沢21世紀美術館」というイベントも開催しました。ダイアログ・イン・ザ・ダークは、純度100%の暗闇の中で対話を行うというプログラムです。東京と大阪がメインになっているものを金沢に誘致し開催しようと、ダイバーシティ×工芸をテーマにコンテンツを作り上げていきました。ユニバーサルデザインいしかわは、ユニバーサルデザインを考えることによって都市に多様性を呼び込もうと考えて立ち上げた団体で、設立して2年弱ですがこのような事業もやらせていただきました。

金沢は山に守られて、新幹線が長らくつかなかったことも一面良かったのではないかと、ストックとして多くのものが残り守られてきたと感じます。金沢は加賀前田藩政ばかりが言われますが、もう少し視点を上げて、北陸という地域でみると、古事記の時代から非常に古く多様な歴史があり、それが今の金沢に繋がっています。

つい先日、六本木の国立新美術館で文化庁主催のフォーラムがあり、その中でフローからストック経済だという話がありました。例えば、日本は借金が1,100兆円あると言われますがそれはフローの話で、ストックの部分がそこには換算されていません。それをどうやってソフト主導、地域主導で海外に売り込んでいくのか。ストックに注目して取り組んでいこうという話でした。金沢、石川は太平洋戦争で焼けていない稀有な地域ですし、金沢は明治時代まで全国4番目の人口があった。加賀前田藩が創った文化の都、それが街区も蔵に眠るお宝も焼けずにそのまま残った。そういう意味ではストックの宝庫だと私は思っています。そのストックを編集する、守る、そしてイノベーションするような人材を地域で育てていく視点が非常に大事だと思っています。先ほどの工芸祭のように一つ一つの企画にディレクターとして人材を出していく。本日ここにお集まりいただいたようなストックへの理解が深い方々や県外の方など多様な方々をこの地でミックスさせながら、一つ一つのコンテンツの質を上げていき、新しいこの土地らしい文化をつくる。そのようなことを考えてまた、やっていけたらと思っています。

**吉本氏** 実は、私は3年前に趣都金澤の会員になりました。3年前にお招きいただいた際に、懇親会があったのですが、本場にいろいろな人が大勢いらっちゃって、みんなそれぞれまちづくりに対する思いがあることを知って、その場で会員になりますと言ってしまいました。

浦さんの話を伺うと、設計事務所の仕事をいつやっているのだろうかというくらい、本場にまちづくりに注力しているのらっしゃるという気がしました。後のディスカッションでももう少し詳しくいろいろ話を伺えたらと思います。

3番目は宮田さんをお願いしたいと思います。株式会社CENDOでもいろいろな活動をされていますし、まさしくクリエイティブな人材を作り出す仕事をされていると思いますので、その辺りをお話いただけるのではないかと思います。

では、よろしくお願いします。

### 株式会社CENDO代表取締役：宮田人司氏

宮田と申します。よろしくお願いします。

簡単に4行だけ自己紹介を書いたのですがそれでも、私は結果的に起業家になった感じです。

1989年に最初の会社を作りまして、そこから主にクリエイティブ産業全般、私は入り口は音楽業界でした。そこから映像とかITとかいろいろなことをやってきて、たくさんの会社にかかわってきました。金沢には2001年からご縁があって、毎年金沢に2、3回は来ていたのです。金沢市が主催しているイート金沢というイベントがありまして、これで毎年それくらい来ていると、年に2、3回というのは実家に帰るよりも多い数で、だんだん金沢という町に愛着がわいてきて、2010年に東京から金沢に移住しました。移住して、東京と金沢を行ったり来たりしながら最初は活動しておりましたが、今は大体月に2回くらい東京に行ったり仕事をしています。

今日は、その中でどんなことをしているかというお話をさせていただきます。今日の私の資料には株式会社CENDOと書いてあるのですが、これは金沢で私が経営している会社です。東京でもいくつかの会社に関わっています。その中でMISTLETOE株式会社という、孫泰蔵さんと一緒に展開している、世界中のスタートアップを応援していこうという会社で、私達が注目する世界のスタートアップに投資をしています。投資と言っても、自分たちが心から応援したくなるような、基本的に、人に投資している会社です。その中で、今日はどの部分をお話ししようかと思ったのですが、ちょうど人材育成というお話があったので、私たちが直接経営している、「VIVITA」でやっていることについてお話しをしたいと思います。

2013年頃だったと思いますが、私と孫はこれから21世紀を生きていく子どもたちにとって本当に必要なスキルというのは何だろうということはずっと考えていました。というのも、今の学校で学べることだけで本当に21世紀を生きていけるのかと考えていまして、子どもたちが心から楽しんで何か身につけるべきスキルは何だろうということをも、

我々は2年くらいいろいろ考えてきましたが、最初は、何か新しいデバイスが必要なのではないかと考えていたのです。それで、子どもたちが簡単に情報を入れたり出したりするためのツールを作ろうと思って、そういう実験をやっていたのです。台湾大手ODM企業でプロトタイプまで作ったのですが、モノが出来てみると、やはり重要なのは「モノ」ではないかと考えを改め、新しい「場」を作ろうという話になりました。それで、2017年3月に千葉県の柏の葉にカルチュア・コンビニエンス・クラブという会社がTサイトという、TSUTAYAとは少し違う業態の場所を作るという話があり、ここで一緒に何かできませんかということで、柏の葉のTサイトの中にVIVITAという場所を作ったのです。子どもたちが自由に発想したものを実現することができる場所です。中は少し変わった空間になっていて、大体100坪くらいの空間なのですが、3Dプリンタとかレーザーカッターなどあらゆる工作機械や産業廃棄物の中で何か使える部品などを業者に持ってきてもらった自由に使える材料があったり、あとは、大学がこの近くにあるので、そこの学生のボランティアが来て一緒に手を動かして、何か作りたいものがあったらここで作っていいよという場所なのです。左下に白いリングがあるのですけれども、これが会員証になっていて、中身はNFCというSuicaのような非接触カードです。これを持っている子どもたちが入り口でピッとやると門が開いて入れるようになっているのです。この白いリングは私たちがデザインして作ったのですが、ぱっと見分からないのですけれども、微妙に違う白色が5色あるのです。なぜそのような変なことをしたのかというと、白という色は、世の中には本来存在しない色なのです。光の反射で白く見えているだけなので、少し赤みがかった白とか青みがかった白とか、実はいろいろあるのです。並べると分かるのですけれども、1個だと白にしか見えないのです。これが最初に子どもたちに気づいてほしいところで、「これは一体どういうことなのだろう」というのが導入口になっていて、そこから自分の好きな白を選んでもらいます。カスタマイズもできるようになっています。これをずっと大事に持ってもらいます。ここに子どもたちが入ってきたら、親は「うちの子どもはVIVITAに行っているね」と分かるようになっていきます。こういう空間を、私たちも相手探りで始めたのです。

今は大体700人くらいの子どもたちが毎日のようにここに来ていて、好きなように様々なモノを作っています。思いつく限り子どもたちがやりたいことは全部ここで実現できるような空間になっています。ここの基本的なコンセプトは、大人は「絶対に教えない」ということなのです。もちろん安全管理とかもあるので、我々のスタッフとボランティアを含めてけっこうな人数の大人がいるのですけれども、基本的にカリキュラムは全くないのです。子どもたちが放課後にいつでも来られるようになっています。私たちは「ここは最高の放課後を過ごす場所」と言っています。完全に無料でやっています。1円もお金を取っていないのです。何かで迷ったときに、ここに大人たちに

相談するのはいいのです。その大人たちは、そこで教えるのではなくて、一緒に手を動かす。自分たちも一緒にその場で考えながらモノを作り上げ、一緒に学んでいくという場所になっています。今日はアートの話がたくさん出ていましたけれども、物のとらえ方とか表現の仕方とかも子どもたちにどんどん身につけてほしいと思っています。

私の友人で元ピクサー・アニメーション・スタジオのアートディレクターだった、堤大介さんという方がいて、後ろの絵は彼が描いたモンスターズ・インクです。この人はピクサーのアーティストだったのですが、本格的に絵を描き始めたのは二十歳かららしいのです。現在は独立されてTONKO HOUSEというアニメーションスタジオをサンフランシスコで経営しています。ある日、彼にVIVITAの話をしたらとても共感してくれて、自分にも何か得るものもあるだろうし、子どもたちと一緒に何かをしたいと言ってくださって、VIVITAにワークショップをしに来てくれることになったのです。子どもたちはピクサーの作品をよく見ていますから、今度その人が来るのだよという話をしたら、自分たちでそのイベントの看板を作ろうというプロジェクトを作り始めたのです。これは私たちが何か考えてみてと言った訳ではなくて、自発的にこういうプロジェクトを毎日のように子どもたちが作り始めたのです。堤さん達はここでキャラクターをどうやって描くとか手を動かしながらワークショップをやってくれました。このようなことが日常的に、いろいろ楽しみながらやっているという場所になりました。

大体3年生から6年生くらいまでの子どもたちがほとんどなのですが、あるとき、VIVITAを運営している私達のところ、4年生の男の子から1本のビデオが届いたのです。何かというと、「ここでやりたいことが今VIVITAにあるものでは足りない。それで、こういうものが必要だから運営者の我々に導入せよ」というプレゼンテーションのビデオを自分で撮って送ってきたのです。これを見たときに、私は感動してしまって、すごいなと思ったのです。この子どもがインフルエンサーとなって他の子どもたちにもどんどんこれが広がっていったのです。先々月柏の葉でTサイトのお祭りがあったのですが、ここでVIVITAも何か発表しようというときに、この彼がチームを組んでジェットコースターを作りたいと言い出したのです。それで、自分たちで設計して、その図面を元に材料を集めて、実際にジェットコースターを造ってしまったのです。乗れるものです。そういうことが起こりはじめています。

キッズデザイン協議会会長賞をもらったり、ロボコンなどもやっているのですが、外国からもたくさんの人が見に来てくれています。去年の夏頃に、エストニア政府の人たちが来て、ぜひ、これをエストニアでもやりたいという話が持ち上がりました。エストニアはITで非常に注目されている国ですが、未来の教育はこれだと共感して下さって、準備を重ねてきて、この11月にエストニアにもオープンしました。エストニアのタリンという町にテリシキビというスタートアップを集積しているような場所があり、場所は

百数十年前の工場の跡地で、ここにエストニアのスタートアップの大学生とかそういう人たちが数百人いる場所なのですが、その中に子どもの場所を作っているのです。海外では、エストニアでオープンして、次にシンガポール、台湾、韓国。国内も数力所決まって、私は、実は金沢にこれを造りたいと思っていて、今、場所を探しているところで

す。さらにエストニアでは一昨日、世界で一番大きなロボテクスのカンファレンスがありました。3万5,000人くらい来るのです。ご覧いただいたとおり、子どもたちもとても多いのです。ロボテクスというのは、私たちが想像する動くロボットのほかに、いわゆるインターネットでポットといわれるプログラム、これもロボットに入るのです。そういったものをみんなでその場で造っていくハッカソンをやっていたり、実際にロボットを展示したりしているのです。ちょうど今映っているビデオが、10歳の女の子が自分で考えたロボットをプレゼンテーションしている動画です。世界は、今、このようになっているのです。すごいと思いませんか。これが、今、世界で起きていることで、私たちが昔思っていたような常識とは全然違うのです。この子どもたちは本当に自分でプログラムを書いているのです。

何が言いたいのかというと、人材育成というのは答えがないというか、オートクチュールだと思っていて、そこに合わせてやっていくべきだし、実は、私は育成という言葉はあまり好きではなくて、育成ではなく共創だと思っているのです。ともに私たちは一緒に創っていくということを一番大事にしていて、やはり、単純にお金を出す投資だけではあまり意味を成さない思っているのです。

自分たちでしっかり手を取り合って何か新しいことを創り上げていくことが非常に重要だと思っています。民間で何をしているのかという話が今日は大きなテーマだと思っていますが、やはり若者たちがもっと自由に研究に没頭できる環境がとても重要なのではないかと思います。行政とか地元の企業はそういう研究分野にもっともって投資していくべきではないかと。投資はお金だけではないです。イノベーションを起こそうという話はよく耳にしますが、イノベーションというのは、結局、結果でしかないのです。話を聞いてすぐに理解できるようなものは、イノベーションではないと思うのです。歴史的に、振り返ってみて何だかよく分からなかった話が結果的にイノベーションになっていたということが殆どです。金沢が面白いと思うのは、昔から目利きの人たちがたくさんいるのではないかと考えていて、現代に於いても目利きの町にしていくことがとても重要なのではないかと思います。そして、何よりも志を曲げないで、とにかく続けることが、私が今までやってきた中で一番重要だったことなのではないかと思っています。

**吉本氏** VIVITA、何かすごいですね。

あと30分くらい、パネルディスカッションの時間です

が、まずVIVITAのことをもう少し聞いてもいいですか。

**宮田氏** もちろんです。

**吉本氏** 柏の葉にできたVIVITAに子どもたちがたくさん来ているということなのですからけれども、自由に来て何をやってもいいよという感じなのですか。

**宮田氏** そうです。そこの施設に入ると、工作機械があったり材料があったりコンピューターがあったり、アナログのものもデジタルのものも同じ道具として置いてあるのです。道具と材料。ここで思いつくものをやってみたらということで、そこで子どもたちが何をしたいかわからないとなってしまうかなと思ったのですが、それは大人の考え方で、大人の心配をよそに子どもたちは何も考えずに、先ずやり始めるのです。

**吉本氏** 柏の葉は三井の住宅開発ですよ。そこに住んでいる子どもたちが学校が終わったらみんな来るみたいな感じですか。

**宮田氏** そうです。

**吉本氏** 最初はどのような声かけで始まったのですか。

**宮田氏** プロモーションは一切しなかったのです。そういう新しい場所ができるということだったので、放っておいても最初は人が来てくれる施設なのです。お洒落TSUTAYAみたいなところなので。私たちが取ってプロモーションしなくても、親子連れの方などは週末は相当な来客数を見込んでいたのです。あと、私たちがプロモーションしなかった理由は、私たちもよく分かっていなかったため、少しびびっていたのです。あまり来られても困るなど。

**吉本氏** すごいですね。会場の皆さんの町でもVIVITAを作ってほしいと思った方がいるのではないのでしょうか。学校というのは一体何なのだろうかと、今、話を聞いて思ってしまった。

**宮田氏** そうなのです。私たちが別に学校を否定しているわけではないのですが、学校では学べないことは、今、たくさんあるのだろうと。やはり、とにかく時代がめちゃくちゃに変わってきているのではないですか。そのときに必要なものは本当に何だろうといろいろ考えていて、今回、後半で見ていただいたロボテクスというイベントは世界30か国からいろいろな人たちが来て、それこそ、その国でスタートアップをやっている人もいれば教育をやっている人もいる。その30か国の人たちがみんな口をそろえて、うちの国の教育はダメだと言っているらしいのです。何とかしなければいけないとみんなで言っているのだそうです。そ

れで、私たちがやっていることを見たら、うちの国でもやりたいと言ってきていて、そういう意味では、私たちは新しい教育だとは全然思っていないですけども、子どもたちが身につけるべきスキルみたいな、文脈でいくと非常に分かりやすいかもしれないです。

**吉本氏** 学校との関係はどうなっているのですか。先生とか。

**宮田氏** 実は、学校の先生も来ているのです。学校が終わった後にここに先生が来て、うちでは教えないでくださいよと。一緒に子どもたちと手を動かすのだったらいいですよ。

**吉本氏** 先生には、ここでは教えないでくださいと言っているのですね。

**宮田氏** そうです。

**吉本氏** 教えないということでは、確かにアーティストなどを見ていると、学校に行っても教えるということはやらない。そのほうが子どもたちが自由にやるというのがあって。

**宮田氏** そうです。クリエイティビティをどんどんブーストしていくには、やはり自分で考えて手を動かして。しかし、一人でやりきりなさいとは私たちも思っていないで、何かができる友人と一緒に手を動かすとか、そこにいる大人は、立っているものは大人でも使えみたいな感じでやるとか。しかし、教えないというのも、最初は、どうなのだろうと半信半疑だったのですが、子どもは教えてくれとも言わないのです。

**吉本氏** それで、これを買ってくださいと言う提案が子どもから出てくるというのはすごいですよね。

**宮田氏** 面白いですよね。それが足りないというところにたどり着いたのがすごいと思うのです。

**吉本氏** ちなみに、運営財源はどうなっているのですか。無料なのですよね。

**宮田氏** 無料です。やはり、私たちは未来への投資だと思っているので、ここはもちろん私たちの資金でやっているし、ここに共感してくれている、例えば、材料を提供してくれる会社とか、こういうところはどんどん声をかけていっているのです。

**吉本氏** 私はVIVITAに何かびびっと来たのですけれども、すごいですね。私も人材育成の「育成」という言葉にはけっこう違和感があって、「人材」というのもどうかと。

その言葉を変えるところから始まるのではないかと私も思っていたのですけれども、まさしく宮田さんも同じことをおっしゃっていて、育成というと、やはり育ててあげるという感じがありますよね。

**宮田氏** 私たちはそんなに偉くないと思っていて、育成というほど。

**吉本氏** 最後の宮田さんの話がとても面白かったので、まずそこを聞いてしまいました。

今日は次代を担う文化の人づくりということで、3人にお話を伺ったのですけれども、最初に私が思ったのは、金沢にこの3人がいるというのがやはりすごいなと。しかも、皆さん民間で、今日は創造都市ネットワークの自治体の方が全国からいらっやっていますけれども、皆さんの町にこういう方々はいますか。どうでしょうか。もちろんいる町もあるでしょう。全国の自治体のうち行政主導で創造都市を推進されているところはそこそこあると思うのですけれども、金沢市の創造都市政策は民間主導で、もちろん市がそれを支えるという構造になっているのですけれども、民間が次々に新しいことをやっている。きっと民間主導のほうが長く続き、新しいことがどんどん起こっていくだろうと、常々思っていたのですが、今日はまたそれを強く感じました。宮田さんには以前、CENDOではいろいろなクリエイターのビジネスを育てているという話をされていましたよね。それは続いているのですか。

**宮田氏** もちろんやっています。

**吉本氏** そのうえで、さらに新しいことがどんどん起こっているということで、金沢の底力はホントにすごいですね。

次に3人の話で、私がもう少し突っ込んでいきたいなと思ったことをうかがいたいと思います。本山さんはギャラリーを経営しながら、今日紹介いただいた活動に共通するところは、ネットワークを作るとか、あるいは少し違う分野の人たちをつなげて新しいことを始めるとか、そういうことが共通しているような気がしたのですけれども、それはやはり意図的にそうされているのですか。

**本山氏** やはり、場所を作るというか、プラットフォームを作るというか、それが大事、何かの事業を立ち上げるといふ発想よりは、共有できる場を作るというイメージのほうがありまして、そうすると、自ずと人と人をつないでいくという形になって、いろいろな分野のグループが連携するみたいな形で発展したような。私の場合は主にアートなのですけれども。

**吉本氏** そうすると、今まで出会ったことのない人たちが会うことによって、また新しいことがそこから生まれたりしてくると思うのです。それで、本山さんが経験された

中で、こんなことが起こりましたみたいなエピソードはありますか。

**本山氏** 私もNPO法人趣都金澤に所属しているのですが、やはり地縁とか血縁ではないコミュニティの中で、いろいろな職種や属性の人がいて、やはりアートはアートで、アーティストで固まって、ギャラリーの対話の中で何かやってという狭いところから、例えば、浦さんみたいな建築の視点が作家に入ってきたり。先ほどの工芸建築という取り組みそうだと思いますし、そういう不動産と動産を結び付けるという発想であったり、協働してできるのだとか、もちろん、宮田さんの株式会社Seccaという陶芸の会社がありますけれども、3Dプリンタで陶芸作品を作り出したり、そういういろいろな、皆さんそれぞれの得意分野がかけ合わされていくというか、そういうことがとても発生しているなと感じるのが金沢だなと思うのです。いろいろなアートの実験場になっているというか。昔の加賀藩のころも、京都から茶人だったりいろいろな人を招聘したり、そのソフトを入れてきたりという歴史があって、けっこう金沢の人は外から来る人に対して、特に文化や芸術にかかわる人に対して非常に寛容だなと。

私自身も出身は金沢ではなく生まれは大阪なのですが、金沢美術工芸大学にやってきたときに、金沢市民が物を作っている人に対するリスペクト度が高いというか、美大生だというだけで偉いねと言ってくれる町です。多分都会でやっていると不審な人だなと思われるのですが、夜に煌々と電気をつけて何かごそごそやっていて、朝になったら寝るという昼夜逆転生活をしていても、金沢では、自分でガレージに窯を入れて焼き物を焼いているのですというアーティストだったら、頑張りまっしと応援してくれます。そういう、物を作っている人に対する市民の寛容さとかリスペクトという土壌があります。先ほど、宮田さんも目利きというお話をされましたけれども、それに加え、市民の人たちの暮らしの中に芸術やアートが浸透しているところもあって、常日ごろ何かそういう工芸作品を使っている部分や関心が、やはりほかの地域と比べると高いなど、非常に感じるところです。新聞紙面で文化芸術記事がとても多いのも独特だなと感じたりしますが、そういう土壌があるうえに、宮田さんもそうですし、Uターン、Uターンでいろいろなところからその土壌に引かれてやってきて、何か掛け合わせでクリエイションが生まれてきているのかなという気がします。

金沢21世紀美術館ができた前後の、芸術にとっては卯辰山工芸工房ができた、芸術村ができた、その辺の化学変化みたいなものも同時進行なのだと考えています。

**吉本氏** モノを作っている人に対する温かさとか尊敬がある町が金沢ということだったのですけれども、浦さんいろいろな活動をされる中でその辺は感じていらっしゃいますか。

**浦氏** はい。それが加速したのはやはり金沢21世紀美術館が出来たことが大きいと思います。私は25年ほど前に金沢に帰ってきましたが、戻ってきた時は金沢21世紀美術館が出来る前でした。最近の金沢の一つのキャッチフレーズとして伝統と革新というものが、私もつつい使っていますが、伝統という言葉は伝えて続べるといことです。つまり、革新と伝統は並ぶものではなく、革新から伝統が生まれるというように、いろいろな新しいものが生まれる中でそれが伝えて続べられて一つの伝統になる。常に新しいものが出来ていくことが重要だと思ようになりました。その意味では金沢において21世紀美術館ができる以前の伝統と現在の伝統の捉え方も私の中でかなり違って来ていて、臆気ながらそう感じている人は周り結構いるんじゃないかと思っています。

先ほど、遊びと文化の話もしましたが、遊びが続べられて文化になるところもあると思います。京都はどちらかというと文化は見たりするような文化だと思いますが、加賀藩の前田家が面白かったのは、空から謡が降ってくるというように植木職人が謡ができたり、また、御細工所にいた工芸作家がお茶などの嗜みをやったり、生活と文化がとても近いところが魅力だと思っています。そういう中から、新しいものへの挑戦、多様なものづくりへの寛容さがある土壌ができ、それが現代においても残っている印象を持っています。

**吉本氏** 確かに、金沢21世紀美術館ができたのはとても大きかったと思います。それまで、工芸という、やはりすごい技術に支えられていて、それを守ってきちんと伝えて後世につなげていくみたいなイメージがあったのが、何かここに来て相当変わっていますよね。それは確か、金沢21世紀美術館で工芸未来派展をやったのもきっかけだと伺いました。

創造都市という、どうしても新しいものとか現代的なものに行きがちだと思うのですが、やはり、その町の伝統とか歴史とか古くから残っている文化とか、そういうものの上に成り立たないと、いきなり新しいものだけ入れても成立しないと思うのです。それが金沢の場合は工芸というものがあって、先ほどストックの話も出ていましたけれども、金沢の創造都市の場合、工芸というものは大きいですよ。茶室もそういう要素ですよ。その辺、とらえ方が変わってきたのでしょうか。

**浦氏** そうですね。国立近代美術館の工芸館が金沢に移転されることもあってかなり「工芸」が動いてきています。世界の中でも、大きなアートフェアに工芸部門ができたということがここ近年起きていて、それは金沢21世紀美術館前館長の秋元さんの功績が大きいと思っています。なぜ、今、世界で工芸が売れているかというと、これも受け売りにはなりますが、一つは、モダンアート、現代アートのようなものが非常に値段が上がってしまい、投資も含め買いにくい状況にあって、コレクターもなかなか手が出せ

なくなっているということ。そうした世界のアートシーンの中でクラフトや工芸など新しいアートジャンルへのニーズがある。もう一つは、私も海外で仕事をしている中で感じますが、グローバル社会の中で世界中の都市が平準化してきている気がします。そうした状況の中で、工芸はその産地で採れる土やその土地に伝承された技など、土地にストックされている人やその土地由来のものがすべてつながらないとなかなか成立しません。土地固有のその地域にしかないものという価値がコレクター心理として投資価値に現れている。秋元さんが言うには、金沢が世界とつながっていくときの一つのモデルとして、北陸は工芸ならばその可能性があると。そこにはニーズもある。趣都金澤で工芸を重視し様々な事業に取り組んでいるのは、工芸そのもののフューチャーもそうですが、工芸にこの地を国際ブランド化する触媒としての可能性を感じているからです。

**吉本氏** 宮田さんは東京で仕事をしながら金沢に来られて、そこで新しいビジネスをされていると思うのですが、金沢という町と工芸について、何か感じておられることはありますか。

**宮田氏** やはり、DNAなのではないかという気はします。これだけ工芸というかものづくりをしている人に会わない日はない町です。例えば、先ほど本山さんからご紹介いただいた雪花という会社も、陶磁器をメインにものづくり、あらゆるものを造っているのですが、ここで、例えば、漆を使いたいとかとなったときに、いるのです。東京だとそんなに出会うことはないと思うのですが、金沢はそれだけ職人とか作家がいて、相談できる相手もいて、こんな町はそうないと思っているので、とても特別な町なのかなという気はします。

リトアニアにウジュピス共和国というのがあるのはご存じですか。なんちゃって共和国なのです。かつてにアーティストが共和国を作っているのです。そこはアート担当大臣もいます。私はそれがとても面白いなと思って、べつになんちゃってだったら金沢でもできるではないですか。金沢に限らず、どこでもできると思うのですが、何か目的を持った人たちがこういう新しい動き、それこそブロックチェーンだとか新しい技術がどんどん出てきていますよね。そうすると、新しい概念の共同体というか、作ってしまった人がいるわけです。恐らく、この人たちはICを発行したり、これからやっていくのだと思うのです。これからの生き方は、国家とかそういうところあまりとらわれない活動の仕方をする人たちがたくさん出てくると思うのです。私はそういう生き方は面白い気はしているのです。そうしたら国が潰れるのではないかと考える人もいると思うのですが、別に私はそうは思っていない、税金をどこかに払いたいのだったら好きな国に払えばいいではないですか、ふるさと納税みたいに。実際にこういうことが起き始めているので、ここからは早いと思うのです。例えば、工芸をやっている人たちも、本当に国を作っ

てまえばいいのではないかという気がします。

**吉本氏** 今話を伺いながら、人材育成というのは人を育てるのではなく、生き方を作っていくことなんだと思いました。新しい生き方。先ほどのVIVITAもまさしくそうだし、金沢の中でアートにかかわることで、新しい仕事の仕方を作り、新しい生き方を生み出していくことにつながるのかなという気がします。

また浦さんに伺いたいのですが、先ほど浦さんご説明の中で、NPO法人趣都金澤を作られて、東アジア文化都市で工芸のことをいろいろやられて、その後、さらに金沢デザイン会議を作り、ユニバーサルデザインいしかわを作った、チームで新しいものを作っていくことにどんどんドライブがかかっていると私は感じたのですが、その最大のモチベーションは何ですか。

**浦氏** 実は、私は金沢が好きか嫌いかと言ったら少し微妙で。大阪にも住んでいたのが大阪の方が好きかもしれない。あとは能登も好きです。先ほど歴史の話もしましたが、例えば、能登になぜ輪島塗があるかといえば、金沢が出来た歴史よりももっと古く、大伴家持以前からの歴史がある総持寺という曹洞宗の大本山の土産として輪島塗があったり。そうした繋がりの中で今の金沢がある。私は金沢だけを見るよりも、北陸として大きく捉えた方が見えてくると考えています。例えば、日本海側で一番深い海溝である富山湾には、富山の立山の土壌のミネラル分が海溝の側壁から流れ込み、それを小さなプランクトンが食べて小さな魚が食べて、そして、ブリが食べる。白エビやホタルイカも立山の恵みといえるかも知れません。それが加賀の食卓にあがってくる。

先ほど新幹線が着かなかったからよかったと言ったのは、新幹線が着かなかったことによりそうしたつながりがかなり現代においても残っていて、それを丁寧に見つめ直し、価値転換することが大事だと思っています。私は北陸は世界につながる可能性があると思っています。東京が真っ白なキャンパスに自由に絵を描くとしたら、北陸はかなり色のついた小さなお椀のようなもの。そのお椀にどのような多様性を載せていけるかが大事だと思っています。それが、実はユニバーサルデザインいしかわの取り組みでもあって。団体名に「いしかわ」とつけているのは、この土地だからこそ、地域に根差した独自のユニバーサルの考え方を作りたいと思っています。多チャンネルに繋がりをしながら、趣都金澤のプラットフォームの中にもその一端が絡んできているというイメージで、これは実はとても自然なことだと思います。

最後に一つ、私の活動はすべて私がやっているように思われているところがありますが、実は、周りの人で「これをやりたい」と言う人がいるから続けてこられたのであって、実は本山さんのように実際動かれている方が動きやすいようにサポートしているといった感じを自身ではもっています。

**吉本氏** だんだん時間がなくなってきました。人材育成の話につながるかどうか分からないですけども、今日は創造都市の会議なので、創造都市の話を少ししたいと思います。全国から創造都市ネットワーク日本の会員都市の方々がいらっやっていて、創造都市というのは、先ほども言ったように何か新しいこと、クリエイティブなこと、アートのことをやっていくとなったときに、やはりその土地にしかないものとか、その都市にしかないものが結びつかないと、結局、均質化していく、まねごとになっていってしまうような気がとてもするのですね。私は東京で仕事をしているので東京を好きとか嫌いとかというのは特にないんですけども、東京と比較してどうかということとは当然あると思います。

本山さんに伺いたいのは、以前、アートフェア東京に行ったときに、卯辰山工芸工房と並んで金沢の一角がありましたよね。しかし、事前打ち合わせのときに、アートフェア東京だと場所が足りなくなって、少し違うスペースに出されるということもおっしゃっていました。今度は東京ではなく、KOGEI Art Fair KANAZAWAで、金沢から直接海外につながろうとしていますよね。その辺で、アートフェア東京での経験とか東京との関係などで何か考えられたことはありますか。

**本山氏** やはり、今までは何か世界につながるとなると、東京がワンステップ、地方から東京へ出てというモデルがずっとあったと思うのですけれども、海外でも、地方都市でありながら何かとても特色を持ったもの、きらりと光るものを持っているれば、直接世界とつながれる。むしろ、東京を経由しない発想、もう今はネットもありますし、出て行き方はあえて東京でなくてもいい、むしろ、敢えて固有の資源を持っている地方というか金沢にわざわざ来てもらって見てもらうことに価値があるという方向にあると思います。旅行でもいろいろな体験をするなどシフトしている時代だと思いますし、そういった中にアートというのは一番リアルなものだと思います。あえてここに来てリアルなアートを直接見るという体験をすることこそが求められているのではないかと。そういったときに、金沢という地方に、世界に直接開いている市場が構築できればいいなと。私はいろいろなアートフェアにギャラリーとして出展したりしているのですけれども、いわゆる遠洋漁業に出るみたいなものが近海で漁業をしたいという、イメージでいうとそういう感じなのです。金沢というポートに世界中からアーティストやキュレーターやギャラリーやいろいろなエディターや、文化全般にかかわる人が工芸という切り口で集まるような場を創出できるのではないかと期待と可能性を感じて、取組んでいるようなところがあります。

**吉本氏** 遠洋漁業ではなく近海漁業というのはとても分かりやすいですね。

そのときに、先ほどからキーワードになっている工芸というものは金沢の固有の資源だし、それが逆にユニバーサ

ルな価値も持っているというのは、当然、強みなわけですよ。

**本山氏** 先ほど浦さんの説明もあったのですけれども、アートの中でも工芸というのは、用途性があったり、逆にコンテンポラリーな、現代アートに落とし込まれた工芸があったり、とても多様性もあるし、かつ、地域、素材とか技法とかリージョナルなところに結びついていたり、いろいろな切り口がありますよね。だから世界各地に工芸があったりしますし、そういった意味では、可能性が広い。かつ、日本において工芸都市 金沢は面々と蓄積してきた歴史と人材のストックと、また、近代だと教育機関、金沢美術工芸大学、その前には約130周年の県立工業高校の工芸科。だから、御細工所とか加賀藩の次に綿々とあって、戦争が終わってすぐ、金沢市民は芸術が必要だという発想をして金沢美術工芸大学を作ったわけです。そういう土地だからこそその可能性。かつ、大学の名前に工芸がついているのです。そういう公立の大学はほかにはないですよ。やはり、それが金沢の町の工芸に対する特殊なかかわりというか個性なのだという気がします。

**吉本氏** 1946年、終戦の翌年にできているのですね。

**本山氏** そうです。1946年です。

**吉本氏** ということで、人材育成の話から少し忘れてしまいましたが、今日の話伺っていて、やはり地域、地域の固有資源というか伝統とかを見直すことから、その場所できなければならない、その場所にしかできない創造都市のようなものが生まれてくるのかなという気がしました。それから、今日のテーマは次代を担う文化の人づくりですけども、人材育成というよりも、生き方を作っていくとか、そこで新しい仕事を何か始めてみようという意欲を持った人が集まってきて何か始めるとか、何かそういう環境をどうやって作っていくのかというのが、人づくりという点でキーポイントのような気がしています。

先ほど、浦さんが、自分は何もやっていなくて周りがやれやれと言ってやると。何かそういうやろうという機運というか、芸術や文化の周りで新しいことを始めようという機運が金沢という町にはとてもある。今日の3人の方々のほかにも大勢いらっやして、民間主導で新しいことが起こっていて、それを市や行政が下支えしているような、そういうところが金沢らしい創造都市だし、人づくりにもつながる部分だし、今日、創造都市政策セミナーということで、ほかの地域から来られている方々にも共有していただけたらと思いました。

佐々木先生に総括の言葉をいただくのですけれども、その前に、今日はせっかく全国から人づくりあるいは創造都市政策セミナーということで集まっていたので、最後に、これからの創造都市づくり、あるいはクリエイティブな人材育成について、一言ずつメッセージをいた

だきたいと思います。

浦さんからお願いできますか。

**浦氏** 山出前市長は、歴代の市長の政策を継承しつつ、金沢21世紀美術館や近江町市場、ひがし茶屋街など、長い時間をかけて今に続くこのまちをつくられてきました。山出さんは歴史的なものを大切にその文脈を読みときながら、しかし、時には大反対されながらも金沢21世紀美術館をつくられたり。これまでの金沢の系譜をきちんと読み解き、その先も見越してではないとできないことをされてこれました。

私はこれまで、随分まちや人に育てていただいたと思っています。人生100年時代の中で、おじさんやおばさんも人材の中に含まれるとすると、私のやれる役割は、自分たちの経験を生かして、本山さんのようなやりたい人、やる気のある人の取り組みを文化的な思いの中で下支えし協力していくこと。そうした地域を盛り上げることができる編集者を地域の中にとにかく頑張って作っていくことが大事だと思っていて、なかなか簡単にはいかないかもしれませんが、これからも辛抱強くやっていくことが大切だと思っています。

**吉本氏** 宮田さん、お願いします。

**宮田氏** 金沢は、やはり、とにかくいろいろなことが行われている町だと思うのです。そのような中で、できることをなるべくいろいろこれからもやっていきたいと思っています。私は好奇心がとても重要だと思っていて、好奇心旺盛な人がこの町には多いのだと思うのです。私も含めてですけれども、金沢に来てから学んだことがとてもたくさんあって、とどのつまりは、好奇心というのが私のことを突き動かしている部分も非常に大きいですし、好奇心のある町というか、そのようになって、たくさんの人たちがここで交流して新しいものを生み出していくような、そういう雰囲気づくりをどんどんまたやっていきたいと思っています。

**吉本氏** 本山さん、お願いします。

**本山氏** いろいろな人がともに学んだり助け合ったりするような協働できる場所を作ることは大事だと思いますし、そういうプラットフォームづくりと、自発的にやりたいことをやってみたいという人、寛容の魅力がその町にあれば、分野を超えて異質なものが組み合わさるといことが創造性の源泉だと思いますので、そういうものを可能にする寛容さをその土地や市民が持つていくことが大事なのではないかと感じました。

**吉本氏** では、佐々木先生、総括をお願いします。

**CCNJ顧問 佐々木雅幸氏**

楽しい話をしていただきました。吉本さんの話も非常に素晴らしい話でしたし、その後のパネリストもそれぞれ持ち味があって、また新しいアイデアがたくさん涌いたと思います。

私なりに金沢の創造都市、約20年になるのですが、それを少し振り返ってみたいと思います。

私が創造都市を金沢で提案したのは、1997年に本を書いて、1999年くらいに金沢経済同友会の福光松太郎さんと二人で世界に先駆けて金沢で創造都市づくりをやろうと。それで、市長を巻き込もうということで始まったわけです。福光さんはすごいことを言いまして、創造都市というのは新しくないよと。金沢というのは400年前から創造都市だと。今日出ているようなアーティスト・イン・レジデンスは何も新しくないのです。加賀の殿様は日本中から有名なアーティストを集めてきてここに住まわせて、最高級のものを作らせたのです。アーティスト・イン・レジデンスを400年前からやっているのです。それから、そのときに作った最高級のを全部カタログにしたのです。日本中にある工芸の一覧表です。それを『百工比照』といいます。これは第5代前田綱紀が作りました。残念ながらこれは今、金沢にはなくて、東京駒場の前田育徳会にあります。

皆さん知っていると思いますが、江戸というのは、実は金沢なのです。東京大学は二つキャンパスがあるではないですか。二つとも加賀藩江戸屋敷です。江戸屋敷はもう一つあったといわれています。江戸で一番粋な火消しは加賀鷹です。だから一番目立っていたわけです。つまり、文化的に飛び抜けていたのが金沢だったのです。江戸と金沢はけっこう似ているのです。なので、あまり江戸は気にしないのです。そういうことが400年続いてきたということがあります。

それで、福光さんと最初に考えたのは、とにかくプラットフォームを作ろうと。それは金沢創造都市会議というのです。これは2001年に始めまして、約20年続いています。それを始めたときに、実は、ここにいる3人はまだいないのです。浦さんはまだ金沢に戻ってきていなかったでしょう。宮田さんはイト金沢でちょこちょこ来ていたけれども、2010年に移住してきて、それで加わりました。本山さんはその後だったのです。私たちが考えたときに、創造都市が持続性を持つためには、やはり世代交代していかなければいけません。我々、それから山出市長も年配ですから、20年やって引退されていますが、それで市長が替わったら終わりだということでは創造都市は発展性がないし、実績もなく言葉だけで終わってしまうのかという話になったと思うのです。やはり、次々とプラットフォームを活用して、そこで新しいアイデアがわいてきて、さらにそれが形になっていくと持続性が生まれます。

金沢21世紀美術館も、最初に市長から新しいものを作りたいと話がありました。福光さんと私と当時の副市長の3人で構想を練ったのです。現代武術間に対しては伝統工芸の人間国宝の方々からは大反対で、工芸のない美術館など

は絶対にだめだと。では、分かりましたと。工芸でも現代アートの工芸は入れましょうということで妥協したことがありました。初代館長の養豊さんはとても面白い、まさにアートマネジメントを地で行く方でした。これは今日紹介いただいたクリエイティブ・パートナーシップにも匹敵するような、ミュージアムクルーズという、市内の小中学生を全員無料で半年間で招待するという事業が美術館の成功の基礎となりました。それをやれたというのは、当時の市長が養さんを副市長として迎えて、かなり思い切って予算をつけたからです。市長が引退した後何と言われたかという、文化にもっと予算をつけたかったと。文化にお金を使うという加賀藩の伝統があると、市民も文化に予算を使って悪いとは言わないのです。強いて言えば、どのジャンルに予算をつけるかです。伝統かコンテンポラリーか。しかし、それは浦さんが言われたように、コンテンポラリーがあって初めて、伝統が革新されて持続性をもつのです。

さて、もう1点だけ言いたいと思います。私が創造都市論を書いた20年前と今で大きく違うのは、AI時代の創造都市とは何かということです。これだけAIが急速に普及してきて、人間の能力をある意味では奪うかもしれない、仕事を奪うかもしれない。そうすると、今ある学生たちや子どもたちはAIと競争したり、あるいはAIを使いこなすような、もっと創造性を磨くことになるかもしれないのです。それではどうすればにそのような力がはぐくまれるか。育成ではなく、「はぐくまれるか」です。先ほどの宮田さんのVIVITAは本当に素晴らしいと思います。何が素晴らしいかということ、子どもたちがアナログであれハイテクのものであれ、直接触って自由に何かをしたり、できるわけです。ハンドワークなのです。言い換えると、工芸というのはアートワーク・バイ・ハンドなのです。20世紀の大量生産の時代とAIの時代で、いよいよ人間のハンドワークがないがしろにされる可能性があります。しかし、もう一度ハンドワークが復権していきます。そのハンドワークのアートの表現が工芸です。VIVITAというのはハンドワークを自由にさせる場を作ったということです。だからここにとても大きなヒントがあります。つまり、21世紀を生き抜く、AIの時代を生き抜くために、子どもたちに何を身につけさせるかということは、今、世界の共通のテーマになってきていて、そのことがベースにあるから世界でクラフトアートというものが急激に今、アートの世界で再発見されてきています。そういう流れを見ると、金沢の工芸に軸足を置いた創造都市は一気に世界的な創造都市になれる、世界工芸首都です。今、世界で最先端の尖ったことをやって、その価値を分かった人たちが集まってきたら、そこに新しい場が生まれます。

文化庁の京都移転も進めています。私は、京都には、世界文化首都を目指してほしい。金沢は世界工芸首都で生きるということだと思います。こういう形で、東京とかパリとかという時代ではないので、アジアにさまざまな創造都市が生まれて、それが連携していくと、恐らく国を超える

でしょう。国境というのは歴史とともに変わっていますけれども、都市の単位というのは4000年5000年、あまり変わらないのです。そういう場がもう一度評価される。だから、創造都市という概念は5年や10年で使い捨て、コモディティ化するとは私は思っていないで、まさにこれから先もっと真価が発揮されることになるのではないかと、今日の基調講演とパネリストの討論を聞いて、改めてそういう思いを強く持ちました。

どうもありがとうございました。

**司会** 本日最後の総括は、CCNJの佐々木雅幸顧問よりしていただきました。ありがとうございます。

改めまして、壇上にいらっしゃる4名の方に、感謝の意を込めまして、大きな拍手をお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、CCNJ創造都市政策セミナーin金沢市の基調講演及びパネルディスカッションを終了とさせていただきます。皆様、本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

## ■平成30年度 創造都市ネットワーク会議（総会）

日時：平成31年1月31日（木）午後1時30分～

会場：アクトシティ浜松 コンgressセンター41会議室

**司会** 司会進行を務めます浜松市市民部創造都市・文化振興課創造都市推進担当課長の鈴木と申します。よろしくお願いたします。

はじめに、本ネットワークを代表して、浜松市長の鈴木康友よりごあいさつを申し上げます。

### 浜松市 鈴木康友市長 挨拶

皆さんこんにちは。平成30年度の創造都市ネットワーク日本の総会にあたりまして、宮田亮平文化庁長官、そして顧問であります佐々木雅幸先生はじめCCNJの参加自治体の皆様、あるいはNPOはじめ参加団体の皆様には、はるばる浜松までお越しいただきまして、誠にありがとうございます。心から歓迎を申し上げたいと思います。

2013年にスタートいたしましたこのCCNJ、私どもも発足当初から会員都市として活動しているわけでございますけれども、今年度と来年度、浜松が代表幹事都市ということで、微力ながら創造都市ネットワークの活動に取り組んでまいりたいと思っております。

この創造都市の活動につきましては、私は今いろいろと追い風が吹いているのではないかと思います。一つは、国を挙げて今取り組んでいる地方創生でございます。地方創生は、私の解釈でいきますと、それぞれの地域の特性、あるいは地域資源、こうしたものを活用し、知恵を出し、汗をかいて、それぞれの地域を元気にしていくと、こういう活動だと理解しております。都市の中で、創造的活動を通じて都市を活性化していくという、この創造都市の活動というのは、まさに地方創生にぴったりの活動ではないかと。時代が追い風であるのではないかとということが一つです。いよいよ2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されますけれども、スポーツの祭典であると同時に、文化の祭典であるということで、国は文化プログラムにも大変力を入れておりますので、私たちとしても、この機にさまざまな伝統文化でありますとか、それぞれの地域のもっている文化・芸術といったものを大いに発信していく絶好の機会であるのではないかと思っております。

浜松市は、もともと楽器の街として発展してまいりました。ここに、ヤマハ、カワイ、ローランドという世界三大楽器メーカーが集積しています。大体楽器メーカーというのは、あまり大きな会社はないのですね。ですから、これだけ大きなメーカーが一つの都市に集積しているというのは、大変に珍しい。そして、この大きな三大メーカー以外にも、中小合わせますとさまざまな楽器作りの皆さんがここにいらっしゃるということで、もともとそうした特徴を活かして、楽器の街から音楽の街へということで、音楽文化の振興に努めてまいりました。おかげさまで、佐々木先

生にも大変なご尽力をいただきまして、2014年にはユネスコの創造都市ネットワークの音楽部門でアジアで初めて加盟が承認されまして、音楽創造都市として新たなスタートを切ったわけでございます。昨年、浜松国際ピアノコンクール、恩田陸さんの『蜜蜂と遠雷』で大変有名になりましたけれども、こうした世界的な音楽イベントのみならず、最近では音の最先端テクノロジーを活用して、新たな価値の創造でありますとか、産業の創造ということにも取り組んでおりまして、実は、今日のシンポジウムではそうしたことを発信してまいりたいと思っております。浜松の特徴でありますこうした音楽文化、音を中心に、私たちもさまざまな創造的活動に取り組んでいきたいと思っております。

実は昨日、横浜でSDGs全国フォーラムというものが開催されまして、私もパネラーとして参加してまいりました。SDGsはご存知のとおり、17のゴールと169のターゲットに構成される、2015年に採択されました持続可能な開発目標でございます。なお、今、ここ1、2年、一気にSDGsがブームになっておりまして、これは非常に自治体にとってこれからの重要な活動になると。国がいろいろと目標を掲げても、実際にいろいろな活動をしていくのは自治体であり、企業であり、いろいろな団体ということになりますので、我々の新しい官民のプラットフォームの中で、SDGsの達成に向けた活動をしていかなければいけないと。私は、この創造都市の活動とSDGsの活動というのは、非常に親和性があるなとも思っております。そうした意味で、今後、この創造都市の活動を通じて、地方創生でありますとか、SDGsの目標達成、こうしたことも一つの方向性として考えてもいいのではないかなと、そのようなことを考えております。ぜひ、皆様とこうした問題意識を共有しながら、このネットワークのさらなる発展に向けて浜松市も頑張りたいと思っております。

結びにあたりまして、本日のこの総会が参加されている皆様にとって実り多き会となりますことを心から祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。本日は、ご参加誠にありがとうございました。

**司会** ありがとうございます。

続きまして、文化庁長官、宮田亮平様よりご挨拶をちょうだいします。宮田長官、よろしくお願いたします。

### 文化庁 宮田亮平長官 挨拶

宮田でございます。こんにちは。スクリーンのビジュアルを見ながらのほうがよろしいかなと思ったので、ここで話をさせていただきます。

美味しい食べ物、豊かな自然、ものづくりへのこだわりと、この三つがきちんとあるのが、このご当地浜松ではないかという気がいたしております。その中で、新幹線を降りて改札を出る前に、ヤマハ楽器の変遷がピアノと一緒に置いてありましたね。あれをずっと見て回って、何とすぞいことだろうと思いました。というのは、山葉寅楠という

創業者があるきっかけでオルガンを修理し、そしてその後、ピアノを自分でつくろうということになったのだそうです。そこは、まだそういう人はいます。その時、偶然なのですが、まだ11歳の小僧として現れたのが後の河合楽器製作所の創業者・河合小市という人がいたのだそうです。二人で新たに頑張っ引張って引張っていこうと。新たなことをつくるといのは大変なこと。しかし、そこで大事なことは、お互いの良さを共有する、重ね合わせる。それから欠点も見えるから、それもお互いに直していこうというような連携関係ができたことによって、国産初のピアノをこの浜松から発信して、世界にもってこることができたということなのだそうです。これを、このCCNJに結びつけて言えば、皆様方の、それぞれがお持ちの素晴らしさを重ね合わせていけば新しいものをつくっていくことができるのかなという気がいたしております。

例えば、今、高岡市からお二人が来ています。ついこの前、奈良の薬師寺の東塔が元気がなくなったということで、解体したのです。ご存知のように、一番てっぺんは30メートル超の、7階建てか8階建てだと思ってもらって、その金属の部分が、やはり何百年と経っているといういろいろな障害があつて壊れてくる。どうしようか。修復しようか。その委員を私もやらせていただいた時に、これはほかでもない、鑄造の町・高岡で再現しようということになったのです。その時に、高岡だけに任せておくにはということで、東京藝大が力を貸すことになりました。

このようにいろいろなものがお互いに影響していくということ。私、文化庁長官を拝命して早いもので3年を超えようとしているのですけれども、三輪車構想というものをお話させていただいています。三輪車とは、文化、観光、経済。この三つが一体となると、恒久的な発展が見えてくる。特に大事なのが文化がハンドリングを握ること。そうすると、いろいろな経済も観光も連携がとれてくる。ぜひ、皆さんも、このCCNJは、俺のところが一番と、皆さんが思いながら来ていると思うのですけれども、それをより今以上にしていくディスカッションを皆さんでやってくれば更に成功するのかなと、そういう気がしております。

文化庁は新・文化庁になります。松坂事務局長も本日来てくれていますが、京都に創生本部もでございます。いろいろなことをやらせてもらっています。文化庁は、明らかに変化しております。新・文化庁として昨年10月から組織改正もさせていただいております。「文化庁はオモシロイ。」のキーワードでやっています。ユーチューブでぜひ対談動画をご覧になっていただきたいと思っております。

長くなりました。鈴木市長、ありがとうございます。皆さんも、どうぞ素晴らしい成果をお持ち帰りくださって、新たな地方創生の派生になってくださることをお願いしまして私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

**司会** 宮田長官、ありがとうございました。

ここで、鈴木市長、宮田長官は、次の公務の関係でご退席されます。よろしくお願いたします。

それでは、議事に入ります前に、議長の選出に入りたいと思います。事務局案として、浜松市市民部文化振興担当部長の寺田を指名したいと考えております。ご賛同いただける方は、拍手をもって承認いただければと思いますが、いかがでしょうか。

ありがとうございます。それでは、ここからの議事の進行は、寺田部長にお願いしたいと思います。寺田部長、議長席へ移動をお願いいたします。

**議長** 議長に指名されました浜松市市民部文化振興担当部長、寺田聖子でございます。どうぞよろしくお願申し上げます。議事の円滑な進行につきまして、皆様方のご協力をお願い申し上げます、議事を進行してまいりたいと思っております。

最初に、本日の出席会員数について、事務局から報告願います。

**事務局** 事務局を担当しております浜松市市民部創造都市・文化振興課の新山です。

本日の会議の自治体、団体、個人会員の出席者会員数についてご報告します。まず、自治体が54団体。補足として資料1の出席団体にはありませんが、新庄市がご出席いただいております。逆に、大阪市がこちらにはありますが、本日ご欠席となりますので、ご了承ください。続いて、自治体以外の団体が7団体、個人会員様が1名、計62団体・個人の参加となっております。

※最終確認：自治体55、団体7、個人会員1名、議決にかかる定数63、大阪市は出席

**議長** それでは、議案の審議に入りたいと思います。第1号議案「平成30年度事業報告について」、事務局から説明をお願いします。

**事務局** 第1号議案「平成30年度事業報告について」、ご説明します。総会配布資料3「議案書」1ページをご覧ください。また、前方のスクリーンには当日の様子も投影しますので、併せてご覧ください。

まず、「現代芸術の国際展部会in新潟市」についてですが、平成30年8月23日、24日に、新潟市で開催いたしました。現代芸術の国際展部会は平成27年度に設立され、今回の部会で3回目となります。グループミーティングや視察などを行い、国際展に携わる自治体などの職員が課題やノウハウなどを共有することで、各国際展の発展的な継続開催を目指すことを目的としています。今回は、同日に開催しておりました幹事団体会議の後に行われたオプションツアーとして、「水と土の芸術祭2018」のアートプロジェクトの会場の視察を、24日には、同じく「水と土の芸術祭2018」のメイン会場と市民プロジェクトの視察を実施しました。また24日は、部会加盟団体による担当者ミーティン

グを実施しました。このミーティングでは、三つのテーマを設け3名の講師の方にご講演をいただいた後、グループディスカッションを行いました。

次に、議案書2ページ「創造農村ワークショップin石垣市」についてです。こちらは、10月17日、18日に、石垣市で開催しました。テーマを「八重山音楽の国際発信～ユネスコ創造都市（音楽）に向けて」として、一日目は基調講演、パネルディスカッションを行いました。基調講演は、CCNJ顧問佐々木雅幸様より、「離島からの文化発信」をテーマに講演をいただきました。パネルディスカッションでは、沖縄を拠点に音楽活動や研究活動をされている3名のパネラーにご登壇いただきました。二日目は、エクスカーションとして三つのグループに分かれ、それぞれ伝統音楽、工芸のワークショップ、視察を行いました。

次に、議案書3ページ「創造都市政策セミナーin金沢市」についてです。副題を「次代を担う文化の人づくり」として、12月4日、5日に金沢市で開催しました。一日目は、基調講演、パネルディスカッションを実施しました。基調講演では、ニッセイ基礎研究所 研究理事の吉本光宏様より「クリエイティブな人材育成～子どもからプロフェッショナルまで」をテーマに、海外の事例なども交えながらお話いただきました。パネルディスカッションでは、テーマを「創造都市金沢における民間の取組」として、金沢市内外でご活躍されている3名をパネリストにお迎えし、吉本様のファシリテートのもと、活発な議論が展開されました。翌日は、金沢21世紀美術館にて美術館のレクチャーの後、東アジア文化都市2018金沢のコア事業連携企画である展覧会を視察しました。

次に、議案書4ページ「分科会」についてです。分科会は、CCNJのネットワーク拡大とさらなる連携を目的に、一昨年度より各ブロックで実施しており、今年度は四つのブロックで開催しました。内容について、簡単にご報告いたします。

まず、九州・沖縄ブロックですが、8月28日に宮崎県宮崎市で開催された宮崎県主催のアートマネージメント講座の際に、文化庁よりCCNJの活動についてご紹介、ご説明させていただくことで代えさせていただきます。

次に、北海道・東北ブロックですが、11月8日、9日に札幌市で開催いたしました。北海道・東北ブロックの各地域で創造性を活かした取り組みをしている5名を招へいし、事例紹介を行っていただいたほか、文化庁より文化庁の機能強化と地方における文化行政の状況をお話いただきました。

次に、北陸・東海・近畿ブロックですが、12月4日に石川県金沢市で、高岡市により開催されました。こちらも、文化庁より文化庁の機能強化と地方における文化行政の状況をお話いただき、参加自治体の取り組み状況をそれぞれ発表いただきました。

次に、関東・甲信越ブロックですが、これは年が明けまして平成31年1月15日に、千葉県松戸市で開催いたしました。松戸市の取り組みの一つである「アーティスト・イ

ン・レジデンス」や、国際フェスティバルについて講演をいただいたほか、「日本の文化政策の転換点」と題してのトークセッションや、文化庁より文化庁の機能強化のお話、また一般社団法人地域創造からの説明も行われました。その講演終了後には、アーティスト・イン・レジデンスの現地視察を行いました。

最後に、中国・四国ブロックですが、こちらは、残念ながら災害の対応等により実施いたしませんでした。

第1号議案「平成30年度事業報告について」は、以上となります。

**議長** 第1号議案の審議につきましては、第2号議案「平成31年度事業計画（案）について」と併せてお諮りしたいと思います。ここで、平成30年度の事業を担当されました各自治体の皆様から、一言ずつちょうだいしたいと思います。最初に、「現代芸術の国際展部会」を開催された新潟市からお願いいたします。

**新潟市** 新潟市文化創造推進課の高野でございます。よろしく申し上げます。

3回目となります現代芸術の国際展部会を、今年の8月、新潟市で開催しておりました「水と土の芸術祭2018」に合わせて開催させていただきました。当日は、新潟県内で観測史上初となる気温40度超えという酷暑でございました。皆様、朦朧とする中、まずはメイン会場でインパクトのある作品を鑑賞して目を覚ましていただきまして、その後、「水と土の芸術祭」の大きな特徴であります市民自らが独自に企画運営する市民プロジェクトに足を運んでもらいました。ここでは、実際にプロジェクトを実施している市民の方からお話を聞き、開催中ならではの生の声や姿をご紹介しますことができました。

また、文化庁や顧問の佐々木先生、それからその道の先端をいくファシリテーターの方々にご協力をいただきまして、担当者ミーティングも開催いたしました。議案書の1ページに記載があります三つのテーマに分かれまして、関心のあるテーマを深掘りしていただきました。部会を終えての所感といたしましては、CCNJの会員も年々増えてきておりますし、文化創造にもいろいろな切り口がありますので、国際展部会に限ったことではないと思うのですけれども、いくつかの的を絞ったテーマに分かれて、少し深く入り込んだ意見交換をすると、そういう機会は大切なことなのではないかなと感じました。以上です。ご協力いただきました皆様、大変ありがとうございました。

**議長** 続きまして、「創造農村ワークショップ」を開催されました石垣市、お願いいたします。

**石垣市** 皆様こんにちは。沖縄県石垣市観光文化課でございます。

先ほど、事務局から説明いただいたとおり、昨年10月17日、18日と、石垣島におきまして、「創造農村ワークショッ

「pin石垣市」を開催させていただきました。佐々木先生に基調講演としまして「離島からの文化発信」として、石垣島の可能性についてお話しいただきました。その後、沖縄県内からの文化について、著名な方をお招きして「八重山音楽の国際発信」といたしまして、八重山と海に囲まれた石垣島で受け継がれてきた独自の音楽や地域の文化などについて、パネルディスカッションしていただきました。島で生まれた多様な文化、特に石垣島の音楽を世界に発信しようという動きが高まっておりまして、副題として「ユネスコ創造都市〈音楽〉に向けて」とさせていただきます。また、石垣市の独自の企画といたしまして、ラウンドプレゼンテーションを開催いたしました。プレゼンターとして地元で活躍しているさまざまな分野の方に集まっていたいただきまして、それぞれの取り組みを話していただきました。

本市は、昨年3月に、佐々木先生のご指導をいただきまして、石垣市文化観光振興プランの策定をしております。文化観光によって活力を生み出し、それを未来につないでいこうと再認識いたしましたところでございます。ご参加いただいた皆様には、はるばる遠い石垣島まで足を運んでいただき、改めて御礼を申し上げます。また、日本最南端の石垣市に、このような有意義な時間と場をいただき、ありがとうございました。以上でございます。

**議長** 続いて、「創造都市政策セミナー」を開催されました金沢市、お願いいたします。

**金沢市** 金沢市でございます。

12月4日、5日に金沢で「創造都市政策セミナー」を開催しましたところ、多くの皆様にお越しいただきましてありがとうございました。また、5日には、東アジア文化都市のクロージングイベントも同日に開催いたしました。ご参加いただきました方々に改めてお礼申し上げます。

本市では、工芸を核とした都市の魅力向上に長期に渡り、また重点的に取り組んでおりまして、市内における振興政策に加え、ユネスコ創造都市事業を通じて世界に向けた魅力の発信にも取り組んでいるところでございます。特に昨年は、東アジア文化都市2018の開催都市としまして、工芸家の派遣や文化事業における相互派遣、またさまざまな文化プログラムを集中的に行うなど、都市間の交流も深めてまいりました。セミナーでは、宮田長官をはじめ、佐々木先生ほか、ニッセイ基礎研究所の吉本理事にもお越しいただき、「次代を担う文化の人づくり」をテーマとしまして、基調講演やパネルディスカッションを実施していただきました。その中で、子どもたちの創造性を育んだり、新たなことに挑む空気をつくり出したりする重要性といったことが議論されました。今回のセミナーにおいて、本市が行政のみならず、市民や民間などさまざまな視点から将来に渡り継続的に発展する創造都市の実現に向かう機会とさせていただいたと思っております。また、お越しいただいた方々にとっても、そのような場となったのではないかと感じております。今回、セミナーの開催都市とし

て、このような貴重な場をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

**議長** 続きまして、北海道・東北ブロック分科会を開催されました札幌市、お願いします。

**札幌市** 札幌市では、北海道・東北ブロックの分科会といたしまして、昨年10月に開館しました複合型文化施設であります札幌市民交流プラザを会場に、昨年11月の8日、9日に28名の方の参加を得て分科会を開催しました。八戸市、鶴岡市、それから札幌市から5名のキーパーソンの方に事例紹介としてご登壇いただきまして、併せて文化庁から組織改変の状況とあわせて事業についてご説明をいただきました。未加盟都市からも参加があり、大変刺激になったというご感想をいただきました。

また、この機会に合わせて、11月7日から11日に、札幌駅前通地下歩行空間という、札幌駅と大通駅を結ぶ約500メートルの地下歩道の両側を指定管理により広場空間として活用している場所ですけれども、こちらで五日間、北海道・東北ブロック都市の取組を紹介するパネル展を行いまして、延べ5万人程度の方に目を止めていただきました。また、これに併せて簡単な体験コーナーとして、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄のイタリアの白大理石を彫る体験、それから札幌芸術の森のクラフト工房ではバッジ作り体験を行いまして、こちらも1,000名程度の方にご参加をいただいております。

今回、特に東北地区の幹事団体である八戸市、鶴岡市には、企画段階からご協力をいただきまして、また各加盟団体の皆様のお力添えで実りある分科会、イベントになったと考えております。関係の皆様には、改めてお礼を申し上げます。

**議長** 続いて、北陸・東海・近畿ブロックとなります。高岡市、お願いします。

**高岡市** 北陸・東海・近畿ブロックの分科会の報告をさせていただきます。高岡市でございます。

こちらのブロックでは、12月4日、5日に金沢市で開催されました政策セミナーと同じ日程で、併せて分科会を開催させていただきました。まず基調講演ということで、「新・文化庁について」というタイトルで、文化庁地域文化創生本部の松坂事務局長から強化の方向をお話しいただきました。これまで文化庁がターゲットとしてきた領域の新たな分野への展開であるとか、それからこれまで対象としてこなかった領域を広げるような方向の、二つの方向があるのだよということをお聞きいただきまして、参考になりました。その後、22名11の自治体からご参加いただいていたのですが、すべての自治体の皆様に一言ずつ、短い時間ではありましたが、最近取り組んでいる取組や課題をお話しいただきました。それぞれの工夫や課題を共有することができ、ネットワーク強

化につながったと考えております。

政策セミナーと同じ日付だったということで、会場や日程の調整にご協力いただきました金沢市に改めてお礼申し上げます。そして、講演の内容等の調整をいただきました文化庁地域文化創生本部の皆様にも感謝申し上げます。こういう総会ではなかなか全員の方の声を聞くということができないのですけれども、分科会ということをやると、短い時間ではあります但对話ができ今後、簡単に電話やメールでもやり取りができるような関係づくりにつながったかなと思っております。来年度以降も、ぜひ皆さん、分科会にも積極的にご参加いただきまして、CCNJの強化にご協力いただければと思います。ありがとうございます。

**議長** 続きまして、関東・甲信越ブロック分科会を開催されました松戸市、お願いします。

**松戸市** 関東・甲信越ブロックでございます。松戸市文化観光国際課長の白井と申します。よろしくお願いたします。

日程といたしましては、今月の15日ということで、非常に押し迫ってからの開催となってしまいました。内容といたしましては、先ほどご案内がありましたとおり、最初に松戸市の事例紹介ということで、松戸市で5年前から実施しておりますアーティスト・イン・レジデンスの「PARADISE AIR」の事例の紹介、そして昨年初めて開催いたしましたオーストリアのリンツ市にあるメディアアートの機関でありますアルス・エレクトロニカ等からアーティストを招へいし開催いたしました「科学と芸術の丘」の事例を、それぞれ団体の代表の方から事例紹介いただきました。松戸市の特徴として、お二人とも30代でディレクターをやっていたいておまして、こうした若い方々が活躍できるというようなところがあるのかなと思っております。その後、文化庁の説明といたしまして、山口様からご説明をいただきまして、続いて、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの太下様、アーツカウンシル新潟の杉浦様に、対談形式で「日本の文化政策の転換点」と題しまして、非常にフランクに対談をしていただきました。また一般財団法人地域創造、これは文化庁の山口様からのご紹介もございまして、新たな取り組みといたしまして、地域創造の取り組みもCCNJの中でご紹介させていただいたという形になっております。

少し蛇足になりますが、懇親会の場合では、実は「PARADISE AIR」に滞在していたドイツの若手のアーティスト4名ですとか、ブラジルやスウェーデンの夫婦のアーティスト、こういう人も交えて楽しく懇親会をすることもできまして、開催にあたりましては、同じ関東ブロックの横浜市や豊島区、そして事務局のアーツカウンシル新潟の皆さんに大変ご協力いただきまして、ありがとうございます。また、来ていただいた皆さん、大変ありがとうございます。

**議長** それでは、引き続き第2号議案です。そちらに進みたいと思います。事務局より、第2号議案「平成31年度事業計画（案）について」、説明をお願いします。

**事務局** それでは、第2号議案「平成31年度事業計画（案）について」ご説明します。総会配布資料3「議案書」の6ページをご覧ください。来年度の各事業の開催地、日程についてご確認いただければと思います。

順番にご説明いたします。来年度の事業につきましては、まず、この「ネットワーク会議総会」です。こちらが、平成32年1月から3月の間で、また同じ浜松市で開催する予定です。続いて2番目の「創造都市政策セミナー」、こちらは平成31年10月から11月頃ということで、東京都豊島区で開催します。なお、こちらは、「東アジア文化都市2019豊島」と連携しての開催をご検討中ということになります。続きまして、3番の「創造農村ワークショップ」ですが、こちらは平成31年9月頃、兵庫県豊岡市で開催する予定です。続いて4番「現代芸術の国際展部会」ですが、こちらは平成31年の秋ごろ、山口県の宇部市で開催予定になっています。5番の「分科会」につきましては、また順次開催を希望するブロックで実施を検討していきたいと思っております。6番「その他」です。こちらは、CCNJの規約第4条に掲げる事業、(1) 創造都市ネットワーク会議（総会）の開催など、国内の創造都市間の連携・交流に関すること。(2) 自治体職員やNPOなど、創造都市の担い手の研修や人材育成に関すること。(3) Webサイトの運営による創造都市関連情報の提供・交流に関すること。(4) 海外の創造都市との交流、国際ネットワークとの連携に関すること。(5) 創造都市政策に関する調査研究、提言に関すること。これらにちなんで事業を行うことも検討しています。

なお、こちらの1から5までの事業の開催時期は、現時点ではすべて予定とさせていただいておまして、また詳細が決定次第、CCNJのホームページ及びCCNJのメルニュースで皆様に通知をさせていただきたいと思っております。

第2号議案「平成31年度事業計画（案）について」は、以上となります。

**議長** ありがとうございます。ただいま事務局の説明につきまして、先ほどの第1号議案と併せて、ご意見、ご質問のある方は挙手をお願いいたします。よろしいでしょうか。

それでは、まず第1号議案「平成30年度事業報告について」お諮りします。本ネットワークの規約第10条第3項の規定により、総会にご出席の構成員の過半数をもって議決となります。先ほど報告を受けましたとおり、本日の出席会員数は62ですので、過半数は32となります。では、採決の方法については、各団体代表1名及び個人会員の方の挙手にて行わせていただきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

議案に賛成の方は、挙手をお願いいたします。

ありがとうございます。賛成多数ですので、第1号議案

は承認とされました。

続きまして、第2号議案「平成31年度事業計画（案）について」お諮りします。第2号議案に賛成の方は、挙手をお願いいたします。

ありがとうございます。賛成多数ということで、第2号議案も承認とされました。

それでは、来年度事業として承認されました各事業の開催自治体、開催に向けた意気込み、PRなど、一言ずつお願いしたいと思います。まずは創造都市政策セミナーの開催となります豊島区よりお願いいたします。

**豊島区** 豊島区の文化デザイン課の柳下でございます。よろしく申し上げます。

今日は、創造都市政策セミナーの開催にご承認をいただきまして、ありがとうございます。皆様のお手元にあるかと思いますが、このピンク色の表紙の資料を開いていただきますと、A4三枚分の大きさに広がりますけれども、こちらが、実は今年の1月より豊島区で開催しております「東アジア文化都市2019豊島」の年間プログラムとなっております。開いていただくと、2月1日、明日の開幕式典というところからスタートいたしまして、11月24日が閉幕式典ということで、いろいろイベントが並んでいるところでございます。今回の「創造都市政策セミナー」につきましては、10月から11月頃の開催予定とさせていただいております。こちらのプログラムでいいますと、10月となっているところ、この「御会式と鬼子母神にまつわる演劇プロジェクト」、あるいは11月の「としま国際マンガ・アニメ際（仮）」ですけれども、この辺りのイベントと連動するような形で「創造都市政策セミナー」を開催させていただければと思っております。

豊島区は、舞台芸術が盛んなまちと称しております、フェスティバル・トーキョーといった国際的な演劇祭も開催されております。また、かの有名な手塚治虫さんや藤子・F・不二雄さんなどが活躍されたトキワ荘がかつてあったまちということもございまして、マンガ・アニメといったテーマを東アジア文化都市の主要なテーマに掲げております。また、もちろんそこに豊島区固有の祭事・芸能、そういったものを加えまして、その三本柱で東アジア文化都市の開催を予定しているところなのですけれども、創造都市政策セミナーでそういったところを皆様に見ていただきながら、豊島区のいいところを持ち帰っていただくと、CCNJの益々の発展に資することができればと考えておりますので、どうぞよろしく申し上げます。以上でございます。ありがとうございます。

**議長** 続きまして、宇部市ですが、「創造農村ワークショップ」を開催いただきます。

**豊岡市** 皆さん、こんにちは。豊岡市の若森と申します。「創造農村ワークショップ」の開催地として、意気込みをアピールさせていただきます。豊岡市には、城崎国際

アートセンターがございます。パフォーミングアーツに特化したアーティスト・イン・レジデンスの施設です。この芸術監督を務めていただいたご縁で、平田オリザさんが豊岡市に移住されることが決まり、そして劇団青年団も豊岡に本部機能を移転されることを表明されました。まだ稽古場を作ろうとしている状況ですけれども、平田さんは、豊岡に来たら、ぜひ国際演劇祭を豊岡で開催したいとおっしゃっておられまして、予定ではございますが、平成31年度からプレの国際演劇祭を開催しようとしております。そのプレの国際演劇祭に合わせて、今回の創造農村ワークショップを開催したいと思っております。城崎国際アートセンターで会議等をしていただいて、城崎温泉に泊まっていたら、浴衣と下駄でまち歩きをしながら、七つの外湯、温泉を巡っていただく。素敵なワークショップになるかと思っております。値段によってはございますが、日本海の美味しい海の幸や但馬牛などもお召し上がりいただきたいと思っております。

その翌日に、近畿最古の芝居小屋でございます「出石永楽館」で開催されると思われる国際演劇祭をご覧いただき、また、コウノトリの野生復帰にも取り組んでおりますので、そちらの施設もご覧いただくのかなと思っております。何分、演劇祭と同時でございますので、十分なおもてなし等はできないかもしれません。兵庫県が豊岡市にアートマネジメントなどを学ぶ専門職大学を開設しようとしておりまして、そのお話もさせていただけると思っております。

新しいことにどんどん取り組んでおります。皆様の自治体や団体の何らかの参考になるかもしれません。ぜひお越しくださいますよう、お願い申し上げます。ありがとうございます。

**議長** 続きまして、宇部市です。「現代芸術の国際展部会」を開催いただきます。

**宇部市** お世話になります。山口県宇部市文化・スポーツ振興課の安光と申します。

先ほどは、平成31年度の「現代芸術の国際展部会」の開催地としてご承認いただきました。誠にありがとうございます。私ども宇部市は、戦後のまちの復興と、当時世界一と謳われました「ばいじん公害」等の問題を克服する過程におきまして、日本で初めて「彫刻によるまちづくり」に取り組んでまいりました。現在もその精神を受け継ぎまして、世界でもっとも歴史のある野外彫刻の国際コンクールであります「UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」を開催しております。今年は、このビエンナーレが第28回目の年となります。今年の会期は、9月29日から11月24日、57日間の予定で開催いたします。会場は、宇部市を代表いたします広大な湖と豊かな緑に囲まれた「ときわ公園」を舞台に開催いたします。さらに、この「UBEビエンナーレ」に加えて、中心市街地を会場に「まちなかアートフェスタ」、北部の中山間地域を会場に「うべの里アートフェスタ」、文化活動を行う市民や団体の方々の発表、それか

ら観賞、体験、そういった場であります「宇部市芸術祭」、これら四つのイベントを連携させました「まちじゅうアートフェスタ」を開催いたします。今回の「現代芸術の国際展部会」につきましては、この「まちじゅうアートフェスタ」、「UBEビエンナーレ」を中心として、この会期中に開催させていただければと思っております。ぜひ、この機会に多くの皆様方に「緑と花と彫刻のまち宇部市」に足をお運びいただきまして、「宇部市のアートによるまちづくり」を肌で感じていただけたらと思っております。宇部は、海の幸も美味しいです。山の幸もあります。それから、美味しい日本酒もございませう。ぜひ皆様、宇部に一度お越しただけたらと思っております。ご来訪をお待ちしております。よろしく申し上げます。

**議長** 平成31年度も、皆様と積極的な交流が図れることを願っております。

以上をもちまして、議案審議を終わります。皆様方には、円滑な進行にご協力を賜りましたこと、誠にありがとうございます。ここからは、事務局にマイクをお返しします。お願いいたします。

**司会** ありがとうございます。

続きまして、その他でございますが、文化庁から報告・連絡がございます。文化庁地域文化創生本部事務局総括・政策研究グループ調査役、山口憲二郎様、お願いいたします。

#### 文化庁：山口憲二郎調査役

皆さん、こんにちは。京都にあります文化庁地域文化創生本部から来させていただきます山口でございます。文化芸術創造都市政策につきまして、昨年10月の文化庁の組織、そして業務の見直しの中で、10月から京都の地域文化創生本部が担当しておりますので、私から文化庁の報告・連絡ということで、皆様に情報提供をさせていただきたいと思っております。スクリーンは使わずに、配布しております資料4というカラーコピーの資料で説明をさせていただきます。

私からは、この資料4に基づきまして主に3点、一つが文化庁の京都移転に向けた機能強化の動き、二つ目が2019年度の文化庁の予算案、三つ目として2019年度の文化庁関係の大きなイベント等について、ご紹介させていただきます。私の説明の後に、平成30年度文化庁委託事業で、CCNJの現状と課題、そして今後のあり方についての提言というものをコンサルタントいただいておりますので、この提言内容につきましても、今回、この場をお借りしまして皆さんと共有させていただきたいと思っております。

まず、2ページをご覧くださいと思います。こちらが、文化庁の京都移転の関係の工程表でございます。文化庁の京都移転ですが、遅くとも2021年度までにということ決定しておりますので、その全体の流れをまとめた資料がこちらです。詳細については時間の都合で説明しません

ので、後ほどご覧いただけたらと思っております。

全体の移転といたしましては2021年度中ということですが、既に一部の取り組みが始まっております。2017年4月に、私もそのメンバーなのですが、京都市東山区に地域文化創生本部という組織ができております。全面的な移転の前段階ということで、40人規模の事務所で業務を進めております。どのようなことをしているのかは、後ほど説明させていただきたいと思っております。

4ページの資料です。こちらは、京都だけでなく文化庁の全体の、宮田長官も先ほどの挨拶の中で言われていましたが、昨年10月の組織改正についてです。一昨年6月の文化芸術基本法の改正、そして京都移転ということも踏まえまして、機能強化を図ることを目的に10月に組織の改正をしています。ポイントは、これまでですと、文化芸術、文化財、その他という形で部制を敷いていたのですが、10月以降は、例えば文化資源の活用であったり、保護であったり、こういう機能面に着目して組織の見直しをしているところがございます。

5ページについては、10月からの新しくなった組織の事務分担、6ページが、新・文化庁についての機能強化の要点をまとめてございます。こちらについては後ほどご覧いただけたらと思っております。

2点目の情報提供といたしまして、予算の話させていただきます。2019年度の文化庁予算（案）ということで、閣議決定をいただき、国会で審議をいただいているところですが、こちらの予算のポイントとして3点ご紹介させていただきます。2019年度予算（案）、1,167億円ということで案が出ているところなのですが、こちらの1点目の特徴といたしましては、文化庁としては過去最大の額となっております。財政厳しい中で、文化はやはり大事だということで、大きく増加、85億円の増という数字をいただいているところがございます。

2点目が、その増加の要因といえますか、財源です。この予算（案）1,167億円の事業費の100億円が、いわゆる観光庁の出国税財源を充当していただいているところがございます。2018年度には、もちろん出国税が年間を通じて徴収されてないということもありましたので、5億円の充当だったものが、2019年度は100億円という大きな充当額をいただいているところです。

3点目なのですが、この資料にあります主要事項として4点ほど、例えば1としては磨き上げによる好循環といったような形で、主要事項を4点並べております。こちらの組み立てが大きく変わったといえますか、通常、2018年度まででしたら、まず文化芸術があって、次に文化財、そして活用とか国際発信という柱は3番目にきていたところですが、そして4番目に国立文化施設の運営という形でくるのですが、今回、先ほど説明しました文化庁の機能強化、組織改正等を踏まえまして、1番目にこの活用等の柱を挙げしております。

8ページは、地域文化創生本部の所管している自治体関係の事業をまとめております。ご覧いただいたらわかると

思うのですが、文化芸術、そして文化財、そして伝統文化にかかわらず、ここは自治体の皆さんの支援事業のソフトの関係、そしてロットの大きなものについては、創生本部が特にこの10月以降所管する事業が増えているということがわかっていただけたと思います。ややもすると、創生本部は、関西だけ、京都だけというイメージがあるかもしれないのですが、今後は、皆様方全国の自治体とのつながりというものが深くなるということをご理解いただけたらと思います。

9ページです。地域文化創生本部の事業が増えることに合わせまして、特に東日本の皆様方に不便が生じないようにということで、文化庁といたしましては、テレビ会議システムを自治体の皆様にも開放してございます。東京にもありますし、京都で日常の情報交換ということで我々が活用しているものですが、こちらにつきまして、自治体の皆さんにもテレビ会議の使用を開放いたしますので、例えばヒアリングとか、補助金に関する打合せとかの際には、ご相談いただけたらと思っております。以上が、予算の関係でございます。

10ページ以降は、2019年度の文化庁が力を入れているイベント等の紹介ということで、3点ご紹介させていただきます。一つが、この10ページでございます「日本博」という取り組みでございます。こちらについては、総理からご指示をいただいているもので、オリンピック・パラリンピックを契機としまして、日本人の美意識、価値観を国内外に発信していく取り組みを、国を挙げてこの機会にやっというものでございます。基本的には国で主導していくのですが、自治体の皆様との関係でいきますと、12ページの下の方なのですが、日本博の枠組み、イメージ②というところなのですが、日本博関連の事業として、自治体の皆様等にこれから公募をかけていくこととなります。また、タイアップの認定申請ということも検討、企画しております。詳細につきましては、現在、文化庁の担当課で検討中でございますので、内容が固まり次第、皆様方にもお知らせしていきたいと思っておりますので、留意をお願いしたいと思います。日本全国各地で盛り上げていこうということでございます。

説明を続けますが、13ページをご覧くださいと思います。「ICOM京都大会2019」ということで、こちらは、今年9月に京都で博物館の専門家3,000人を集めた国際的な会議を日本で開催いたします。国内では初開催ということで、文化庁としても力を入れておりますので、ご承知おきいただけたらと思います。

14ページから次の最後のページにかけてなのですが、オリンピック・パラリンピックということで、文化プログラムの関係の資料をつけさせていただいております。前年になりますので、皆さん、もうひと踏ん張りといえますか、鈴木市長のご挨拶にもありましたが、お願いしたいと思います。最後のページには、全国のbeyond2020の取組状況の資料などもつけていますので、よろしく願いいたします。

私からの説明は以上です。冒頭にお話ししましたように、今年度の文化庁委託事業ということで、文化芸術創造都市のCCNJに関わる現状と課題、そして方向性についての提言を、一般社団法人芸術と創造にいただいております。本日は、綿江彰禪代表理事にお越しいただいておりますので、せっかくの紹介の機会ということで、皆様とともにこのCCNJの更なる発展に向け、内容を共有させていただきたいと思っております。では、綿江さん、準備ができましたらお願いいたします。

#### 一般社団法人芸術と創造：綿江彰禪代表

こんにちは。芸術と創造の綿江と申します。よろしくお願いたします。

CCNJ及び文化庁が行っている文化芸術創造都市推進事業の現状と今後のあり方に係る問題提起ということでお話しさせていただきます。

私は、昨年度からアドバイザーという立場でCCNJに関わらせて頂いております。そのなかで、昨年度は加盟団体の皆様を対象にアンケートを実施させていただきました。本日の参加者のなかでもお答え頂いた方がいらっしやるかと思っております。

当時の加盟自治体のうち94%と非常に高い回収があったわけですが、この結果や、一部の幹事団体とディスカッションをさせていただきましたので、それらの内容などを踏まえて今日のご報告させていただきたいと思っております。

まず、CCNJへの評価です。CCNJができてから10年近く経つわけですが、その中で何が有益であったかをお聞きしております。様々な項目の中で、他の自治体の取り組みの把握や文化庁の政策の把握のほか、他の自治体との交流ネットワークの構築について有益だとお考えいただいているということが分かります。

このグラフは、平成24年度以降のCCNJ加盟団体数の推移を整理したものです。まだ文化庁のなかで政策目標として存続しているのか怪しいところですが、平成26年3月発表の文化芸術立国中期プランの中で、2020年までにこの自治体数を170に伸ばすという目標を掲げました。平成30年度時点で110自治体の加盟となっておりますので、あと2年でこの目標を達成できるかは分からないところなのですが、加盟自治体数が毎年順調に伸びてきました。しかし、毎年の対前年度の伸び率を見ますと、ここ3年くらいは下落傾向にあります。全体の数が増え、昔ほど新規の加盟を募ることが難しくなっている影響もあるかと思うのですが、新たにCCNJに魅力を感じる自治体が少なくなっているのではないかと懸念するわけです。

次は、CCNJの事業として、今日の総会・ネットワーク会議でありますとか、政策セミナーなど様々な事業を展開しております。それぞれの事業について過去3年間での参加率を整理した表になります。それぞれの年度の一番下の数字は、各年度においていずれかの事業に参加した自治体の割合を示しております。平成29年度は61%、つまり6割の自治体は何らかの事業に参加しているわけですが、一方

で、4割の自治体が全く参加しなかったともいえるわけでございます。

さらにこれを過去3年間で見ると約2割の自治体は何の事業にも参加していない。つまり、先ほど110自治体がCCNJに参加していると申しあげましたが、実際は2割がほぼ休眠状況である。同時に、ほとんどの事業に積極的に参加している自治体というのが大体20くらいあります。これは、ほぼ幹事団体と重複いたしますけれども、つまり2割が非常にアクティブで、同時に運営の負担もこれらの自治体が高いながら、2割が休眠状態である。そして、6割が言い方は悪いですが、フリーライドしているといったそのような構造になっているわけでございます。

CCNJの魅力を高めるために、現在、展開している事業の開催回数をより増やせば良いのではないかとこの考え方があるわけです。これについてもアンケートで調査しており、結果としては、頻度については、「増やしてほしい」という意見が最も多かった「政策セミナー」でもその割合が1割ということで、実は今展開している事業というのは、回数としてはある程度十分であるということをおっしゃっていただいているわけです。

様々な新規の部会の立ち上げへの関心も調査しております。特に多かったのが、「推進している文化芸術分野別の部会」や「目的別の部会」、例えば観光を目的とした創造都市であるとか、移住促進を目的とした創造都市であるとか、そのような目的別に集まる部会というものだったら非常に関心がある。もう少し、分野や目的を同じくした、議論が噛み合う自治体同士で集まって情報共有やディスカッションをしたいという想いを持ってもらえることも分かります。

また、CCNJの枠組みを使って今後どのようなことをやっていきたいかということも聞いています。濃い棒グラフは、先ほど申し上げたように、CCNJの事業に参加度が高い、毎回のように来ていただいている自治体、薄い棒グラフがその他の自治体の結果です。両方ともに似たような傾向なのですけれども、最も多かったのは「文化プログラムに関する情報提供」でした。このアンケートにお答えいただいたのが1年前でしたので、今調査をすると別の結果となるかもしれませんが、当時はこのようなニーズが多かった。また、「創造都市政策事業の評価に関する情報提供・情報交換」も高かった。

あわせて、濃い棒グラフと薄い棒グラフの差分に目を向けていただきたいと思います。いずれの項目に関しても割合に大きな開きがあるのですが、つまり、参加度が高い自治体はかなり問題意識をもって、本当に困っているのだから情報を取りに来ている。特に、評価に関しては2倍近く開きがあるわけです。ある意味、真摯に創造都市政策に取り組んでいるからこそ、評価の必要性も感じ、困っていると。そのくらい、加盟自治体の中でも温度差があるわけです。

いくつか現状をお話致しましたが、結論に移りたいと思います。CCNJが立ち上がったのが平成25年度ですけれど

も、当時、CCNJの目標の1つは、加盟自治体をなるべく増やすことでした。増やすということは、言い換えると創造都市の政策の普及でもあったわけです。そのような観点においては、CCNJは既に十分な成果を上げているわけで、非常に意味がある取り組みであったと思っています。しかし、その間、熱心なCCNJの加盟自治体では、創造都市政策を実際に推進し、様々な障害にぶつかり、悩みながら、歩みをすすめてきたわけでございます。そのような自治体は、今となっては単なる情報提供、お勉強したいということではなくて、打ち手にきちんとつながるより踏み込んだノウハウでありますとか、ネットワーク構築、これを求めておられるのではないかなと思っています。

一方、純粋な情報提供、ほかの自治体はどうやっているのだろうかとか、最近文化庁はどういうことを考えているのかとか、そのような情報を求めている自治体も多くいることも、事実でございます。

つまり、CCNJの加盟自治体が二極化しているのです。非常に踏み込んだものがほしい自治体ととりあえず情報がほしいという自治体に二極化する中で、今後、CCNJとしては今以上の求心力を保ちながら、新たな加盟団体も求めていくという、ある種相反するようなことに取り組んでいく必要があります。そのためには、踏み込んだノウハウの提供と幅広い情報提供、これを両方やっていかなければならない。これが、CCNJの課題であろうと思っています。

では、現状の事業がどうなっているかということなのですが、今申し上げたような幅広い情報提供に関しては、政策セミナーでありますとか総会・ネットワーク会議が準備されています。参加率も事業のなかでは高い。私は幅広い情報提供に関してCCNJは十分に機能していると思っています。今後は、特にアクセスのよい土地を開催場所として、CCNJへの加盟や創造都市政策を進めることのメリットを情報提供して、新規の参加を募っていくということが重要になるわけです。

一方、踏み込んだノウハウの獲得、ネットワーク構築ということでは、創造農村ワークショップでありますとか、国際展部会などが準備されています。分科会もあるにはあるのですが、実質的には地域部会というような色を帯びているのでこの目的には沿っていないと思っています。しかし、皆様お気づきのとおり、先ほど申し上げた分野や目的別といった意味では、様々なニーズがあるのですけれども、実際はこのニーズとこれら行っている事業が必ずしもマッチする形で展開できていないのではないかと思います。今後は、加盟自治体のニーズをより詳細に、きちんと吸い上げて、部会をスクラップ・アンド・ビルドしていくことが、必要なのではないかなと思っています。

今、CCNJの運営事業を、文化庁の委託を受けアーツカウンシル新潟さんが行っておりますけれども、今どのような業務を行っているかということ、基本的には既に決められた事業・会議の運営サポートを行っていただけます。それはそれで非常に価値がある重要なお仕事なわけですけれども、

今後は自治体のニーズを毎年きちんと吸い上げて、自治体同士をマッチングし部会を立ち上げて、運営のアドバイスを行っていく、そのようなコーディネート機能を強化する方向にシフトしていく必要があるのではないかと思います。

各事業・会議の運営自体は、受託事業者であるアーツカウンシル新潟が行うから良いということではなくて、やはりCCNJの主役は皆さんなのですね。皆さん自身がきちんと汗をかきながらそれを運営していくというような、ある種覚悟と自立的なマインドがもっと必要かなと思います。

また、踏み込んだノウハウの獲得、ネットワーク構築の機能をより強化するのであれば、自治体自身も大事なのですけれども、多くの自治体が文化財団をおもちだ思っています。既に一部は参加されますが、自治体とあわせて文化財団にも積極的に加盟していただいたほうが良いのではないかと考えています。文化財団には、分野を跨ぐ異動は少なく、ノウハウが非常に貯まっていく。実際、地域アーツカウンシルなどでは、運営主体を文化財団が担うケースが多くなっていく。今後もう少しCCNJの求心力を高めるといった意味においては、文化財団を巻き込んでいく、このようなこともあわせて提言したいと思っております。

私からは、以上でございます。ありがとうございます。

#### 文化庁：山口調査役

ありがとうございました。皆さん、いろいろ感想があるかと思いますが、会議の時間の都合がありますので、後ほどの意見交換会の場に、我々もおりますので、その中でご意見などをいただきたいと思います。

**司会** それでは、全体を通じまして、顧問の佐々木先生から総括をお願いしたいと思います。

#### 佐々木雅幸顧問

佐々木です。

少し視野の広い話をさせていただきます。創造都市という動きは、2004年にユネスコがグローバルネットワークを提唱いたしました。このときは、グローバル化の進行によって文化が画一化する恐れがあると。例えば、映画産業がハリウッドの一人勝ちのようになると、ヨーロッパの映画産業は潰れてしまうのではないかとという危惧があって、今となっては違うのですが、当時はWTO体制ですね、貿易自由化が文化製品にも及んだら大変だということもあって、むしろ地球全体の文化の多様性を守らなければいけない。伸ばさなければいけない。文化の画一化に反対しようという宣言が行われます。文化多様性宣言と文化多様性条約が結ばれて、それにかかわって、創造都市ネットワークというものをユネスコが提唱いたしました。私もそれに最初からかかわっておりまして、日本では8都市がそのネットワークに加盟しました。今、世界では、72か国180という非常に大きなネットワークになっています。

そこで議論されていることを少しだけお話しいたします

と、ご承知のように2015年に国連がSDGsというものを、2030までの目標を決めました。ユネスコは国連の専門機関ですので、当然、そのSDGsにユネスコ創造都市がどのようにアプローチするかということをお大目題にして取り組もうということになっています。CCNJは国内ネットワークで出発していますが、やはり今の世界の大きな流れというものも念頭に置いていただきたいので、アンケートの中にはSDGsに関心ありますかみたいなことも書いておいたのですけれども、広い視野で議論をするということにさせていただきたいと思っています。

併せて、この日本国内のユネスコネットワークの8都市の初めての会合が、昨年の秋に名古屋市の提唱によって行われました。私も名古屋出身なのですけれども、「尾張名古屋は城で持つ」ということで、近世城郭建築史上最高傑作と言われている名古屋城の本丸御殿が見事に再建されまして、そのお披露目を兼ねてユネスコの国内ネットワークの会議が行われました。これはなかなか面白かったですし、本丸御殿は一度ご覧になったほうが良いと思います。それだけの作品に仕上がっていたと思います。

それから、アジアのレベルに目を転じてみますと、2014年から東アジア文化都市事業を開催いたしまして、これはCCNJの加盟の自治体から順に立候補していただいております。横浜、新潟、奈良、京都、金沢、去年は金沢です。本2019年は明日からスタートですが、豊島区が先ほど日本代表としてやられるというお話がありましたが、この東アジア文化都市は、もともと欧州文化都市という1985年から始まっております事業とゆくゆくは連携していこうと、ヨーロッパとアジアをつないでいこうという、そういう大きな構想をもっておりまして、それに向けた準備が段々行われてきております。そうしますと、日中韓の3国の都市を中心に始めてきたものが、さらにヨーロッパとの連携で面白くなるということになります。

実は、CCNJをスタートする段階で、2012年の2月には、チャールズ・ランドリーさんを招いて、世界の動きについて話を聞きました。そして2013年の設立総会の際には、カナダのネットワークですね。当時、クリエイティブ・シティーズ・オブ・ネットワーク・カナダというものがあった、これはCCNCなのですから、我々はそれを模範にしてCCNJにしたわけです。その当時、カナダは設立10年を迎えていて、カナダ全体で130の自治体が参加していた。私どもは今年7年目ですが、今110。ということは、10年経つとカナダくらいに達しそうな段階までできていて、先ほどの綿江さんの言うように2020年までに170は少しきついかもかもしれませんが、しかし、この数年のうちにカナダが10年で達成したレベルまでは何とかいきそうだなと思えます。これは皆さん方とともに、あまり安心ばかりはできませんが、ぜひ質もそうですが、ネットワークの参加数も増やしていきたいと思っています。

以上がグローバルな動きでございます。このユネスコの関係でいきますと、来年度、金沢市でユネスコの七つのジャンルのうちのクラフト&フォークアートというものが

あるのですけれども、これに参加しているのが世界で37都市あるのです。国内では、金沢と丹波篠山です。その二つが加盟していますが、世界37の都市が、秋に金沢に集まる。そうすると、そこでCCNJの皆さん方が参加されると、世界の動きが分かる。

それから、豊島区の方が言われたように、東アジア文化都市の、今年、中国は西安市、それから韓国は仁川です。どちらも力のある文化都市です。この取り組みは、政策セミナーが豊島区で行われるのと、恐らくジョイントで何か国際的なイベントがあるだろうと。つまり、国内の先進事例だけではなくて、海外の世界的なダイナミックな動きということもぜひ視野に入れて、取り組みをしていっていただきたいと思うわけです。

それから、昨年1年間、私もいろいろなイベントに参加させていただいたので、その感想を少しお話ししたいと思います。新潟市で真夏の記録的な暑さの中で、倒れるかと思ったのですけれども、素晴らしい市民プロジェクトですね。水と土の芸術祭、これはもうクローズするようですが、水と土の芸術祭の市民プロジェクト、これはなかなか素晴らしい中身でした。特に都心部ではなくて、新しく合併した周辺部ですね、そこでさまざまなアートプロジェクトがあり、本間さんという方がリーダーでやっておりましたが、これは素晴らしいものでございました。

それから、石垣市で行われた創造農村ワークショップ、さすがに沖縄まで旅費がかかるから参加者は少なかったのですけれども、私の思いとして、数年前に北海道の東川、今日はお見えになっていませんが、写真の町の事業をずっと続けておられました。そこで創造農村ワークショップをやって、北海道で初めて開催したので、いずれ沖縄でやりたいと思っていましたが、いきなり那覇を飛び越えて石垣までいきまして、開催することができて、北から南までこのCCNJというものが広がるという、そういう画期的なイベントになったと思いますし、さらにこのイベントを通じて、石垣市では、ユネスコ創造都市の音楽のジャンルで、この音楽のジャンルというのは、当地がまさに日本の楽器産業が集積している場所ですから、アジアで初めて音楽のユネスコ都市になったのですけれども、新たに八重山ミュージックですね。八重山音楽でやられようとしている。これも、非常に日本のダイナミックで多様な音楽文化というものを発信するよい機会になるということで、楽しみが新たに増えたなと思っています。

少し話題を変えますが、昨年、新しい団体に加盟いただきまして、今日お見えですけれども、宇都宮に創造都市研究センターというものができたのです。宇都宮にあるいくつかの大学が集まってその研究センターをつくられて、そこが加盟されて、今日、来ておられる。これは新しい動きです。実は、創造都市を進めるうえで、大学というものは創造活動のハブになります。これは、リチャード・フロリダの本にも書いてあります。ポローニャの創造都市はポローニャ大学があって、それが中心になっている。例えば、横浜市も横浜市立大学があって、金沢市も金沢美術工

芸大学と連携していますし、豊岡市が新たに観光と演劇の専門職大学をつくられる。それもまさに創造都市のハブとなるのです。そうすると、大学などの研究センターとうまく連携していくというのは、芸術団体やアートNPOとの連携ももちろん大事なだけでなく、それをさらに広め、新しいモデルにしてほしいと思います。

それから、神戸市では、職員の採用枠にデザイン・クリエイティブ枠というものを新たにつくられるということです。神戸市の場合は、ちょうどユネスコ創造都市に加盟して10周年、10周年イベントでグッドデザイン賞イベントの神戸開催を実現され、さらに職員の採用枠に専門的な人たちを迎え入れるということは創造都市政策を定着させるうえで、可能なら全国に広がってほしいと思います。実は、これに先例をつけたのは横浜市で、横浜は都市デザイン室というものを早くから置きました。その都市デザイン室があることによって、横浜の創造都市ビジョンというものが構想され継続されてきたという経緯もあります。ですから、10年くらい創造都市をやっているところは、それぞれに多様な取り組みがありまして、そういったものを総合的に研究し、先ほど言いました同志社大学と文化庁の共同研究の最終年度には、政策担当の方の役に立つような創造都市モデル集とか事例集を作って、あるいは政策評価のツボとかというようなものを作ることができれば、もっと日本全国で創造都市政策が進むのではないかと考えておりますので、ぜひ引き続き皆さんの知恵を集めていただきたいと思います。

以上が、本日の総括であります。どうもありがとうございました。

**司会** それでは、ここで、昨年度の総会により新規にご加盟いただきました10団体ございますが、本日出席いただいている新規団体様を紹介したいと思います。時間の都合上、団体名のみお呼びいたしますので、恐れ入りますが、その場でご起立をお願いいたします。

まず、川越市、群馬県、株式会社地域計画建築研究所、浦安市、それから愛媛県の内子町、宮崎県。このほか、本日は欠席でございますが、那覇市、盛岡市、沖縄県の中城村、香川県の丸亀市が加盟いただいております。

それでは、新規加盟団体を代表いたしまして、内子町の町並・地域振興課長、林慎一郎様からごあいさつをちょうだいしたいと思います。林様、よろしく願います。

#### **内子町：林町並・地域振興課長**

皆さんこんにちは。今回、新たに創造都市ネットワーク会議に参加承認いただきました愛媛県内子町でございます。本来ならば、町長がまいってご挨拶するところでございますけれども、本日、公務で出席することができませんので、僭越ながら九つの自治体等を代表して一言ご挨拶申し上げます。

今回はご承認いただき、誠にありがとうございます。すでに参加いただいている101の自治体、それから40の団体

の皆様方のご指導、ご協力をいただきながら、また連携できるところは連携していきながら、文化創造都市としての責務を果たしていきたいと思っておりますので、今後ともお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

簡単に内子町のご紹介をさせていただきますと、内子町は、愛媛県の県都松山市の南西、そして愛媛県のほぼ中央に位置しております。面積の約8割が山林の、典型的な中山間地域でございます。中心市街地には、製蠟業で栄えた江戸後期から明治期の町並みが残っております八日市・護国地区の重要伝統的建造物群保存地区、それから大正5年に創建され、平成27年に国の重要文化財に指定いただきました内子座などもあり、歴史的、文化的なまちづくりを進めているところでございます。また、平成27年には、内子町の町並み保存、それから内子座の保存活用、また姉妹都市盟約も結んでおりますドイツ、ローテンブルク市との国際交流活動などが評価され、文化長官表彰もいただきました。特に内子座の保存活用におきましては、これから先の50年、100年を見据えて、現在、子どもたちに狂言を学ばせて、内子座の新たな芸能として取り組んでいるところでございます。内子座の100周年事業におきましては、東京の野村家、京都の茂山家、そして地元の小学生が一緒の舞台に出演するという、「東西狂言の競演」と題しまして内子オリジナルの狂言「かみあそび」も創作いたしましたところでございます。また、この「かみあそび」は、一昨年、愛媛国体が開催されたときに、国体のおなりとして秋篠宮眞子さまにもご覧いただき、お褒めの言葉もいただきました。さらに昨年、京都金剛能楽堂での公演をはじめ、さらには来年、東京オリンピックの文化プログラムとして東京での上演も目指しているところでございます。

今後とも、皆様方のお力を借りながら、連携していきながら、文化創造都市としての責務を果たしていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

それから、余談になりますけれども、2月4日月曜日、NHK鶴瓶の家族に乾杯で内子町が紹介されますので、申し上げておきます。本日は、誠にありがとうございました。

**司会** それでは、以上をもちまして、創造都市ネットワーク日本平成30年度ネットワーク会議総会を終了いたします。ありがとうございました。

## ■創造都市ネットワーク会議（総会）資料

作成 一般社団法人 芸術と創造 代表 綿江彰禪氏

平成30年度 創造都市ネットワーク日本 幹事会・総会

### 文化芸術創造都市推進事業の現状と 今後の在り方に係る問題提起

2019/1/31

一般社団法人 芸術と創造 代表 綿江彰禪  
Platform for Arts and Creativity

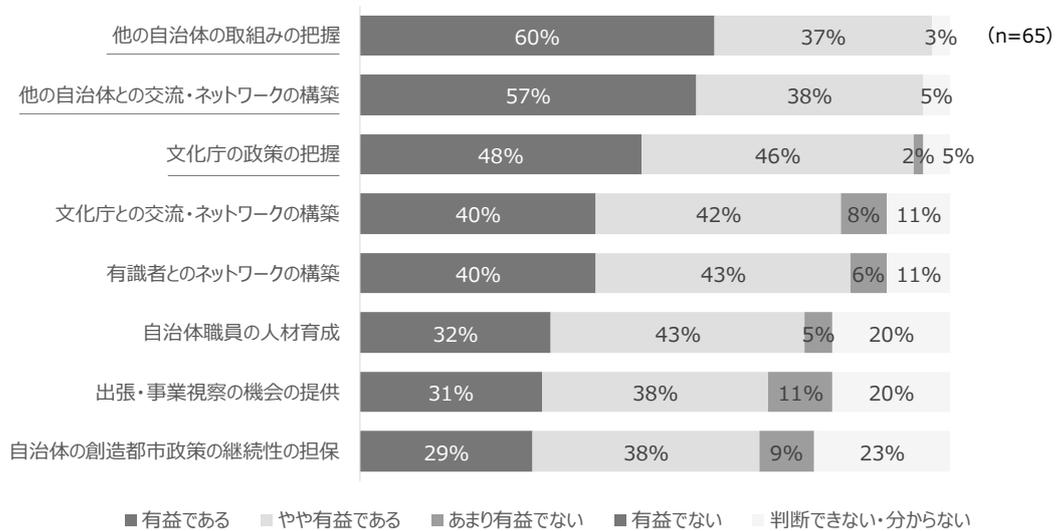
Web: <http://www.pac.asia> E-mail: [watae@pac.asia](mailto:watae@pac.asia)

昨年度CCNJの加盟自治体にアンケートを実施。そのほか、加盟自治体や文化芸術創造都市推進事業運営事業者らともディスカッション。それらの結果を交えながらご報告

配布対象	平成29年11月末時点でCCNJに加盟の全自治体
配布・回収方法	・各自治体の担当者に電子メールにて連絡 ・URLにアクセスしWeb上にて回答
実査期間	平成29年12月13日～12月28日（16日間）
回収数／配布数 （回収率）	92／98 （94%）

### 【文化芸術創造都市推進事業の評価】

➡他自治体の取組や文化庁政策の把握、交流・ネットワーク構築における有益性は高い



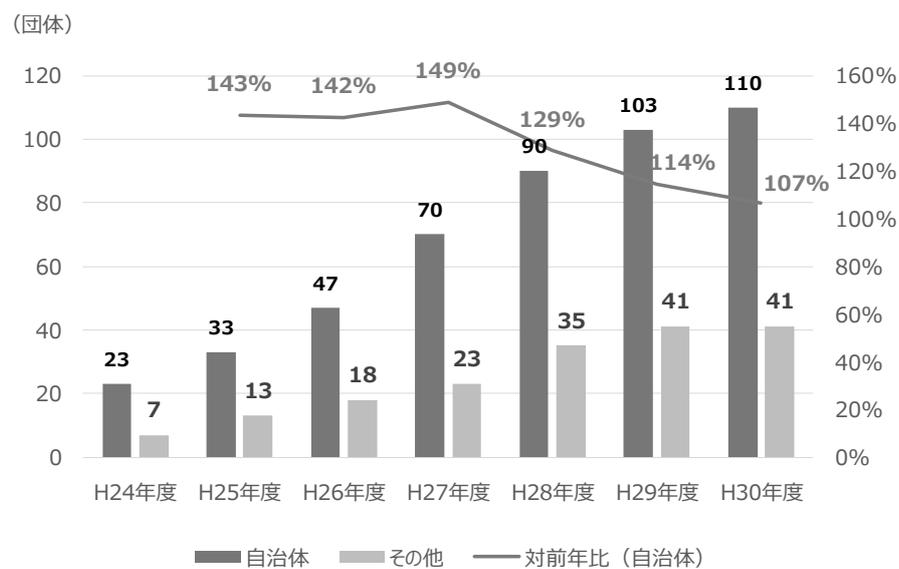
Copyright © Platform for Arts and Creativity All Rights Reserved.

2

### 【CCNJ加盟団体数の推移】

➡毎年団体数は毎年拡大傾向にあるが伸びは鈍化傾向

■文化庁では「文化芸術立国中期プラン」（平成26年3月）にて2020年までに約170自治体の参加を目標としていた



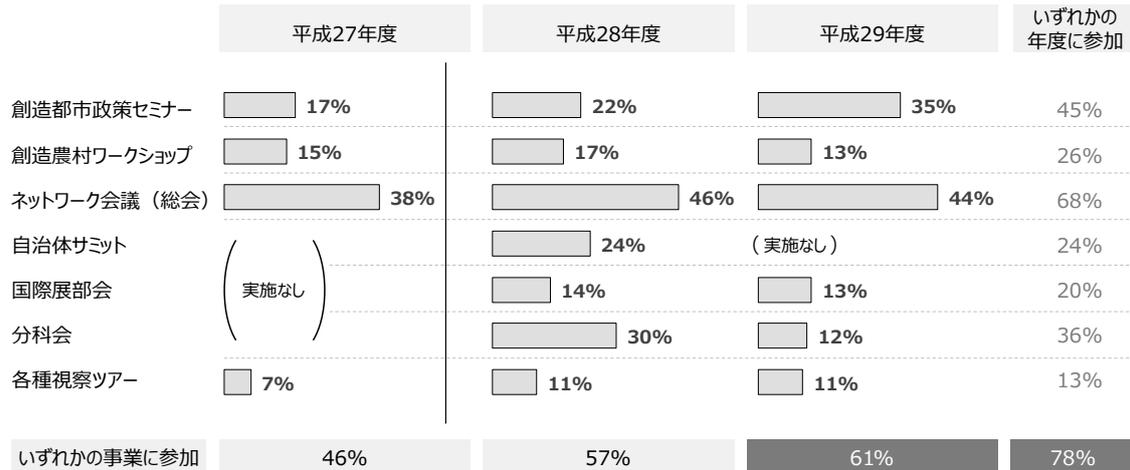
Copyright © Platfon

3

### 【事業別参加状況】

➡年間複数事業に参加している自治体は限られる（求心力の向上も課題）

- 事業への参加度の高い自治体（≒運営の負担も行っている自治体）が約2割、一部事業のみ参加している自治体が約4割、休眠状況にある自治体が約4割
- 事業ごとの参加度も大きい（多くの自治体にとっての参加対象は「創造都市政策セミナー」と「ネットワーク会議」のみ）

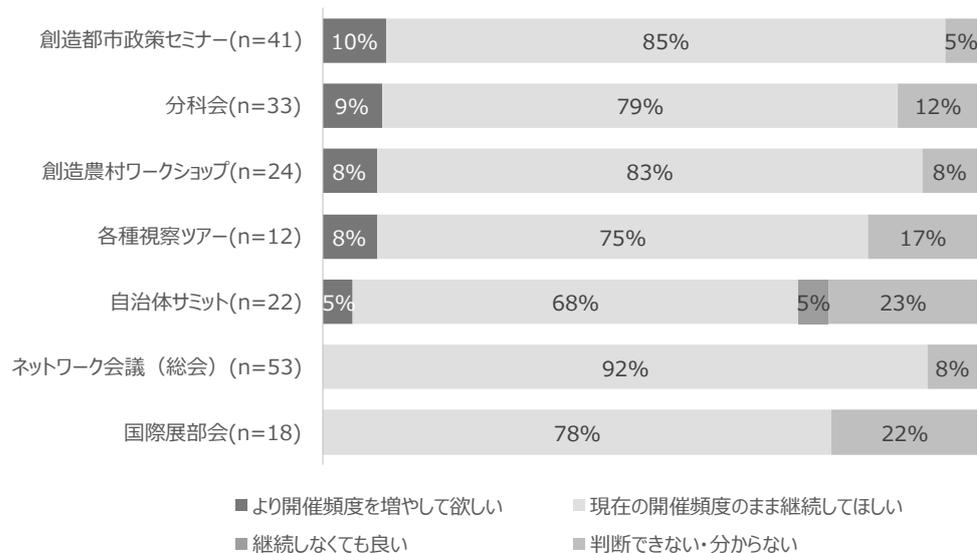


Copyright © Platform for Arts and Creativity All Rights Reserved.

4

### 【事業の開催頻度に係る要望】

➡現在行っている事業に関しては「開催頻度を増やしてほしい」というニーズは限定的

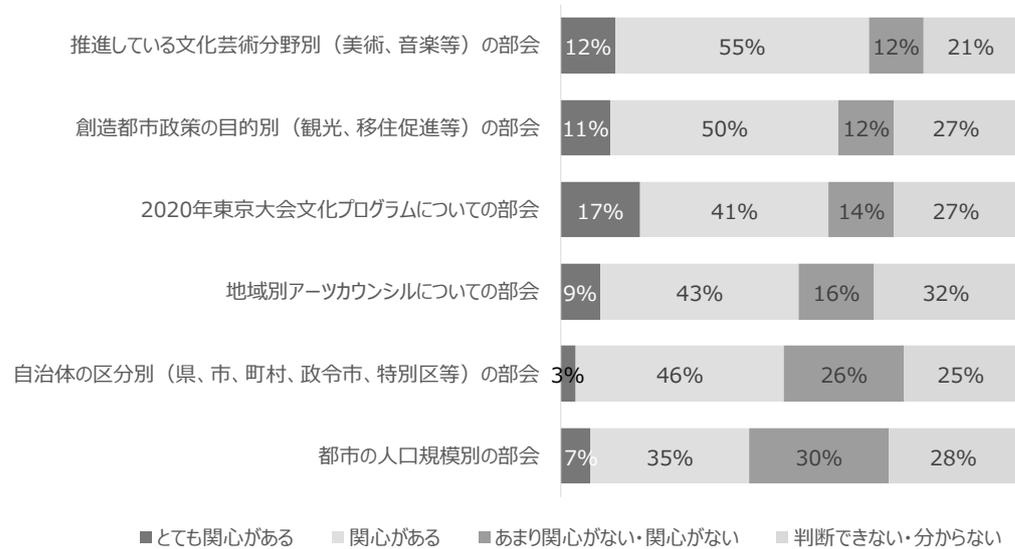


Copyright © Platform for Arts and Creativity All Rights Reserved.

5

**【部会新設に関する関心】**

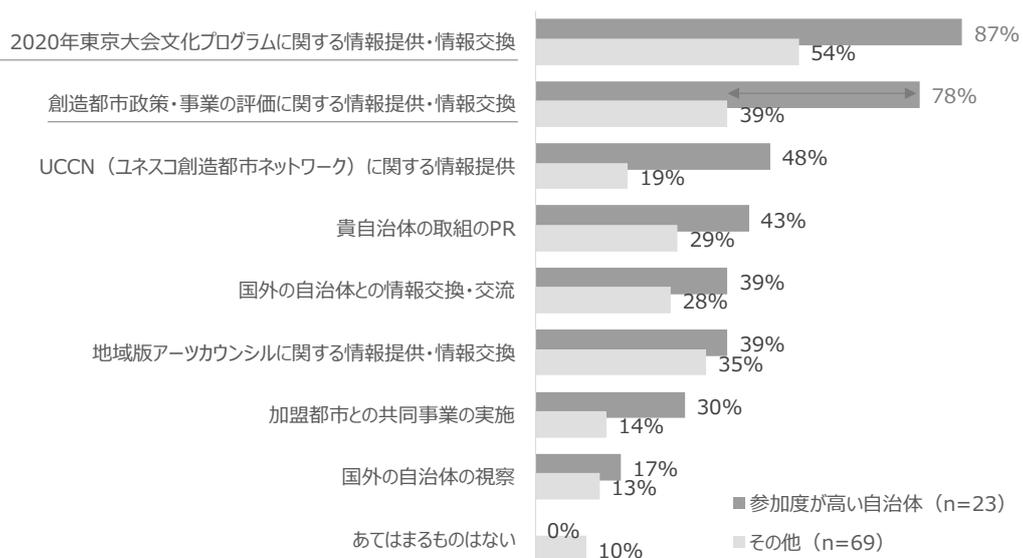
➡全般的に新設へのニーズは高く、特に“分野別”、“目的別”の部会に関心



**【CCNJの枠組みで行いたい・行って欲しい取組み】**

➡“文プロ”や“創造都市の評価”に関する情報提供へのニーズが高い

■同時に“参加度が高い自治体”と“そうでない自治体”の温度差も大きい

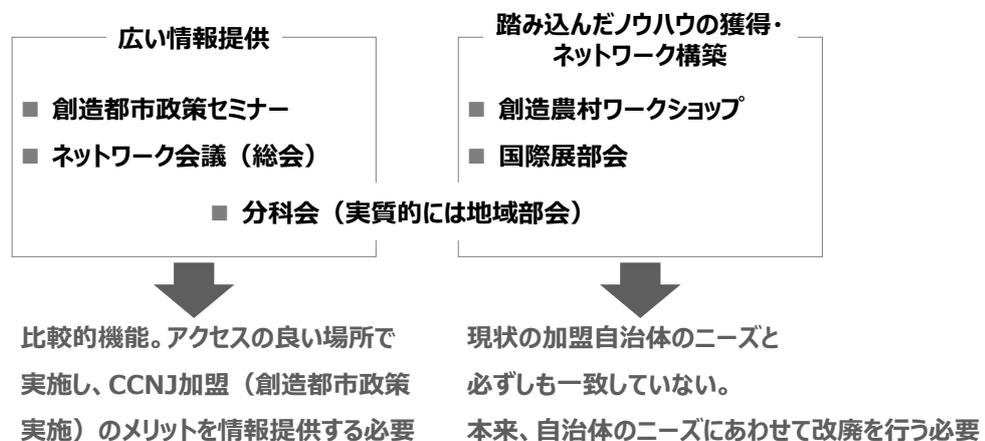


## 問題提起（1 / 3）

- CCNJは平成25年の設立以来、加盟自治体の拡大を目指すとともに、創造都市の概念の普及や情報共有において多大なる貢献をしてきた。
- そのあいだ熱心なCCNJ加盟自治体では、自分たちならではの創造都市政策の在り方を検討し、今では、単なる情報提供ではなく、打ち手につながる、より踏み込んだノウハウの獲得・ネットワーク構築を求めている。
- 一方、  
純粋な情報提供（他自治体や文化庁の動き）を求めている自治体が多く存在することも事実。
- CCNJとして、今以上の求心力を保ち、新たな加盟団体を求めるためには、「踏み込んだノウハウの獲得・ネットワーク構築」、「広い情報提供」の両面を強化する必要がある。

## 問題提起（2 / 3）

- 現状の文化芸術創造都市推進事業の各事業は、以下のような役割を担っていると思われるが、事業の枠組みが定例化しており、「踏み込んだノウハウの獲得・ネットワーク構築」を行うための、自治体のニーズの吸い上げ・事業の改廃がなされていない。



### 問題提起（3 / 3）

---

- 文化庁（及び文化芸術創造都市推進事業受託事業者）は、  
現在のように各種事業の運営者として価値を出すのではなく、  
むしろ、自治体のニーズのコーディネーター機能を強化する必要がある  
（同時に参加自治体もより主体性が求められる）。
- あわせて、「踏み込んだノウハウの獲得・ネットワーク構築」機能をより強化するのであれば、  
現状の自治体主体だけではなく、公的文化財団なども積極的に加盟を促すことも有効  
（地域版アーツカウンシルの運営主体の多くは公的文化財団）。

**CCNJはネクストステージに向けて。**

**ご清聴ありがとうございました。**

発行日 平成31年3月28日  
編集・発行 アーツカウンシル新潟（公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団）  
〒951-8131  
新潟市中央区白山浦1丁目613番地69 新潟市開発公社会館3F  
TEL：025-234-4530  
FAX：025-234-4521  
e-mail artsCouncil@niigata.email.ne.jp  
主催 文化庁

---

本報告書は、文化庁の委託業務として「アーツカウンシル新潟（公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団）」が実施した平成30年度文化芸術創造都市推進事業の成果をとりまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

